

『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈 (3)
— 『キエフ年代記集成』 (1146 ~ 1149 年)

中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香

富山大学人文学部紀要第 63 号抜刷

2015年8月

『イパーチイ年代記』 翻訳と注釈 (3) — 『キエフ年代記集成』 (1146 ~ 1149 年)

中沢敦夫, 吉田俊則, 藤田英実香

(6654 [1146] 年続き)

〔332〕 そのとき、スヴァトスラフ [C43] はユーリイ [D17] に向けて使者を遣った。ユーリイ [D17] はかれ〔スヴァトスラフ〕に対して、かれのために兄弟のイーゴリ [D42] を探すことを〔誓約する〕十字架接吻を行った。そしてユーリイ [D17] は、かれ〔スヴァトスラフ〕を助けるために出発した。

イジャスラフ [D112:I] は、ユーリイ [D17] がスヴァトスラフ [C43] を助けるために〔ノヴゴロド・セヴェルスキイ〕へ向かっていると報を聞いた。そこで、イジャスラフ・ムスチスラヴィチ [D112:I] は、リャザンのロスチスラフ・ヤロスラヴィチ [C54] に向けて、平原を經由して¹⁾ 使者を遣った²⁾。

そして、イジャスラフ [D112:I] 自身は馬に乗ると、スヴァトスラフ [C43] を討伐するためにノヴゴロド〔セヴェルスキイ〕へ向かった。そこには、ウラジーミル [C34] とイジャスラフ [C35] の二人のダヴィド [C3] の息子、かれの息子ムスチスラフ [I1] がいた。

ロスチスラフ [C54] はイジャスラフ・ムスチスラヴィチ [D112:I] 〔の要請〕に聴き従って、かれ〔イジャスラフ〕の領地の防衛を行いはじめた³⁾。

ユーリイ [D17] のもとに、ロスチスラフ [C54] がかれ〔ユーリイ〕の領地を攻め取ろうと

1) キエフからリャザンまでの使者の派遣は、デスナ川からオカ川を經由する水路で到達することも可能だが、途中のヴァティチの地で、使者がユーリイの援軍に捕らえられることを危惧して、ベレヤスラヴリ領内から平原(ステップ)を横断する行路で、使者を派遣したということ。

2) ロスチスラフ [C54] に反抗した甥のウラジーミル [C511] が、1146年にスヴァトスラフ [C43] の陣営に身を寄せており ([イパーチイ年代記 (2): 347 頁, 注 368] 参照)、この時のロスチスラフにとってスヴァトスラフは潜在的な敵手だった。そのため、イジャスラフ [D112:I] はロスチスラフに対して、ユーリイ [D17] の行軍の側面からの妨害・阻止を要請する使者を派遣したのである。

またソロヴィヨフによれば、ロスチスラフ [C54] は、自分の父ヤロスラフ・スヴァトスラヴィチ [C5] を 1128 年にチェルニゴフから追放しており、オレーグ [C4] の息子たちには友好的ではなかったとしている。[Соловьев 1988: С. 431]

3) 「イジャスラフの領地を防衛」する行動とは、次の一節から分かるように、リャザンからユーリイの領地であるロストフ=スズダリ地方へ向けて軍を派遣して、ユーリイの背後を襲い、その動きを牽制することを指している。

しているという知らせが入った。そこで、ユーリイは自分の息子イヴァンコ⁴⁾ [D172] をスヴァトスラフ [C43] のもとへ〔援軍のために〕送り出した。そして、自分自身はコゼリスク⁵⁾ (Козельск) から〔自領地のロストフ＝スーズダリ地方へ〕戻ってしまった。

イヴァンコ・ユーリエヴィチ [D172] は、ノヴゴロド〔・セヴェルススキイ〕のスヴァトスラフ [C43] のところに来た。〔スヴァトスラフは〕かれ〔イヴァンコ〕にクルスク (Курск) をはじめとするセイム川沿岸地方を与えた⁶⁾。

そして、〔スヴァトスラフ [C43] は〕自分の家臣たちと評議して、自分の司祭を使者として、ダヴィドの二人の息子たち〔ウラジーミル [C34] とイジャスラフ [C35]〕のもとに遣って、こう伝えた。「わが、兄弟たちよ。そなたたち二人はわが地を掠奪し、わが家畜の群れとわが兄弟〔イーゴリ [D42]〕を取り上げ、穀物を焼いた。資産を台無しにしまった(…)」⁷⁾

【333】悪魔の中傷によって、二人はそれでは満足しなかった。二人はイーゴリ [D42] が持っていた莫大な物資の倉庫がある村⁸⁾ を襲った。そこには多くの備蓄があり、納屋や地下蔵には酒や蜜酒があり、そこには重い物資、すなわち鉄や銅があった。その量のあまりの多さに、すべてを荷車で運び出すことはできなかった。

ダヴィドの息子たち〔ウラジーミル [C34] とイジャスラフ [C35]〕は、自分たちと兵たちのための分を荷車に積んで奪い取るよう命じ、その後、倉庫と聖ゲオルギー教会⁹⁾、そして倉庫

4) ユーリイのおそらく二番目の息子。父ユーリイとともにスーズダリを出陣した。かれについては、1147年2月に病死したこと他には記録はない。本稿注52を参照。

5) 「コゼリスク」(Козельск) は、オカ(Ока)川の支流ジズドラ(Жиздра)川沿いの城市で、スーズダリ地方とノヴゴロド・セヴェルススキイのほぼ中間地点に位置している。

6) セイム川沿岸の拠点城市「クルスク」は1141年からスヴァトスラフ [C43] の領地になっている(『イパーチイ年代記(2): 324頁』の1141年の記事を参照)。かれはノヴゴロド・セヴェルススキイ防衛戦の直前にもクルスクに立ち寄って、住民に忠誠を誓わせている(『イパーチイ年代記(2): 注362』参照)ことから拠点城市であることがわかる。これをユーリイ [D17] の息子に与えることは、ユーリイの援助を強く頼っていたことを示している。

7) すべての写本について、この個所がおおよそ7行分の文言が欠落している。15世紀の『ヴォスクレセンスカヤ年代記』の並行部分には欠落がなく、その部分を訳すと次のようになる。

「……今、それに加えて、そなたたちはわしまでも殺そうというのか」。二人はこう答えた。『兄〔イーゴリ [C42]〕のことは放っておけ、和議に応ぜよ』。かれ〔スヴァトスラフ [C43]〕は答えた。『わが魂が肉体にあるうちは、兄を見放すことはできない』。[ПСРЛ Т.7, 2001: С. 36]

8) この村の位置については不明だが、イーゴリ [C42] とスヴァトスラフ [C43] の拠点都市であるノヴゴロド・セヴェルススキイの周辺にあることは確かである。ルイバコフによる歴史地図では、「イーゴリの村」(Игорево село)として、デスナ側右岸のノヴゴロド・セヴェルススキイからごく近い、南へ10kmほどの地点にマッピングされている。[Рыбаков 1951]

9) イーゴリ [C42] の手で領地の村に建設された教会。イーゴリの洗礼名が「ユーリイ＝ゲオルギー」と推定されることから(『Войтович 2006: С. 399, прим. 1766; Литвина Успенский 2006: С. 561-562]), かれの守護聖人を祀った家内教会だったのだろう。

付きの脱穀場を焼くように命じた。脱穀場には900束の穀物があった。

ダヴィドの二人の息子イジャスラフ [C35] とウラジーミル [C34] はムスチスラフ・イジャスラヴィチ [I1] と会合し、合議して、イジャスラフ・ムスチスラヴィチ [D112:I] に対して使者を派遣した¹⁰⁾。そしてかれら自身は、キリスト降誕祭¹¹⁾ にプチヴリ¹²⁾ へ向けて進軍を始めた。こうして、かれらは〔プチヴリ〕の城市への突撃を行ったが、プチヴリの住民は、イジャスラフ [D112:I] がキエフの軍勢を率いてやって来るまでは、かれらに降伏することはなかった¹³⁾。かれら〔住民たち〕は城市から出て懸命に戦い、ダヴィドの二人の息子たちはやって来て、かれらに向かって言った。「戦いはやめよ。われらは、お前たちを捕虜にとらないことを、聖なる聖母〔のイコンに〕接吻して〔誓おう〕」。しかし、かれら〔住民たち〕は、かれらに降伏しなかった。

イジャスラフ・ムスチスラヴィチ [D112:I] は、自分の部隊を率いてかれらのところに到着した。かれら〔プチヴリの住民たち〕はイジャスラフ・ムスチスラヴィチ [D112:I] に使者を派遣して、かれに拝礼して¹⁴⁾、このように言った。「公よ、われらはあなたを待っていました。われらに対して十字架接吻〔の誓い〕をせよ¹⁵⁾」。イジャスラフ [D112:I] はかれらに対して十字架接吻〔の誓い〕をなし、かれらの代官¹⁶⁾ を連れ去ると、自分の代官をかれらのもとに据えた。

また、そこ〔プチヴリの城内〕にあったスヴァトスラフ [C43] の倉庫は、**[334]** 四つに分けられた¹⁷⁾。また、家畜小屋、納屋、物置のような資産も〔四つに分けられた〕。地下蔵には

10) ダヴィドの二人の息子は、ノヴゴロド・セヴェルスキイの城を陥落できなかったため、自分たちは転戦してプチヴリ城へと向かい、キエフのイジャスラフ [D112:I] にも使者を遣って、プチヴリへの遠征を要請したのである。

11) 1146年12月25日に相当する。

12) 「プチヴリ」(Путивль) はセイム(Сейм)川沿岸にあるチェルニゴフ公領の主要都市のひとつで、当時はスヴァトスラフ [C43] の公領としてかれの代官が置かれていた。

13) プチヴリ人がダヴィドの二人の息子に強く抵抗しながら、イジャスラフには城市を明け渡した理由について、ソロヴィヨフは、ドニエプル川の左岸地方では、スヴァトスラフ [C] の家門の者は概して好まれない傾向にあったと説明している。[Соловьев 1988: С. 431]

14) 「拝礼」は城市を明け渡すときの儀礼。

15) さきにダヴィドの二人の息子が提案したように、降伏した場合には住民を捕虜に獲らないことを誓う内容の十字架接吻のこと。

16) それまでプチヴリの支配公だったスヴァトスラフ [C43] によって置かれていた代官のこと。

17) プチヴリを攻めた主要な四人の公である、イジャスラフ [D112:I] と息子のムスチスラフ [I1]、ダヴィドの二人の息子(イジャスラフ [C35] とウラジーミル [C34]) が掠奪品を分け合ったということだろう。

500 ベルコフスク¹⁸⁾の蜜酒、酒瓶 80 本があった。主の昇天教会にあったものは、みな剥がすように奪われた。それは、銀製の容器、奉獻台の覆い布、奉事用の〔絹の〕布（これらはみな金糸の刺繍がある）、2 台の蠟燭台、香炉、表装した福音書、書物、鐘などであり、公〔スヴァトスラフ〕の財産は何一つ残されることはなかった。みな分けられ、700 人の奴隷¹⁹⁾もまた同様だった。

スヴァトスラフ [C43] のところ²⁰⁾に報告もたらされた。イジャスラフ・ムスチスラヴィチ [D112:I] がやってきて、〔プチヴリの〕城市を攻略し、城内のすべてのスヴァトスラフ [C43] のものを奪い取ったという。また、かつてはかれの父〔オレーグ・スヴァトスラヴィチ [C4]〕の家臣で、いまはウラジーミル [C34] のところにいる男²¹⁾から、イジャスラフ [D112:I] 自身が進軍して来て、ノヴゴロド〔セヴェルスキイ〕を包囲しようとしているという知らせが、かれ〔スヴァトスラフ [C43]〕のもとに届けられた。スヴァトスラフ [C43] はこのことを、イヴァンコ・ユーリエヴィチ [D172] と²²⁾イワン・ロスチスラヴィチ・ベルラドニク [A1221]、自分の従士たち、原野のポロヴェツ人²³⁾である母方の伯叔父たち²⁴⁾、〔すなわち〕チュンラク・オスロコヴィチ (Тюнрак Осулокович) とその兄弟のカモサ (Камоса) 等に告げて、こう言った。「わしを討とうして、イジャスラフ・ムスチスラヴィチ [D112:I] がやって来る。自分たちのことに

18) 「ベルコヴェフスク」(берковск)は「ベルコヴェツ」(берковец)とも言い、当時の重量単位でブード(пуд)の10倍に相当する[СлРЯ XI-XVII, Вып.1: С. 147]が実重量は不明。後代(17世紀頃)の1ブード = 16.4kg 換算では500ベルコヴェフスクは82トンになり、蜜酒の量としては多すぎることから、当時のブードはかなり軽かったのだろう。

19) 「奴隷」(челядь)の語は『原初年代記』912年のオレーグとビザンティン皇帝との協定書の文言に最初に売買の対象としての奴隷として言及され、それ以降の年代記記事でも奴隷とするために捕獲した戦争捕虜の意味で使われている。ここでも、住民とは別に、城市内で使役されていた戦争捕虜出身の奴隷たちを指しているのだろう。なお、この語については、邦語の研究がある。[石戸谷 1963][石戸谷 1980: 93 ~ 135 頁]

20) この時点でスヴァトスラフ [C43] はノヴゴロド・セヴェルスキイの城内で籠城軍の指揮を執っていた。

21) 665(1147)年の項に、スヴァトスラフ [C43] に同行していた「かれの父の家臣ピョートル・イリイチ」がネリンスク付近で90歳で没したという記事がある。これと同じ人物である可能性が高いだろう。本稿注 67 を参照。

22) 『ヴォスクレセンスキイ年代記』の並行記事では、ここに「ウラジーミル・スヴァトスラヴィチ [C511] へ」(Володимеру Святославичю)と名前が追加されている。

23) ドン川とドニエステル川に挟まれたステップ地帯に展開し、ルーシに服属していたポロヴェツの集団([イパーチイ年代記(2): 337 頁, 注 304]参照)。

24) 1146 年秋ころの記述に、「その頃、スヴァトスラフ [C43] はポロヴェツ人の〔首長である〕母方の伯叔父たちのところに使者を遣った。そして、かれら〔ポロヴェツ人〕300 人が急いでかれ〔スヴァトスラフ [C43]〕のもとにやって来た」とある([イパーチイ年代記(2): 348 頁, 注 370]参照)。このときに援軍としてやって来た「母方伯叔父(уй)」たちが、ポロヴェツの首長オスロクの二人の息子、チュンラクとカモサであることがわかる。

ついて考えようではないか」。かれらは言った。「公よ、時を移さず馬で行きなさい。そなたがここにとどまっても何にもなりません。〔兵糧の〕穀物が無いのです。森林の地²⁵⁾へ行きなさい。そこからなら、自分の父²⁶⁾であるユーリイ [D17] に使者を派遣するのに近いでしょう」。

こうして、スヴァトスラフ [C43] はノヴゴロド〔・セヴェルスキイ〕を脱してコラチェフ²⁷⁾ (Корачев) へ向かって逃げ出した。かれの従士団は、ある者たちはかれの後を行き、別の者たちはかれを見捨てた。かれの妻と子供たちは〔スヴァトスラフに〕同行し、【335】 夫の嫂にあたるイーゴリ [C42] の妻も伴って一緒に行った。ノヴゴロド・セヴェルスキイの部隊も〔連れて行った〕……²⁸⁾

イジャスラフ [C35] は、大いに怒って自分の兄弟たち〔イジャスラフ [D112:I] とウラジミール [C34]〕に向かって言った。「かれ〔スヴァトスラフ [C43]〕がわしから逃げ出したのなら、かれのあとを追わせてくれ。そして、かれの妻子をかれから取り上げてしまおう。かれの財産を奪い取ってしまおう」。

こうして、かれ〔イジャスラフ [C35]〕は、イジャスラフ・ムスチスラヴィチ [D112:I] と自分の兄弟のウラジミール [C34] に頼み込むと、出発した²⁹⁾。そのとき、イジャスラフ [D112:I] からシヴァルン³⁰⁾ (Шварн) と兄弟〔イジャスラフ [D112:I]〕の従士団を借り受けて行った。か

25) ノヴゴロド・セヴェルスキイから見ると北方の、いわゆるヴァティチの地が「森林の地」(лесная земля)であり、これに対して南方が平原(ステップ)地帯ということになる。

26) 1147年の記事にある、ユーリイ [D17] が派遣した使者の口上では、ユーリイ [D17] はスヴァトスラフ [C43] を「兄弟よ」と呼んでおり(本稿注 60 参照)、この個所で、ユーリイ [D17] がスヴァトスラフ [C43] にとって「自分の父」とされているのは一見すると奇妙である。ただ、長幼の序列をはっきりさせるために「兄弟で息子である者よ」と呼び掛ける例もあることから(本稿注 288 参照)、ここではユーリイ [D17] に対するスヴァトスラフ [C43] の従属的な関係を示すために、このような呼称が使われていると考えるべきだろう。

27) 「コラチェフ」(Корачев)は、ブリャンスク近郊の都市で現在の「カラチェフ」(Карачев)を指している。ノヴゴロド・セヴェルスキイから北東へ約 170km に位置し、そこからデスナ川を遡行して到達することができる。

28) 写本はこの個所に欠落がある。『ヴォスクレセンスカヤ年代記』によれば、「ノヴゴロド・セヴェルスキイの住民はイジャスラフ・ムスチスラヴィチ [D112:I]、ダヴィド [C3] の二人の子、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] に使者を遣って言った。『スヴァトスラフ [C43] はわれらを見放して、コラチェフへ行った』。イジャスラフ [C35] は……」〔ПСРЛ Т.7, 2001: С. 37〕となる。

29) このイジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] の主導によるシヴァルンをともなった先遣隊について、『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では「イジャスラフ [D112:I] はシュヴァリンとダヴィドの子イジャスラフ [C35] にかれ〔スヴァトスラフ [C43]〕を追わせた」として、キエフ大公イジャスラフ [D112:I] の命令によるものとして描いている。

30) 年代記の索引によると、イジャスラフ [D112:I] が連れてきたキエフの軍司令官としている。〔ПОКАЖЧИК〕

これは、プチヴリからセフスコ³¹⁾ (Сѣвьско), そしてボルドイジ³²⁾ (Болдыжь) へと向かった。そのコラチェフへの道のりは、障害のないものだった。

そこ〔コラチェフのスヴァトスラフ [C43] のもと〕へ穀物補給隊が慌ててやって来た。〔敵の〕ベレンディ人が、〔自分たちの〕3人の家来を捕虜にしたというのである。スヴァトスラフ [C43] は討伐隊がやって来たことを知ると、対抗するために原野のポロヴェツ人を派遣して、敵のベレンディ人人数を捕獲した³³⁾。〔さらにこの捕虜の口から〕スヴァトスラフ [C43] に情報もたらされた。イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] が、かれ〔スヴァトスラフ [C43]〕を討伐すると虚勢を張って、自分の兄弟たちから従士団を借り受け、〔輻重の〕荷車を伴わずに、3000の騎馬兵のみを率いてやって来るという。

スヴァトスラフ [C43] は、自分が生き延びて、妻子と従士団を捕虜として引き渡すか、あるいは自ら戦いに斃れるかの選択を迫られた。スヴァトスラフ [C43] は兄弟たちと、またポロヴェツ人、自分の家臣たちと相談して、神と聖なる聖母に望みをかけ、かれ〔イジャスラフ [C35]〕を迎え撃つために〔コラチェフの城砦を〕出陣した。

1月16日木曜日³⁴⁾のことだった。【336】その日は、聖使徒ペトロの枷の安置の記念日だった。その結果、神と生命を与える十字架の力が、かれら〔イジャスラフ [C35] とその部隊〕を追い払ったのである。

イジャスラフ・ムスチスラヴィチ [D112:I] とウラジーミル・ダヴィドヴィチ [C34] は、自分たちの兄弟イジャスラフ [C35] をシヴァルンとともに派遣してから、自分たちもその後を追って進軍した。かれらが、ボルドイジ (Болдыжь) の森まで来て、食事のために幕営を張っていたとき、一人の家臣がイジャスラフ・ムスチスラヴィチ [D112:I] のところに駆けつけて、かれに言った。「スヴァトスラフ [C43] は、そなたの兄弟イジャスラフ [C35] とそなたたちの従士団を撃ち破りました」。

イジャスラフ・ムスチスラヴィチ [D112:I] はこれを聞いて、スヴァトスラフ [C43] への怒りを募らせた。勇敢で、戦いに長けていたかれ〔イジャスラフ [D112:I]〕は、自分の軍隊を集めると、スヴァトスラフ [C43] を討つために、コラチェフへ向けて進軍を始めた。ウラジーミル・ダヴィドヴィチ [C34] もかれと一緒にだった。スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] もかれと一緒にだった。かれらは、敗走してきた従士団と遭遇して、もと来た道を再びコラチェフへと

31) 「セフスコ」(Сѣвьско) は、プチヴリから北北東約 100km に位置する城砦都市。

32) 「ボルドイジ」(Болдыжь) は、プチヴリから北北東約 145km, コラチェフから南方に約 75km に位置する城砦都市で、プチヴリとコラチェフの中間地点にあった。

33) ベレンディ人に捕まった3人も、対抗策として、スヴァトスラフ [C43] 陣営が捕まえた数人のベレンディ人も、相手方についての情報を取るための捕虜(языки)である。

34) 1147年1月16日は木曜日であり、この日に当たっている。

軍を進めさせた。イジャスラフ [C35] もしばらくは姿を見せなかったが、真昼時にはかれらのところにやって来た。

イジャスラフ・ムスチスラヴィチ [D112:I] とウラジーミル・ダヴィドヴィチ [C34] は、その日まる一日かけて進軍し、ほとんど深夜になる頃にコラチェフの近くまできて、コラチェフの手前で宿営を張った。就寝の頃合いになって、コラチェフからかれらのところに報がもたらされた。すなわち、「スヴァトスラフ [C43] は、仲間からの通報によって、イジャスラフ・ムスチスラヴィチ [D112:I] がコラチェフに向けて兄弟たちとともに討伐軍を進め、コラチェフ付近で多く掠奪を行っていることを知り、ヴァティチの森³⁵⁾の向こうへ逃げてしまった」というのである。

イジャスラフ [D112:I] は、自分の二人の兄弟、ウラジーミル [C34] とイジャスラフ [C35] に言った。【337】「そなたたちが望んでいた領地は、わしがそなたたちのために獲得した。ノヴゴロド〔・セヴェルスキイ〕のことである。スヴァトスラフ [C43] の領地はそなたたちのものである」。こう言うと、〔イジャスラフ [D112:I]〕自身はキエフに帰ってしまった。

また、〔イジャスラフ [D112:I]〕はこうも言った。「この領地の中のイーゴリ [C42] のものは、奴隷であれ物資であれ、わしのものである。スヴァトスラフ [C43] のものは、奴隷であれ物資であれ、われらで分けようではないか」。そして、そのようになされた。

さて、イジャスラフ・ムスチスラヴィチ [D112:I] がキエフに戻ってくると、イーゴリ [C42] は地下牢の中で病みついており、病状は甚だしく重かった。イーゴリ [C42] はイジャスラフ [D112:I] に使者を遣って、依頼と拝礼を行って、こう言った。「兄弟よ。わしはひどく病んでいる。剃髪することを許可してほしい。すでに公座にあったときから、わしには剃髪したいとの思いがあった。今まさにそれを必要としている。わしはひどく病んでいるのだから。もはや生きることは望んでいない」。かれ〔イジャスラフ [D112:I]〕は同情して答えて言った。「もしそなたに剃髪したいとの思いがあるのなら、望むとおりにすればよい。そうでなくとも、そなたは病んでいるのだから、わしはそなたを解放するつもりである」。

こうして、〔イジャスラフ [D112:I] は〕使者を遣って、地下牢の覆いを外すように命じ、重病人を地下牢から引き出すと、〔ベレヤスラヴリのヨハネ修道院の〕庵室へと運ばせた。ようやく8日目に神はかれに魂を取り戻させた³⁶⁾。しかし、かれは食べることも飲むこともできなかった。〔イジャスラフ [D112:I] は〕かれを剃髪するよう主教エフイーミイに命じた。その

35) 前注25の「森林の地」に相当する。スヴァトスラフ [C43] はオカ川に沿って北へ向かって逃げたことになり、以下の記述からコゼリスク (Козельск) に到着したことが分かる。

36) 意識を回復させたということ。

後、神はかれ〔イーゴリ〕の病気を癒した。かれはキエフの聖テオドロス修道院³⁷⁾に運ばれた。そこで、典院と修道士たちが呼ばれ、自らへの約束が適って、【338】聖テオドロス修道院でスヒマ修道士の剃髪が行われた³⁸⁾。

ダヴィドの二人の息子〔ウラジーミル [C34] とイジャスラフ [C35]〕はドブリャンスク³⁹⁾ (Дьбряньск) へ向けて出発した。

また、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] はコラチェフへ向かった。かれ〔スヴァトスラフ [C411:G]〕は、コゼリスク⁴⁰⁾ (Козельск) にいる自分の叔父スヴァトスラフ [C43] に使者を遣って、こう言った。「イジャスラフ・ムスチスラヴィチ [D112:I] はキエフに戻りましたが、ダヴィドの二人の息子〔ウラジーミル [C34] とイジャスラフ [C35]〕は、スモレンスクのロスチスラフ [D116:J] とともに、あなたを攻めようとしています」。

こうして、ダヴィドの二人の息子たちはやって来ると、ドブリャンスクで陣を張った。他方、スヴァトスラフ [C43] はコゼリスクを離れてデドスラヴリ⁴¹⁾ (Дѣдославль) まで行き、さらに、スヴァトスラフ [C43] はオセトル川⁴²⁾ (Осѣтр) 方面へ向かった。

だがこの場所で、イヴァンコ・ベルラドニク [A1221] は、かれ〔スヴァトスラフ [C43]〕を裏切ってスモレンスク公ロスチスラフ [D116:J] のもとに走り、その際にスヴァトスラフ [C43] から銀 200 グリヴナと金 12 グリヴナを奪い去った。

さて、スヴァトスラフ [C43] はポルテスク⁴³⁾ (Полтеск) の城砦に到着した。そこへ、ユーリ

37) 1129年にムスチスラフ [D11] が定礎した修道院で、かれの一族の菩提寺の役割を果たしていた。〔イパーチイ年代記訳注 (2) 注 109〕も参照。

38) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では「エフィーミイは〔キエフに〕やって来て、かれ〔イーゴリ [C42]〕を剃髪した。〔1147年の〕1月5日のことであった」と日付が記されている。なお、「スヒマ修道士」(въ схиму)とは、修道士のなかでもっとも厳しい戒律を自らに課した苦行僧を指す。ここではイーゴリに完全に俗世への復帰を諦めさせることを意味しているだろう。

39) 現在のロシアの都市ブリャンスク (Брянск) のことで、デスナ川沿岸に位置している。コラチェフの南西約 40km と近い位置にある。

40) 本稿注 5 を参照。

41) 「デドスラヴリ」(Дѣдославль) について、ナソーノフは、ウパ (Упа) 川上流域の城市で、コゼリスクからは約 150km 西方に位置する現在の Дедилово 村のこととしている。〔Насонов 2002〕

42) オセトル (オショトル) (Осѣтр; Осѣтр) 川はオカ (Ока) 川支流で、デドスラヴリとコルテスク (次注参照) の中程の地域を流れている。

43) 『イパーチイ年代記』において「ポルテスク」(Полтеск) の地名は「ボロツク」を指すときに用いられているが、ここでは「ボロツク」はあり得ない。諸注では、この部分は「コルテスク」(Колтеск) の誤記(すべての写本について)と見なされている。コルテスクはオカ (Ока) 川右岸に位置する城砦都市で、デドスラヴリから北へ約 100km 離れた、ヴァティチの地の北辺に位置している。

イ [D17] がかれを援助するために、1000 人の鎧を装備した⁴⁴⁾ ペロゼロ人⁴⁵⁾ 部隊を派遣した。スヴァトスラフ [C43] は精兵を選りすぐると、ペロゼロ人を率いて、ダヴィドの二人の息子たちを討つためにデドスラヴリへと進軍しようとしていた。しかしその時、イヴァンコ・ユーリエヴィチ [D172] が体調を崩し、ひどく病みついた。そのために、スヴァトスラフ [C43] は進軍をやめたが、部隊を解散することはしなかった。

ダヴィドの二人の息子たちも、ユーリイ [D17] がかれ〔スヴァトスラフ [C43]〕に援軍を派遣したことを聞いて、スヴァトスラフ [C43] を取返して攻めようとはしなかった。そのかわり、ヴァティチ人を召集すると、かれらに向かって言った。「見よ、これがわれらとそなたたちの敵である。かれ〔スヴァトスラフ [C43]〕を捕らえよ。捕獲した捕虜はおまえたちのものだ⁴⁶⁾」。それから、〔ダヴィドの二人の息子たちは〕デドスラヴリから引き揚げていった⁴⁷⁾。

その頃、ユーリイ [D17] の二人の息子、ロスチスラフ [D171] と **[339]** アンドレイ [D173] が、ロスチスラフ・ヤロスラヴィチ⁴⁸⁾ [C54] を討伐するためにリャザンに進軍していた。ロスチスラフ [C54] はリャザンを脱出して、ポロヴェツ人のもとへ、エリトウク (Ельгук) のもとへと身を寄せた⁴⁹⁾。

44) 「鎧を装備した」と訳した語は原文で写本によって бренидъец, бернистец, (『ヴォスクレセンスカヤ年代記』『ニコン年代記』では бронник) などと異同がある。年代記ではこの個所だけの語彙で、おそらく、鎧を意味する броня から派生した語と考えられる。[Goranin 1995: p.55 n. 384]

45) ペロゼロ (ペロオゼロ) は、『原初年代記』862年の項にリユーリクの兄弟シネウスが座した地として記されている古い城市だが、ノヴゴロドから東北東に約400kmと、遙か北方に位置している。ただ、地理的にはシェクスナ川=ヴォルガ川水系によって、ロストフ・スーズダリの地と関係が深く、11世紀後半にはこの地の公国の領地になっていた。1096年にはペロゼロ人はムスチスラフ [D11] の配下として、スーズダリ人、ロストフ人とともに、チェルニゴフ公オレーグ [C4] と戦っている。スーズダリがユーリイ [D17] の支配下に置かれたのちは、この公の軍勢の一部として戦うようになった。

46) ウラジーミル [C34] とイジャスラフ [C35] からチェルニゴフ諸公はヴァティチの地を自分の所領の一部だと考えているふしがあり、この発言にはスヴァトスラフ [C43] を、自分たちとヴァティチ人にとっての共通の敵だとして、連帯意識を植え付けようとする意図があったと考えられる。

47) ウラジーミル [C34] とイジャスラフ [C35] は、チェルニゴフに戻ったと考えられる。

48) 本稿注2にもあるように、リャザン公のロスチスラフ [C54] は、ユーリイ [D17] の領地ともっとも近い場所にいるイジャスラフ [D112:I] の同盟者である。ユーリイは、遠征の際に背後を突かれなために、息子たちに命じてこのリャザン公の排除を図ったのである。

49) 「エリトウク」はポロヴェツの首長 (ハン) の名前。この記事を根拠に、P. トロチコはロスチスラフ [C54] がポロヴェツの首長エリトウクの娘と結婚していた、つまり舅のところに身を寄せた可能性を指摘している [Толочко 2014: С. 158]。

その頃、スヴァトスラフ [C43] は、自分の兵⁵⁰⁾ をポロヴェツ人のもとへと帰した。かれらに多くの贈物を与えた。かれらについては、わたしたちが以前に書いたように⁵¹⁾、かれら〔スヴァトスラフ [C43] たち〕とともに多くのポロヴェツ人が従軍していたのである。

その頃、イヴァンコ・ユーリエヴィチ [D172] が逝去した。乾酪の週の月曜日 2 月 24 日⁵²⁾ の前日の夜のことだった。夜が明けて、かれの二人の兄弟、ボリス [D170] とグレーブ [D178] がやって来た。二人は大いに泣いた。それから、かれの遺体を布で巻くと、二人は遺体を運んで、悲しみながらスーズダリの父〔ユーレイ [D17]〕のもとへと出発した。

さて、スヴァトスラフ [C43] は戻ってくると、出発してオカ川を遡行し、ポロトヴァ⁵³⁾ (Порогова) 川の河口にあるロブインスク (Лобыньск) 城砦に到着して、そこで陣を張った。ユーレイ [D17] は、そこにいるかれ〔スヴァトスラフ [C43]〕のもとへ⁵⁴⁾、多くの贈物を送った。かれの妻には絹織物や毛皮などを。かれの従士団にも、多くのものを送り与えた。

6655 [1147] 年

ユーレイ [D17] がノヴゴロドの領地を掠奪するために軍を進めた。やって来ると、ノーヴィ・トルグ⁵⁵⁾ (Новый Торг) とムスタ⁵⁶⁾ (Мста) 川全域を占領した⁵⁷⁾。

50) 「自分の兵を (…) 帰す」(отпусти воѣ своѣ) は内容的に辻褃が合わないことから、воѣ を вуѣ すなわち、ポロヴェツ人を率いてやって来た自分の「母方の伯叔父」(вуй) と誤記と解釈することも可能である。[Вілкул 2004: С. 71, прим. 40]

51) 本年代記の 1146 年秋ころの記述に、「その頃、スヴァトスラフ [C43] はポロヴェツ人の〔首長である〕母方の伯叔父たちのところに使者を遣った。そして、かれら〔ポロヴェツ人〕300 人が急いでかれ〔スヴァトスラフ [C43]〕のもとにやって来た」とある個所を指している ([イパーチイ年代記 (2) : 348 頁, 注 370] 参照)。

52) 1147 年の乾酪の週 (масленная неделя, масленица) は、2 月 24 日 (月曜日) から 3 月 2 日 (日曜日) までの期間を言う。

53) 「ポロトヴァ川」(Порогова) は、オカ川左岸を北西の方向に流れる支流。

54) 『ヴォスクレセンスカヤ年代記』ではこの個所に「使者を遣って伝えた『わが息子について嘆くことはない。神がかれを取り上げてしまったからには、別の〔息子〕をそなたに派遣しよう』」(река: «не тужи о сыну моему; аще того Богъ взялъ, то другой ти послю») との、追加的な文言がある。

55) ノヴゴロド地方とロストフ・スーズダリ地方の境界にあり、ヴォルガ川上流の支流トヴェルツァ (Тверца) 川左岸の城市。トルジョク (Торжок) と呼ばれる。歴史的にノヴゴロドと北東ルーシとの間の係争地でもあった。

56) ノヴゴロドに近いイリメニ湖 (Ильмень) の東を流れ、この湖に注ぐ川。その上流は、トルジョクのあるトヴェルツァ川と連水陸路で繋がっており、ヴォルガ川とノヴゴロドを結ぶ戦略的に重要な川だった。

57) 当時ノヴゴロドはキエフ大公イジャスラフ [D112:I] の弟にあたるスヴァトボルク [D114] が公として座していた。このノヴゴロド遠征は、イジャスラフ [D112:I] やロスチスラフ [D116:J] の勢力を削ぐための牽制という意味もあったと考えられる。

他方、ユーリイ [D17] は、〔ロブインスクにいる〕スヴァトスラフ [C43] に使者を遣って、スモレンスクの領地を略取するようかれに命じた。そして、スヴァトスラフ [C43] は軍を進め、ゴリャチ⁵⁸⁾ (голядь) 人を捕らえ、ポロトヴァ⁵⁹⁾ (Поротва) 川上流域を略取した。このようにして、スヴァトスラフ [C43] の従士団は多くの捕虜を獲得した。

ユーリイ [D17] は〔スヴァトスラフ [C43] へ〕使者を遣って言った。「兄弟よ、わしのところへ、モスクワ⁶⁰⁾ (Москва) へ来るがよい」。スヴァトスラフ [C43] は **[340]** 自分の子供オレーグ [C431] と少数の手勢とともにやって来た。またウラジーミル・スヴァトスラヴィチ⁶¹⁾ [C511] も伴っていた。オレーグ [C431] は先発してユーリイ [D17] のとこに行き、かれに狩猟豹⁶²⁾ を贈った。後からその父のスヴァトスラフ [C43] がやって来た。こうして、親愛の挨拶を行った。聖なる聖母讚美の日⁶³⁾ の前日、金曜日のことだった。こうして楽しく祝った。

翌日、ユーリイ [D17] は大がかりな昼食を設けるよう命じ、かれら〔客人たち〕へ大いなる敬意を表し、スヴァトスラフ [C43] に多くの品を贈与し、和気あいあいとしていた。また、かれの息子オレーグ [C431] とウラジーミル・スヴァトスラヴィチ [C511] にも〔贈物を与えた〕。また、スヴァトスラフ [C43] の家臣たちにも宴席を設けた。こうしてから、客人を帰路につかせた。ユーリイ [D17] は自分の息子をかれ〔スヴァトスラフ [C43]〕のもとに派遣することを

58) ゴリャチ人 (голяди) は、この頃スモレンスク領に隣接していたプロトヴァ川上流域に古来から居住していたバルト (リトアニア) 系の民族。他のバルト系諸族と離れ、スラヴ系のヴァティチ人とクリヴィチ人と隣合っていたことからその後同化された。

59) プロトヴァ川 (Протова) とも表記し、北西から南東に向かってオカ川右岸のロブインスクに流れ込む支流。上流域はスモレンスク地方との境界にあたる。

60) モスクワ (Москва) の地名はこの個所が初出。当時はロストフ・スーズダリ地方とチェルニゴフ地方の境界地帯に位置していた。スヴァトスラフ [C43] はロブインスクからオカ川を下り、コロムナ (Коломна) の地点からモスクワ川に入ったと考えられる。

61) ウラジーミル [C511] はスヴァトスラフ [C43] の従甥にあたる。前注2の1146年秋頃に「ヤロスラフ [C5] の孫であるウラジーミル・スヴァトスラヴィチ [C511] がその伯父〔ロスチスラフ [C54]〕のもとから逃げ出してノヴゴロド〔・セヴェルスキイ〕のスヴァトスラフ [C43] のところに身を寄せていた」とあるが、それ以来スヴァトスラフ [C43] と行動をともにしていた。

62) この「狩猟豹」(пардус) については、『イパーチイ年代記』1160年の項でも、やはりスヴァトスラフ [C43] が贈与した品として言及されている。スヴァトスラフとドン流域ポロヴェツ人との関係を考えて、当時ステップ地帯に生息していた狩猟用のアジア・チータ (Asiatic cheetah; *Acinoyx jubatus venaticus*) である可能性が高い [Словарь-СПИ 4: С. 57]。ルーシでこの豹が広く知られていたことは、キエフのソフィア大聖堂南塔の壁画や、『1073年スヴァトスラフ文集』の挿絵などからも推察することができる。

63) 「聖母讚美の日の前日」(на Похвалу святѣй Богородици) は、大齋 (великий пост) 第5週の土曜日にあたる祭日で、「至聖なる聖母讚美の祭日」(Похвала Пресвятой Богородицы) もしくは「アカフイストの土曜日」(Суббота акафиста) と呼ばれ、聖母の庇護による異教徒からの帝都防衛を記念した祭日。移動祭日で1147年は4月5日に相当する。その前日の4日は金曜日になる。

約束し、そのようにした⁶⁴⁾。

さて、スヴァトスラフ [C43] はそこ〔モスクワ〕からロブィンスク (Лобынск) に戻ると、そこからさらにネリンスク⁶⁵⁾ (Неринск) へと向かい、オカ川を渡ったところで陣を張った。受難週間前の柳の日曜日の前日⁶⁶⁾ だった。そこで、かれの父〔オレーグ [C4]〕の家臣だった長老修道士ピョートル・イリイチが逝去した。すでに老齢のため、馬に乗ることはできなかったのである。90 歳だった⁶⁷⁾。

その年の夏⁶⁸⁾、イジャスラフ [D112:I] はクリム〔クリメント〕・スモリャティチ (Клим Смолятич) を府主教に任命し、ザループ⁶⁹⁾ (Заруб) から〔キエフへ〕異動させた。かれはスヒマ修道士だった。かれは書物をよく理解し、哲学者でもあり、このような者はルーシの地にはかつてはいなかった。

このような〔府主教叙任がなされたの〕は、チェルニゴフの主教が「わたしの知るところでは、主教たちが一同に会して府主教を叙任することは適正なことである」と言ったからであった。こうして、チェルニゴフの主教オヌーフリイ、ベルゴロドの主教フェオドル、ペレヤスラヴリの主教 **[34I]** エフィーミイ、ユーリエフの主教デミヤン、ヴラジミルの主教フェオドル、ノヴゴロドの主教ニフォント、スモレンスクの主教マヌイルが会合した。

64) これは、以下に述べられる、ユーリイ [D17] が息子のグレーブ・ユーリエヴィチ [D178] を、スヴァトスラフ [C43] のもとに援軍として派遣したことを指している。本稿注 89 を参照。

65) この地名については特定できる定説はない。モスクワからオカ川を上ってロブィンスクに戻った後の行動であることから、さらにオカ川をさらに上流方面に行った途上の村の名と推定される。またモスクワでの祝宴から 7 日ほどしか経っていないことから、ロブィンスクからさほど遠くない地点であることが分かる。

66) 1147 年 4 月 12 日土曜日に相当する。

67) 1146 年の項で、スヴァトスラフ [C43] は「かつてはかれの父 [C4] の家臣で、いまはウラジーミル [C34] のところにいる男」からキエフ大公イジャスラフ [D112:I] 進軍についての情報を得ている。「ピョートル」はこの人物である可能性が高い。本稿注 21 を参照。

68) 『ラヴレンチイ年代記』の短い並行記事ではこの叙任の日付を、7 月 27 日 (1147 年) の聖パンテレイモンの日としている。

69) ザループ (Заруб) はペレヤスラヴリからドニエプル川を渡河した対岸にある城市。ここに聖母就寝祭に奉献した修道院があり、このときまでクリメントはスヒマ修道士として修行をしていた。[イパーチイ年代記 (2) 注 328] も参照。なお、заруб を「隠遁」の意味の普通名詞 (затвор と同義) として、「隠遁生活から引き出して」の意味とする解釈もある。[Поппэ 1996: С. 456]

二人の主教⁷⁰⁾がこう言った。「総主教抜きで、主教たちが府主教を叙任してよいなど、教会法にはない。府主教は総主教が叙任するものである。われら二人はそなた〔クリメント〕に拝礼して服従せず、ともに奉事を執行しない。なぜなら、そなたは聖ソフィア教会⁷¹⁾で総主教からの祝福を受けていないのだから。もしそなたが考えを改めて総主教の祝福を受けたときには、われら二人はそなたに拝礼して服従しよう。われら二人は府主教ミハイル⁷²⁾から、われらは府主教抜きで、聖ソフィア教会⁷³⁾で奉事をなすべきではない、との手書きの文書をすでに受け取っているのだ」。

かれ〔クリメント〕はこれについて、かれら二人に対して強い不満を持った。チェルニゴフの〔府主教〕オヌーフリイは言った。「わしの知るところでは、われらが叙任をなすのは適正である。われらのもとには聖クレメンズ⁷⁴⁾の頭部〔の聖骸〕がある。これを用いるのは、ギ

70) 原文では、主教の名が列挙されたあとで、双数形の動詞 *рекоста, не поклонивъ* が使われているだけで、この「二人」が誰であるか明示されていない。ただ、文脈からみて主教列挙の最後の二人であるノヴゴロドの主教ニフォントとスモレンスクの主教マヌイルと見るべきであろう。ニフォントの反対については、『ノヴゴロド第一年代記』の6657(1149)年の項で「ノヴゴロドの大主教ニフォントがルーシへ行った。かれはイジャスラフ [D112:I] と府主教クリムに呼ばれたのである。というのは、イジャスラフは帝都へ使者を遣らずに、ルーシの地方の主教たち共にかれを叙任してしまったからである。しかし、ニフォントこう言っていた。『〔府主教に〕なるのはふさわしくなかった。大本山から祝福を受けておらず、叙任されていないのだから』」[ノヴゴロド第一年代記 [I] : 48 頁]として、クリムの選出に反対であったことは明らかである。マヌイルはギリシア人で、またスモレンスク主教座創設はキエフ府主教ミハイルの手で行われたことから ([イパーチイ年代記 (2): 312 頁, 注 148] 参照)、コンスタンティノポリス総主教の挨拶礼によるロシア府主教の叙任を強く主張したのだろう。なお、『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では「イジャスラフは勝手に6人の主教とともにルーシの修道士クリムを府主教に叙任した」として、ニフォント以外の6人を「イジャスラフ支持派」としており、ここではマヌイルもその中に含まれていると考えられる。

71) コンスタンティノポリスの総主教座教会である聖ソフィア大聖堂（現在のイスタンブールのアイヤ・ソフィア）のこと。

72) 前任のキエフ府主教で、キエフ大公位を巡る政争の時期にキエフを去って、コンスタンティノポリスに戻り、1145年にはこの地で没している。「手書き文書」はミハイルがルーシを去る際に、ニフォントもしくはマヌイルに手渡したものだっただろう。イジャスラフ大公 [D112:I] の手によるクリメント叙任は、親イジャスラフの教会人を任命することで、府主教の空位を埋める政治的なものだった。

73) キエフの府主教座教会聖ソフィア (св. София) 大聖堂のこと。

74) 聖クリメント (Климент) は、1世紀末のローマの聖人クレメンズ一世のことで、第3代のローマ司教をつとめた。クリミア半島に流刑され、この地で殉教したという伝説から、最初のルーシの地への宣教者として崇敬された。パンノニアの伝承では、スラヴの宣教者コンスタンティノス (キュリロス) がケルソネスで聖人の聖骸を発見したとされ、『原初年代記』988年の項にはウラジーミル聖公 [08] が、その聖クレメンズの聖骸を持って、皇女アンナを連れてケルソネスからキエフに戻ったとされている。伝承では、この聖骸は聖クレメンズの「頭部」の一部であり、この時代には、キエフの聖ソフィア聖堂に安置されていたとされている。

ロシア人が聖ヨハネの手⁷⁵⁾によって叙任を行っているのと同様なのである」。こうして、主教たちは協議して、聖クレメンスの頭〔の聖骸〕によって府主教の叙任を行った。

さて、スヴァトスラフ [C43] はやって来ると、ネリンスク⁷⁶⁾ で陣を張った。そのとき、かれのところへポロヴェツ人のかれの〔母方の〕伯叔父たち⁷⁷⁾ から、使者が派遣されてきた。使者には、ポロヴェツ人ヴァシーリと 60 人の家来たちが同行していた。使者は〔伯叔父たちの言葉を伝えて〕こう言った。「そなたは健やかであるか。われらが軍勢を引き連れてそちらに向かうよう、そなたは命令しないのか」。

その頃、ルーシから下級従士たちがやってきて⁷⁸⁾、【342】かれ〔スヴァトスラフ [C43]〕に、ウラジーミル [C34] はチェルニゴフに、イジャスラフ [C35] はスタロドゥーブにいるとの報告を行った。スヴァトスラフ [C43] は、デドスラヴリ⁷⁹⁾ (Дѣдославль) に行った。そこのかれのところへ別のポロヴェツ人たち、すなわちトクソバ族の者たち (токсобичи)⁸⁰⁾ がやって来た。〔スヴァトスラフ [C43]〕は、かれらの護衛としてスディミル・クチェビチ (Судимир Кучебич) とゴレン (Горѣн) をつけ、かれらをスモレンスク人討伐に派遣した。かれらは、ウグラ川の上流域⁸¹⁾ で掠奪を行った。

その頃、ウラジーミル [C34] とイジャスラフ [C35] の代官たちが、ヴァティチの地、すなわちブリャンスク⁸²⁾ (Брянск)、ムツェンスク⁸³⁾ (Мьченьск)、ブレヴェ⁸⁴⁾ (Блеве) などから逃

75) 伝承によれば、「洗礼者ヨハネの右手」の聖骸は 10 世紀にコンスタンティノポリスにもたらされ、12 世紀の末までは聖物として宮殿に安置されて、高位聖職者の叙任に用いられていたという。

76) 本稿注 65 を参照。

77) 本稿注 24 を参照。

78) この「下級従士たち」(дѣцкы) とは情報収集のために「ルーシ」すなわち、チェルニゴフ=キエフ=ベレヤスラヴリ方面に派遣していたスヴァトスラフ [C43] 配下の下級従士たちを指している。

79) 「デドスラヴリ」はオカ川から支流のウパ川に入って遡った上流域にある城砦もしくは村で、ポロヴェツ人が居住する原野に接している。本稿注 41 を参照。

80) 「トクソバ族の者たち」(токсобичи) とは、ドン川・ドネツ川上流域に展開していたポロヴェツ人の部族名。

81) 「ウグラ川上流域」(верхъ Угры) とは、スモレンスク地方とチェルニゴフ地方の境界一帯のスモレンスク側の領地を指している。スヴァトスラフ [C43] は、スモレンスクのロスチスラフ [D116:J] の援軍の力を削ぐために、ポロヴェツ人部隊を派遣したと考えられる。

82) 先のドブリャンスク (Дѣбрянск) と同じ。

83) 現在のロシア連邦オリョール州の都市で、オカ川支流ズーシャ川右岸位置し、ブリャンスクからは西方 144km と離れている。

84) 文脈から見て、スモレンスク地方とヴァティチの地の境界にあることから、ナソーノフは、デスナ川の支流ボルヴァ (Болва) の水源近くに位置する「オブロヴィ」(Обловь) 城砦と特定している。ブリャンスクからは北北東に約 130km の位置にある。

げ出してきた。〔スヴァトスラフ [C43]〕は、そこ〔デドスラヴリ〕からデヴァゴルスク⁸⁵⁾ (Деягорьск) へ行き、すべてのヴァティチの地を占領した。すなわちブリャンスク (Брянск)、ヴォロピイン⁸⁶⁾ (Воробийн), デスナ沿岸地帯 (Подеснье), ドマゴシ⁸⁷⁾ (Домагошь), ムツェンスク (Мценск) の近くまで達した。

その頃、かれ〔スヴァトスラフ [C43]〕のところにブロードニク人⁸⁸⁾ たち (броднич) がやって来た。ポロヴェツ人も多数がかれのところへやって来た。かれの母方の伯叔父たちの配下の者たちだった。

その頃、イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] がノヴゴロド〔・セヴェルスキイ〕からチェルニゴフへと移った。

その頃、グレーブ・ユーリエヴィチ [D178] がデヴァゴルスクのスヴァトスラフ [C43] のところに来た⁸⁹⁾。かれ〔スヴァトスラフ [C43]〕は、その地から、スヴァトスラフの息子〔オレーグ [C431]〕とユーリーの息子〔グレーブ [D178]〕、ポロヴェツ人たちを引き連れて、ムツェンスクへと行った。そして、かれら〔ポロヴェツ人〕に多くの贈物を与え、イジャスラフの息子〔ムスチスラフ [I1]〕を討伐するために、〔クロム (Кром)⁹⁰⁾ の〕城市へと向かった。

そこへ、ウラジーミル・ダヴィドヴィチ [C34] と〔スヴァトスラフ・〕フセヴォロドヴィチ [C411:G] から派遣された⁹¹⁾ 使者たちが追いかけて来て、〔スヴァトスラフ [C43] に対して〕言った。「これについて、われらに対する不満を持つな。われらは、一人の人間のようになるうではないか。われらのことを悪く思わないでほしい。われらに十字架接吻〔の誓いを〕せよ。自分の父の地を **[343]** 取るがよい。われらが略取したそなたのものは、そなたに返そう」。

85) デドスラヴリとムツェンスクの間にある村の名で、デドスラヴリからは南西に約 50km 離れている。

86) ボロベイナ (Воробуйна) とも言い、ナソーノフによれば、デスナ川支流スドスチ (Судость) 川上流付近に位置する村落で、ブリャンスクのさらに西方約 50km に位置する。

87) ズーシャ川の河岸の城砦で、ムツェンスクの下流の北西約 25km に位置する。

88) アゾフ海沿岸からドン川下流域に居住していたチュルク遊牧民とスラブ系移住民が混成した民族集団と考えられているが詳細は不明。

89) グレーブ [D178] の派遣については、本稿注 64 を参照。

90) フレーブニコフ写本には「クロム」(Кром) の地名が明記されている。オカ川上流域にある城砦で、ムツェンスクからは南西に 84km の位置にある。なお、この時にムスチスラフ [I1] はクルスクにいたことから、「クロム」は後代の加筆で、年代記記者は「クルスク」の城市を念頭に置いていた可能性もある。

91) ソロヴィヨフによれば、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] は叔父のスヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] と共に、ウラジーミル [C34] 等に敵対していたが、ここでは仲介役となっており、おそらく事前にダヴィドの二人の息子 (ウラジーミル [C34] とイジャスラフ [C35]) と交渉したものとされる。[Соловьев 1988: С. 435]

こうして、かれらは十字架接吻を行ったが、それを守ることはなかった⁹²⁾。

その年、ウラジーミル・ダヴィドヴィチ [C34] とイジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] が、チェルニゴフからキエフ公イジャスラフ [D112:I] へ使者たちを遣って言った。「兄弟よ。スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] がわが領地であるヴァティチを占領した。われら二人はかれを討伐に行くつもりである。われら二人は、かれを追い払い、次はスーズダリのユーリイ [D17] を討伐に行く。そして、かれと和議を結ぶか、かれと戦うかしよう⁹³⁾」。イジャスラフ・ムスチスラヴィチ [D112:I] は、二人のダヴィドの子〔ウラジーミル [C34] とイジャスラフ [C35]〕およびスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] と協議して、ユーリイ [D17] およびスヴァトスラフ [C43] をともに討伐することに合意した⁹⁴⁾。

当時、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] は、イジャスラフ [D112:I] から与えられたボジスキ (Божьски), メチボジエ (Мечибожие), コテルニツァ (Котелница) など全部で 5 つの城市の支配をしていた⁹⁵⁾。かれはイジャスラフ [D112:I] のもと〔キエフ〕にやって来て、次のように言って請願を始めた。「父よ。わたしをチェルニゴフへと先に行かせて下さい。その地にはわたしの資産がすべてあります。わが兄弟のウラジーミル [C34] とイジャスラフ [C35] に対して、〔自分に〕領地を与えるよう求めたいのです。かれ〔イジャスラフ [D112:I]〕は〔答えて〕言った。「息子よ。そのようにすることはそなたにとって良いことだ。先行して準備をせよ。行って、遠征の支度をするがよい」。こうしてスヴァトスラフ [C411:G] はチェルニゴフへ出発

92) この「かれら」とはウラジーミル・ダヴィドヴィチ [C34], イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35], スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] の三人を指しており、この「十字架接吻」とは、このすぐあとに述べられている、この三人とキエフ大公イジャスラフ [D112:I] が、ユーリイ [D17] およびスヴァトスラフ [C43] を討伐する〈大遠征〉を取り決めた際に交わされた宣誓の十字架接吻と理解すべきだろう。

93) すでにこのときには、前注 92 の十字架接吻によって二人のダヴィドの子たちは、スヴァトスラフ [C43] との一応の和解を完了させていた。ソロヴィヨフが指摘するように、このダヴィドの子たちの発言は、イジャスラフ [D112:I] をドニエプル東岸におびき寄せるための策略であることは確かである。[Соловьев 1988: С. 435] そうであれば、前注 92 の「それを守ることはなかった」との記述は、この後の記事で現れる、ダヴィドの子たちが最終的にはこの十字架接吻に反してイジャスラフ [D112:I] と和解するエピソードを指しており、兄弟に対する批判的な立場から発言されている。

94) 「その夏」からここまでの段落は、『ラヴレンチイ年代記』にほぼ同様の内容の並行記事がある。

95) イジャスラフ [D112:I] がスヴァトスラフ [C411:G] にキエフの南西方面 (南ブク川上流域) の 5 つの城市を与えたことは、1146 年の記事でボジスキとメジボジエの名をあげて述べられている ([イパーチイ年代記 (2)]: 348 頁, 注 371, 372 を参照)。ここではもう一つコテルニツァ (コテルニチ) の名があがっているが、この城市については 1143 年の記事で言及されている。([イパーチイ年代記 (2)]: 330 頁, 注 251 を参照)

した。

さて、チェルニゴフの諸公⁹⁶⁾は協議して、イジャスラフ [D112:I] に向けて使者を遣り、かれに出陣するように督促して、こう言った。「われらの地は滅ぼうとしているのに、そなたは来ようとしなさいではないか」。

イジャスラフ [D112:I] は自分の貴族たちと、配下のすべての従士たち、**[344]** キエフ人を召集してこう言った。「われらは、わが兄弟であるウラジーミル・ダヴィドヴィチ [C34] とイジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35]、さらにスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] と協議をして決めた。われらは、わが父方の叔父のユーリイ [D17] とスヴァトスラフ [C43] を討つために、スーズダリに遠征したいと思う。なぜなら、かれ〔ユーリイ [D17]〕はわが敵スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] を〔味方として〕受け入れたのだから。弟のロスチスラフ [D116:j] は、その場所でわれらと合流することになろう。かれはスモレンスク人とノヴゴロド人とともにわしのもとに駆けつけるであろう」。

キエフ人たちはこれを聞いて言った。「公よ、ロスチスラフ [D116:J] と一緒に自分の叔父〔ユーリイ [D17]〕を討伐に行つてはなりません。かれ〔ユーリイ〕とは話をして合意したほうがよいでしょう。オレーグの一族⁹⁷⁾を信用してはなりません。かれらと共に遠征をしてはなりません」。イジャスラフ [D112:I] はかれら〔キエフ人たち〕に言った。「かれらはわしへの十字架接吻を行い、われらはかれらと相談をしたのだ。わしはいかにしてもこの遠征を延期したくない。そなたたちも武装して準備せよ」。キエフ人たちは言った。「公よ、われらのことを怒らないでほしいが、われらはウラジーミル [D1] の一族⁹⁸⁾に手を上げることはできません。オレーグの一族であれば、われらは郎党を引き連れて討伐をいたしましょう」。すると、イジャスラフはかれらに向かって言った。「わしの後からついて行く者が善き者である」。

96) 「チェルニゴフの諸公」の表現は、ウラジーミル・ダヴィドヴィチ [C34] とイジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] の二人を指している。以下も同じ。

97) 「オレーグの一族」は原文では Ольговичи で、文字通りは「オレーグの子供たち」。キエフ人の口から発せられるこの言葉は、オレーグ [C4] の子孫だけでなく、ダヴィド [C3] の息子たちも含んだ、スヴァトスラフ・ヤロスラフ [C] 以降のチェルニゴフ支配公一族を全体として指している。

98) 「ウラジーミル一族」の原文は Володимире племя で、『原初年代記』では племя の語は通常旧約の族長の名とともに用いられ、「ウラジーミル一族」のようにルーシの公の名とともに用いられるのは『キエフ年代記』の 1140 年の記事でノヴゴロドの使者の口から発されるのが初めてである。この年代記では、この言い回しはその後何度も使われている。これは、モノマフの子孫を正統な「支配公族」とする立場をあらわすための表現と理解することができるだろう。なお『ラヴレンチイ年代記』では、『イパーチイ年代記』との共通資料を用いた部分を除いて、「ウラジーミル一族」の表現は用いられていない。

〔イジャスラフは〕 こう言うと、多数の軍兵を集めて進軍を開始した。まず、アルト (Лто)⁹⁹⁾ 川まで行き、そこからネジャチン¹⁰⁰⁾ (Нежати́н) 方面へと進み、ネジャチンから行軍してルソチナ¹⁰¹⁾ (Русоти́на) で自分の部隊に陣を張らせた。そこから、ウレブ (Улеб)¹⁰²⁾ を使者としてチェルニゴフへ派遣した¹⁰³⁾。

自分の兄弟のウラジーミル [D115] はキエフに残した。

ウレブはチェルニゴフの城内に入った [345]。かれは、ウラジーミル・ダヴィドヴィチ [C34]、イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35]、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] が、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] に対して〔同盟を誓う〕十字架接吻をしており、策略によってイジャスラフ [D112:I] を殺そうとしていることを知った。ウレブはこのことを聞き知ると、急いで自分の公イジャスラフ [D112:I] のもとへ駆けつけた。そして、チェルニゴフの諸公がかれ〔イジャスラフ [D112:I]〕を裏切って、かれに敵対する十字架接吻〔の宣誓〕を行ったということ、直々に伝えた。

そこにまた、チェルニゴフにいる味方の者から次のような情報もたらされた。「公よ、その場所からどこへも行かないでください。かれら〔ウラジーミル [C34] とイジャスラフ [C35]〕は欺いてあなたを呼び寄せようとしています。そして、あなたを殺すか、イーゴリ [C42] の身代わりとして、あなたを捕らえようとしています。かれらは、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] に対して〔同盟を誓う〕十字架接吻をしたのです。かれらは、ユーレイ [D17] を討伐することをあなたと合意しておきながら、そのユーレイ [D17] のもとへ、十字架を手にした使

99) 表記の上では「リト川」(Лто)となっているが、現在の「アルト川」(Альт)のこと。ここは聖ボリス公の殉教の地で、その上流域はキエフから南東に東に50kmほど。(『イパーチイ年代記(1)』: 266頁、注124)も参照)

100) 「ネジャチン」(Нѣжати́н)は、1078年10月にネジャチナ原の合戦(Битва на Нежатиной Ниве)があったことで名が知られるが場所の詳細は不明。ドニエプル左岸のゴロデツ付近と推定され、キエフからは100km以内である。

101) 「ルソチナ」(Русоти́на)についても詳細は不明だが、マフノヴェツは、トルベジ川右岸にある現在のルサニウ村(с. Русанів)に同定している[Покажчик]。その場合、キエフから東に45kmほどしか離れていない。なお『ラヴレンチイ年代記』はイジャスラフ [D112:I] が陣営を張った場所をスーポイ川(Супой, 現在のСупій) (のおそらく上流域)としており、これは『イパーチイ年代記』の後の記事の記述(本稿注142参照)と合致する。その場合はキエフから東へ約85kmほどの地点になる。

102) キエフの千人長。(『イパーチイ年代記(2)』の注334を参照)

103) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事にも、イジャスラフ [D112:I] の行軍の行程が記されているが、そこでは「ドニエプル川を渡り、チェルトリイ川(Черторы́я)のほとりに陣を敷き、そこでウレブを派遣してから自分はスーポイ(Супой)川に向かった」とあり、『イパーチイ年代記』の記述とは符合していない。

者¹⁰⁴⁾を派遣したのです」。

イジャスラフ [D112:I] はこれを聞くと、もとの場所へと引き返した¹⁰⁵⁾。

かれ〔イジャスラフ [D112:I]〕は自分の使者たちを、チェルニゴフのウラジーミル [C34] とその兄弟イジャスラフ [C35] のもとへ派遣して、かれらに対してこう言った。「見よ、われらは大いなる遠征を計画した。われらの祖父たち、われらの父たち〔が決めたこと〕を確認しており、われらはそのことを十字架に接吻し〔て誓う〕たのだ¹⁰⁶⁾。もう一度、合意¹⁰⁷⁾をしようではないか。この遠征について異議を唱えないこと、いかなる内通も行わないこと、この遠征を信義をもって遂行し、敵対者たちと戦うことを」。

かれら〔ウラジーミル [C34] とイジャスラフ [C35]〕はかれ〔イジャスラフ [D112:I]〕に答えて言った。「いったい、われらが十字架接吻〔して誓ったこと〕は無意味だともいうのか。われら二人は、そなたへ〔宣誓の〕十字架接吻をしたではないか。われらに、いかなる過ちがあるというのか」。こうして、かれらははぐらかして、十字架接吻を免れようとしていた。

イジャスラフ・ムスチスラフヴィチ [D112:I] が派遣した使者の一人¹⁰⁸⁾ が言った。「味方であることを十字架接吻〔で誓う〕ことに、いかなる悪しきことがあろうか。**[346]** これは、われら自身を救うことになるのだから」。しかし、かれらは、はぐらかすばかりだった。

さて、イジャスラフ [D112:I] は、この使者に対して「かれらが味方であること〔を誓う〕十字架接吻をしようとししないのなら、かれらに、わしから聞いた〔次の〕言葉を伝えよ」とあらかじめ言い含めていたのだった。そこでイジャスラフ [D112:I] の使者はかれらに言った。「そなたたちが十字架接吻〔の誓い〕を守っているかどうかについては、兄弟たちよ、わしはそなたたちに打ち明けよう。もう、わしの耳に届いているのだ、そなたたちがわしを欺こうとして

104) このときユーレイ [D17] がダヴィドの二人の息子たちに十字架接吻をしたことは、のちのイジャスラフ [C35] の言葉からも分かる (本稿注 263 を参照)。なお、ここでは使者を通じて十字架接吻の儀礼を行うために、十字架を持参したと考えられる。

105) これはキエフに帰ったのではなく、ルソチナで自分の部隊に張らせた本営へ戻ったということ。以下の記述にみるように、イジャスラフ [D112:I] は状況の急変を受けて、この本営から各地へ使者を遣り、最終的にはキエフ人を動員して、ここからダヴィドの子たちを討伐するチェルニゴフへの遠征に出発している。

106) 1146年の末～1147年初めに、キエフ大公イジャスラフ [D112:I] が自ら遠征して、ウラジーミル [C34] とイジャスラフ [C35] の二人を支援し、スヴァトスラフ [C43] をコラチェフから追い払い、ヴァティチの地を一時制圧したときに結んだ約束(協定)が踏まえられている。(本稿 335 頁参照) そこでイジャスラフ [D112:I] は、二人の「父の地」であるヴァティチの地とノヴゴロド・セヴェルスキイは領地としてかれらに渡し、前大公のイーゴリが持っていた動産(奴隷や物資)だけを戦利品として、キエフに帰還している。

107) 再度、十字架接吻によって誓うということ。

108) マホヴェツによれば、この使者こそが、イジャスラフ大公の側近のキエフ貴族ビョートル・ポリスラフヴィチだという。[Літопис руський, 1989: С. 210 прим. 16]

いることを。そなたたちは、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] に十字架接吻を行って、この遠征の途上でわしを捕らえるか、イーゴリの代わりにわしを殺すことを〔誓った〕ことを。兄弟たちよ、そうだろう、それともそうでないのか〕。

かれら〔ウラジーミル [C34] とイジャスラフ [C35]〕はなにも答えることができなかった。ただ、互いを見交わして、長い間黙っていた。それから、ウラジーミル [C34] はイジャスラフ [D112:I] の使者に言った。「ここから出て行け、しばらく待っておれ。そなたを再びここへ呼び戻すから」。こうしてかれらは長い間評議した。なぜならば、策略が露見したからである。かれらは〔再び使者を〕呼び出すと〔イジャスラフ [D112:I] に宛てて〕こう言った。

「兄弟よ、われら二人は、〔確かに〕スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] へ〔その味方となることを誓う〕十字架接吻をした。われらは、そなたがわれらの兄弟イーゴリ [C42] を拘束していることが無念だったからである。だが、かれ〔イーゴリ [C42]〕はすでに修道士であり、スヒマの戒律を受けてさえいるではないか。われらの兄弟〔イーゴリ [C42]〕を解放せよ。そうすれば、われらはそなた〔の配下として〕馬を連ねよう¹⁰⁹⁾。兄弟よ、われらがそなたの兄弟〔イーゴリ [C42]〕を預かっていたほうが、そなたにとっても好ましいのではないか〕。

こうしてイジャスラフ [D112:I] の使者は〔イジャスラフのもとに〕戻った。使者は、二人〔ウラジーミル [C34] とイジャスラフ [C35]〕がかれ〔イジャスラフ [D112:I]〕を裏切ったことを、イジャスラフ [D112:I] に伝えた。

イジャスラフ [D112:I] は再び自分の使者に十字架接吻文書¹¹⁰⁾を持たせて、かれら〔ウラジーミル [C34] とイジャスラフ [C35]〕のもとに派遣して、かれらにこう言った。「そなたたちはわしに、生涯の〔同盟を誓った〕十字架接吻をしたのではなかったか。だから、わしはそなたたちに、スヴァトスラフ [C43] とイーゴリ [C42] の領地を与えたのである。わしはそなたたち二人とともに、スヴァトスラフ [C43] を【347】 追い払い、領地をそなたたちのために獲得し、ノヴゴロド〔・セヴェルスキイ〕とプチヴリをそなたたちに与えた。〔われらは〕かれ〔スヴァトスラフ [C43]〕の資産を奪い取り、かれの財産を分けた。また、イーゴリの財産はわしが獲った。それが見よ、兄弟たちよ、そなたたち二人はこの十字架〔の誓約〕に違反した。そして、わしを欺いて呼び寄せ、殺そうとした。どうか、神とわしに与えたように、神と生命を与える十字架がわしとともに在りますように」。こう言って、かれらに対して十字架接吻文書を破棄

109) 「そなたの配下として馬を連ねる」(подлъ тебе ѳздити) は年代記に公の言葉として何回か出現する、相手への服従をあらわす儀礼的な定型句。

110) ここでは、イジャスラフ [D112:I] が二人のダヴィドの子たちに与えた誓約文書を指しているのだろう。

した¹¹¹⁾。

その時、イジャスラフ [D112:I] は自分の使者を、スモレンスクの自分の弟ロスチスラフ [D116:J] のもとへと派遣して、こう言った。「弟よ。見よ、〔先に〕ウラジーミル・ダヴィドヴィチ [C34] とイジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] が、われら二人に対して十字架接吻を行い、われら二人と協同して、われらの叔父〔ユーリイ [D17]〕を討伐する相談をして〔われらは合意した〕。ところが、かれらはわしを欺いてわしを殺そうとしたのだ。しかし、神と十字架の力が顕れた。弟よ、われらが叔父を討伐するために行くとき取り決めた場所¹¹²⁾に、もはや行ってはならない。その代わりにわしのもとへ、こちらへ来い。そちらでは、ノヴゴロド人とスモレンスク人たちに命じて、ユーリイ [D17] の動きを抑えさせよ¹¹³⁾。そしてまた、そなたが〔同盟の〕誓いを立てた者たち¹¹⁴⁾のもとへ、またリャザン¹¹⁵⁾など各地へ使者を派遣せよ」。

またその時、イジャスラフ [D112:I] は、キエフの自分の弟ウラジーミル [D115] に向けて使者を派遣した¹¹⁶⁾。イジャスラフ [D112:I] は、かれをキエフへ残していたからである。また、府主教クリムと千人長ラザリ¹¹⁷⁾ (Лазорь) にも使者を派遣した。そして〔イジャスラフ [D112:I] は〕かれら〔三人〕にこう言った。「**[348]** 聖ソフィア〔教会〕の屋敷のところにキエフ人を呼び集めよ。わしの使者が、わしの言葉をキエフ人たちに話すことができるように。かれはチェルニゴフの諸公の欺瞞について証言するだろう」。

キエフ人たちは、身分の低い者から高い者までみな、聖ソフィア〔教会〕の屋敷の前に集ま

111) 「十字架接吻文書」(крестная грамота) 破棄については、6652〔1144〕年の項にウラジミルコ [A121] がフセヴォロド [C41] に対して発した「十字架接吻文書」を破棄したという記録がある。

112) イジャスラフ [D112:I] が指揮する遠征軍とロスチスラフ [D116:J] の部隊が合流する手はずになっていた地点。スモレンスク公領とロストフ＝スーズダリ公領の国境のあたりだったと考えられる。

113) イジャスラフ [D112:I] は、ユーリイ [D17] がチェルニゴフの諸公の側について援軍を出すことを恐れて、その動きの牽制を要請したのである。

114) 「〔同盟の〕誓いを立てた者たち」(ротники) とは、キエフ大公イジャスラフ [D112:I] が指揮をとったユーリイ [D17] 討伐の「大遠征」に参加することを、ロスチスラフ [D116:J] に誓っていた者たちを指す。ротник が非キリスト教的な語彙であることから、特にポロヴェツ人の同盟者を指している可能性が高い。いずれにせよ、このような者たちに、状況が変わって遠征は行われなくなったことを伝える使者を派遣せよということであろう。

115) 当時、リャザンは、ユーリイ [D17] の二人の息子ロスチスラフ [D171] とアンドレイ [D173] の勢力下に置かれていた。ロスチスラフ [D116:J] がそこへ使者を遣って、状況の変化を説明するということだろう。

116) ここは単数の使者(посоль)となっているが、『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では「二人の家臣ドブリニコとラヂロ」(2 мужа, Добрынку и Радилу) を派遣したと、使者の名が明記されている。

117) 1142年の記事に言及されているキエフの千人長(тысяцкий)、ラザリ・サコフスキイ(Лазорь Саковський)のこと。〔イパーチイ年代記(2)：326頁、注233〕も参照。

り、民会を開いた。そして、かれらに向かって、イジャスラフの使者が言った。「そなたたちに、自らの公が接吻の挨拶を送る。先に、わしはそなたたちに言明した。わしは、わが兄弟たちのロスチスラフ [D116:J]、ウラジーミル・ダヴィドヴィチ [C34]、イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] と相談して、自分の叔父ユーリイ [D17] を討つために行軍することにしたと。そして、わしとともに〔遠征に〕行くよう、そなたたちに呼びかけた。すると、そなたたちはわしに言った。ウラジーミル〔・モノマフ [D1]〕の一族であるユーリイ [D17] に手を上げることはできないが、オレーグの一族を討伐するのならば、郎党を引き連れて一緒に〔遠征に〕行ってもよいと。いま、わしはそなたたちに次のように言明する。ウラジーミル・ダヴィドヴィチ [C34]、イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35]、さらにスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G]（この者にわしは多くの善行を施してきたのだが）は、わしに〔誓いの〕十字架接吻をなした。ところが、今ではかれらは、わしに隠れて、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43]〔に同盟を誓う〕十字架接吻を行い、ユーリイ [D17] に使者を遣り、わしを欺いて、わしを捕まえるか、イーゴリ [C42] のゆえにわしを殺そうとしているのだ。しかし神はわしを護り、また、かれらがわしへの〔誓いを行った〕かの十字架もわしを護ってくれた。キエフの兄弟たちよ、先にそなたたちが望んだこと、わしに約束してくれたことを、今まさに〔為すがよい〕。わしの後について、チェルニゴフのオレーグの一族を討伐に行くのだ。身分の低い者から **[349]** 高い者まで。馬を持つ者は馬で、持たない者は舟で。もはや、かれらは、わし一人を殺そうとしているのではなく、そなたたちを根絶やしにしようとしているのだから」。

キエフ人たちは言った。「神が、われらの〔公の〕兄弟の¹¹⁸⁾ 大いなる欺瞞から、あなたを救い出したことは、われらにとって喜ばしいことです。あなたが望むように、われらは郎党を引き連れて、あなたのあとから行きましょう」。

すると一人の男がこう言った。「われらは自分たちの公のためであれば喜んで行こう。だが、先ずわれらは、次のことを思慮しようではないか。かつて、イジャスラフ・ヤロスラヴィチ [B] の時代に、かの悪党どもが牢屋を破壊してフセスラフ [0811:L] を解放し、自分たちの公に据え

118) 原文は братью нашу と双数生格形をとっており、チェルニゴフにいるウラジーミル [C34] とイジャスラフ [C35] の二人のダヴィドの息子を指している。наш の形容語はここでは「われらの公」（すぐ下にもイジャスラフ [D112:I] を指して用いられている）の意味で用いられている。

て、そのことによってわれらの城市に多くの悪事をなしたことを¹¹⁹⁾。かのイーゴリ [C42] は、われらの公 [イジャスラフ [D112:I]] の敵である。〔ところが〕われらの〔敵は〕牢屋にではなく、聖テオドロス〔修道院〕にいるではないか。かれを殺してから、自分たちの公のためにチェルニゴフへ進軍しよう。そして、かれら〔チェルニゴフ諸公〕と決着をつけようではないか。これを聞いた民衆は、その場からイーゴリ [C42] のいる聖テオドロス〔修道院〕へと向かい始めた。

ウラジーミル [D115] はかれらに言った。「わが兄 [イジャスラフ [D112:I]] は、そんなことをそなたたちに命じていない。イーゴリ [C42] のことは衛視が目張っている。われらは兄が命じたとおりに、出発しようではないか」。すると、キエフ人たちが言った。「¹²⁰⁾ あなたたち〔兄弟〕にとっても、われらにとっても、〔もし温情をかければ〕、この一族にとって結局うまく決着することができなかったことは¹²¹⁾、われらの知るところではないですか¹²²⁾」。

府主教はかれら〔キエフ人たち〕を制止した。千人長ラザリも、ウラジーミル [D115] の千人長ラグイロ¹²³⁾ (Рагуйло) も、なんとかイーゴリ [C42] が殺されないようにと制止した。しかし、かれら〔キエフ人たち〕はわめき声を上げ、イーゴリ [C42] を殺害するために出発した。ウラジーミル [D115] はそのあとを馬で追いかけた。民衆は橋¹²⁴⁾ を渡っていた。かれ〔ウラジーミル〕はかれらの傍らを馬で通りぬけることができず、馬を右に向けて、グレーブの屋敷の傍らを進

119) 『原初年代記』6576(1068)年の記事にある、ポロヴェツ人に敗北したイジャスラフ [B] から離反した、キエフ人の暴動によるフセスラフ [0811:L] の解放と、かれの大公就位、キエフ公館の掠奪、イジャスラフ [B] のポーランド亡命などの一連の事件を指している。

なお、『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では、イーゴリ [C42] を80年前のフセスラフと結びつけて語る「一人の男」についてのエピソードはなく、キエフ人たちはイーゴリを「われらの敵」とみなして殺そうとしたと単純に書かれている。現代の事件を過去の事件と結びつけ（動機付け）るのは年代記記者の常套手段であることから見て、このエピソードは年代記記者による創作である可能性が高い。（〔Фроянов 2012: С. 239〕も参照）

120) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事ではこの個所に、「われらはあなたの兄がそんなことは言っていない、命令していないといのは承知の上だ。しかし、イーゴリを殺そうと願っているのはわれらなのだ」というキエフ人の言葉が見える。

121) この「一族」(племя) は年代記におけるこの言葉の用法から見て「モノマフ一族」を指している。1139年から1146年までのキエフにおける「オレーグ一族」支配に不満を募らせてきたキエフ人の気持ちを代弁した言葉だろう。

122) 1068年の暴動以来、キエフではフセスラフ [0811:L]、イジャスラフ [B]、スヴァトスラフ [C] と次々と大公が代わり、ウラジーミル・モノマフ [D1] の父フセヴォロド [D] がキエフの大公に就いたのはようやく1079年のことであった。そのことを指しているが、これも年代記記者の創作だろう。

123) ラグイロは、当時ウラジーミル [D115] に勤務していたキエフ在地の千人長。1169年の記事にもその名があることから、当時はまだ若かったと考えられる。

124) キエフの、聖ソフィア聖堂があるヤロスラフ区とテオドロス修道院のあるウラジーミル区をつなぐ門(ソフィア門)の前の壕に掛けられた橋のこと。

んだ¹²⁵⁾。キエフ人たちはウラジーミル [D115] の前方で歩みを速めた **[350]**。

イーゴリ [C42] はこれを聞き付けると、聖テオドロス教会へと向かった。悲しみに打ちのめされた恭順の思いで、心底より息をつき、涙を流して、ヨブ¹²⁶⁾ の身に起きたすべてのことを想いながら、自らの心の中で次のように思慮した。「このような受難と様々な死が義人たちを見舞ってきたのだ。それは、あたかも聖なる預言者、使徒、殉教者たちが受難の冠を受け、主に倣っておのれの血を流したのと同じである。また、聖なる殉教司祭、修道聖人の師父たちが、多くの悲惨、激しい苦痛、様々な死を受けたこと、炉にかけられた黄金のごとく悪魔の惑わしを受けたことと同じである。主よ、これらの方々の祈りによって、右手の羊たちとともに、汝の選ばれた群れの中にわたしをお加え下さい。また、義しき信仰の聖なる諸帝が自らの血を流し、自らの民のために苦しみを受けたと同じように。さらに、われらが主なるイエス・キリストよ、尊き血によって悪魔の欺瞞からこの世を贖い給え」。

このように唱えて自らを慰め、再び次のように言った。「主よ、どうかわれの無力なることを見給え、わが恭順なること、今われを捕らえているひどい悲しみと嘆きを見給え。われは汝を恃んで堪え忍びます。救世主よ、汝が『われを信じる者は死すとも永遠に生きる¹²⁷⁾』と言ったのですから。主よ、汝がわが魂を慎ませることに、すべて感謝をいたします。この暗く、むなしく、はかない世から〔別の〕世界へ移ることをお助け下さい。汝の王国にあっては、われを、汝に適うすべての義人たちとともに **[351]**、汝の朽ちることなき、言葉にならぬ至福に与る者となし給え、主よ。もし今、わが血が流されるならば、われは、わが主のための殉教者になるでありません」。

かれら〔キエフ人たちは〕は、凶暴な獣のように、かれ〔イーゴリ [C42]〕に襲いかかり、いつものように聖テオドロス教会で聖体礼儀を奉じていたとき¹²⁸⁾、かれに掴みかかって、その修道衣を剥ぎ取った。かれはかれらに言った。「おお、無法者よ、敵〔悪魔〕どもよ、キリストのあらゆる義を貶める者どもよ。なぜ、盗賊のように、われを殺そうとするのか。そなたた

125) 「グレーブの屋敷」(Глѣбов двор) は、キエフの千人長ウレブ(Улѣб)が城内に持っていた屋敷のこと(『イパーチイ年代記(2)』の注334を参照)。ウラジーミル [D115] は民衆の大群にせき止められ、馬でウラジーミル区に直接入ることができなかったため、東側のイジャスラフ＝スヴァトボルク区を経由して、迂回するかたちでウラジーミル区へ向かったのである。

126) 「ヨブ」は旧約聖書『ヨブ記』の主人公で、忍耐、神への献身、謙譲を体現した人物として当時の文献では言及されている。なお、「心底より息をつき(…)思慮した」の文言は『イパーチイ年代記』1175年のアンドレイ敬神公 [D173] 謀殺の記事の中でも反復されている。

127) 『ヨハネ福音書』6:47,11:25 などからの引用。

128) この場面で、イーゴリ [C42] が死を前に祈っていた聖母イコンについての伝承があり、胸像のエレウサ型聖母子像が「イーゴリの聖母」(Игоревская икона Божей Матери)として伝わっている。[Грушевський Т. 2: С. 156, прим. 2][Святая русь Т.1: С. 549-550]

ちはわしに十字架接吻をして、わしを自分たちの公とすると行ったではないか¹²⁹⁾。そのことについては、わしはこれまで口にしたことはなかった。なぜなら、神の助けによりわしは修道士の位を受けたのだから」。

群衆の中の狡猾で不敬な者どもは、ますます声を張りあげて言った。「叩き殺せ、叩き殺せ」。そして、かれの上衣を剥ぎ取った。かれは、大きな声で言った。「おお、呪われた者どもよ。自分のやっていることを知らないのだ。これは、無知ゆえにやっているのだ。わが身体を裸のまま放り出すがよかろう。わしは裸でわが母の胎から来たのだから、裸でそこへ帰ろう¹³⁰⁾」。

このように言っているかれを、〔人々は〕捕まえて、修道院から連れ出した。ウラジーミル [D115] は修道院の門のところでもかれに遭遇した。イーゴリ [C42] はかれを見て『ああ、兄弟よ、わしはどこへ連れて行かれるのか』と言った。ウラジーミル [D115] は馬から飛び降りると、〔馬の〕上掛けでかれ〔イーゴリ〕を覆って、キエフ人たちに向かって言った。「わが兄弟たちよ、**[352]** そのような悪行をなすな、イーゴリ [C42] を殺すな」。そして、ウラジーミル [D115] はかれ〔イーゴリ〕を、自分の母¹³¹⁾の屋敷¹³²⁾の門のところまで連れて行った。しかし、その場で〔人々は〕イーゴリ [C42] を殴り始め、イーゴリ [C42] を打ちながら、ウラジーミル [D115] をも殴っていた。ミハイル¹³³⁾ はこれを見て馬から飛び降り、ウラジーミル [D115] に加勢をしようとした。ウラジーミル [D115] は、イーゴリ [C42] を防衛しながら、イーゴリを自分の母親の屋敷の中に引っ張り込んで、門扉を閉めた¹³⁴⁾。

〔人々は〕ミハイルを打ち、かれが身に付けていた十字架を鎖ごともぎ取り、かれが持っていた黄金のグリヴナ金貨も奪った。大勢が総掛かりでイーゴリを殴っていたので、ウラジーミル・ムスチスラヴィチ [D115] はこれを〔馬で〕蹴散らし、馬から飛び降りると、イーゴリ [C42]

129) キエフ公フセヴォロド [C41] の死の直後、1146年8月にキエフ人がイーゴリに対してなした忠誠の誓いを指している。[イパーチイ年代記 (2):340 頁]

130) 群衆の言葉と「上衣を剥ぎ取る」は、「福音書」のキリスト磔刑エピソードをふまえている。「わしは裸…」からここまでの文言は、旧約『ヨブ記』1:21からの引用。

131) ウラジーミル [D115] の母は、かれの父ムスチスラフ [D11] が1122年に後妻として迎えたノヴゴロド市長官ドミートリイの娘。1155年の記事でウラジーミル [D115] は「継母の子」(мачешич)と呼ばれていることからみて、かれと母親とは特別な強いつながりを持っていたことが推定される。[イパーチイ年代記 (2):注 30]を参照。

132) 以下に示される「ムスチスラフの館」(дворь Мстиславль)を指している。本稿注 135 参照。

133) 1169年の記事にウラジーミル [D115] の家臣(муж)として、千人長のラグイロと並んでミハル(Михал)という人物が言及されており、同一人物と推定される。ウラジーミル [D115] 配下の在地貴族だったのである。

134) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では、この個所に「そしてイーゴリを内壁の上に入れた〔隠した〕」(Игоря пусти на Кожюховы сѣни)と追加的な文言があり、さらに民衆はウラジーミルの母親の館に侵入して、内壁からイーゴリを引きずり出して殺害している。

の上に覆い被さった。

さて、イーゴリ [C42] は立ち上がり、ムスチスラフ [D11] の屋敷¹³⁵⁾ へ入った。さて、人々は、ウラジーミル [D115] を捕まえ、イーゴリ [C42] [を助けたこと] ゆえに、かれを殺そうとした。さて、群衆のうち取り囲んでいた者たちが、イーゴリ [が屋敷に入ったのを] 見て、ムスチスラフの屋敷へ殺到した。さて、群衆が移動して、[屋敷の] 門扉を破壊し、[イーゴリ] を打ち始めた。

イーゴリ [C42] は打たれながら言った。「主宰よ。わが靈魂を汝の手に引き渡します。わが魂を汝の世界にお引き取り下さい」。無法者どもは容赦なくかれを打ち、その身体を完全に裸にして放り出し、両足を縄で縛ると引き摺りはじめた。そして、まだ生きているかれに向かって、王たる神聖な身体に向かって罵りながら、ムスチスラフの屋敷から **[353]** バーバ市場 (Бабин торжек) を経て、公の館 (Князь двор)¹³⁶⁾ まで [身体を] 引き摺って行った。そして、その場でかれの命を絶った。さて、このようにして、オレーグ [C4] の息子であるイーゴリ公 [C42] は殺されたのである。

自分の父の国の善き護り手であったかれは、神の手にその靈魂を引き渡した。かれは朽ちるべき人間の衣を脱ぎ捨て、朽ちることない、キリストの大いなる受難の衣をまとい、苦しみを受けて、キリストによって、朽ちることのない冠を戴冠されたのだった。こうして、9月19日金曜日に神のもとへと身まかった。

その場所からかれ [の遺体は] 荷車に載せられて、ポドリエ地区の市場へと運ばれ、無法者たち、分別のない者たち、両目が盲いた者たちがかれ [の遺体を] 侮辱した。かれらは、復讐する者は神であり、神は無辜の者の血を贖うことを知っていたにもかかわらず。また、信心深い人々がやって来て、かれの血を取り、またかれが身に付けていた下着の一部を取った。これは、自らの救いのためであり、病の治癒のためであった。それから、かれの裸の身体を自分たちの衣服で覆った。

[遺体が] 市場で放置されたことについてウラジーミル [D115] に報告があった。そこに千人長が派遣された。かれは馬でやって来て、イーゴリ [C42] が殺されて放置されているのを見て、こう言った。「見よ、すでにお前たちはイーゴリ [C42] を殺してしまった。かれの遺体を葬ろう」。キエフ人たちは言った。「かれを殺したのはわれわれではありません。オレーグの息子[スヴァ

135) 「ムスチスラフの館」(дворъ Мстиславль) は、ウラジーミル [D115] の「自分の母の館」と同じ。ウラジーミルの母はムスチスラフの死後も夫の館に住み続けていたのだろう。本稿注 132 参照。

136) 「ムスチスラフの館」「バーバ市場」「公の館」はキエフのウラジーミル区のテオドロス修道院から道を挟んだ北西側に隣接していた。なお、『ラヴレンチイ年代記』では「バーバ市場を経て聖なる聖母〔教会〕まで」、すなわち、「十分の一税聖母教会」(Десятинная Богородичина церковь) までイーゴリの体を引き摺っていったことになっている。

トスラフ [C43] であり、二人のダヴィドの息子〔ウラジーミル [C34] とイジャスラフ [C35]〕であり、フセヴォロドの息子〔スヴァトスラフ [C41:G]〕です。かれらが、われらの公¹³⁷⁾を討とうとして、奸策によって殺害を謀ったのですから。しかし、神はわれらの公の味方です。聖なるソフィアも〔味方です〕。

千人長はイーゴリ [C42] 〔の遺体を〕収容するよう命じ、**[354]** これを運んで、聖ミハイル教会¹³⁸⁾に安置した。その夜、神はかれ〔イーゴリ〕の上に大いなるしるしを顕した。教会内のすべての蠟燭をかれの上に灯したのである。翌朝、ノヴゴロド人たちがやって来て、〔そのことを〕府主教に告げた。府主教はかれらに禁じて、だれにも告げないようにと言ひ、かれ〔イーゴリ〕の上に神が顕したこのような恩寵について秘密にしておくよう命じた。

明けて土曜日¹³⁹⁾になると、府主教は、聖テオドロス〔修道院〕の典院アナニヤ(Онанья)を〔ミハイル教会へと〕派遣した。典院は馬でやって来て、かれ〔イーゴリ〕が裸なのを見ると、これに衣を着せた。そして、通常の〔甲いの〕聖歌を唱えてから、〔遺体を〕城内の端にある聖シメオン修道院に運んだ。そこがかれの父〔オレーグ [C4]〕と祖父スヴァトスラフ [C] の修道院だったからである¹⁴⁰⁾。そして、そこに安置した¹⁴¹⁾。

その時、イジャスラフ [D112:I] はスポイ川¹⁴²⁾ (Супой) の上流に幕営を張っていた。ウラジーミル [D15] は、その場所へかれに宛てて使者を派遣し、かれにイーゴリ [C42] が殺されたことを報告した。

イジャスラフ [D112:I] はこれを聞くと、涙を流して言った。「もし、このようなことが起こり得ることを知っていたなら、かれ〔イーゴリ〕を守るためにかれを遠方へと遠ざけて、イーゴリ [C42] を守ることができただろうに」。また、イジャスラフ [D112:I] は、自分の従士たち

137) 現在のキエフ大公イジャスラフ [D112:I] を指している。

138) 『ラヴレンチイ年代記』にはこの教会について、「ノヴゴロド人の礼拝所」(в Новгородскую божницу)と説明されていることから、遺体が放置された下町(ポドル)があり、キエフ人の手が及ばないこの教会の聖堂内に一時的に安置されたことがわかる。

139) これは1147年9月20日の土曜日に相当する。

140) キエフ城市の西にあるコピレフ区にある修道院。スヴァトスラフ・ヤロスラヴィチ [C] がシターデン公の公女オーダを娶ったときに、花嫁とともにトリアーの聖シメオン信仰が勧請されてキエフに建てられた教会と推定されており、当時はキエフにおけるスヴァトスラフ一族(イーゴリはスヴァトスラフの孫である)の菩提寺のような役割を果たしていた。[Литвина, Успенский 2010: С. 9-20]

141) 先の「またその時、イジャスラフはキエフの自分の兄弟ウラジーミルに向けて使者を派遣した…」からこの個所までの『イパーチイ年代記』の記述は「イーゴリ公殺害の物語」として独立性があり、『ラヴレンチイ年代記』の並行記事とくらべても際だった特徴がある。

142) ベレヤスラヴリ公国を流れドニエブル左岸に注ぐ川。その上流はベレヤスラヴリから北東の方角にあり、50kmほどと近い。

にこう言った。「わしは、民衆からのあらゆる非難をまぬかれるわけにはゆくまい。『イジャスラフ [D112:I] が殺すように命じた』と言う者もあろうが、これについては神が証人である。わしは命じても、教唆してもいない。さもなければ神が裁きを下すであろう」。

かれの家臣たちはかれに言った。「民衆が『イジャスラフ [D112:I] がかれ〔イーゴリ [C42]〕を殺した』とか『かれ〔イーゴリ [C42]〕を殺すよう命じた』などと言っているという、**[355]** 家来どもの言葉について、嘆くには及びません。公よ、神も万民も、あなたがかれを殺したのではなく、かれの兄弟たちが殺したことは知っているのです。かれらは、あなたに〔同盟を誓う〕十字架接吻をしておきながら、再びこれに違反して、あなたを欺いて、殺そうとしたのですから」。イジャスラフ [D112:I] は言った。「もし、すでにそのように行われたならば、われらは神の見そなわすところである。さもなければ神が裁きを下すであろう」。そして、かれ〔イジャスラフ〕はキエフ人への憤りを漏らした。

イジャスラフ [D112:I] は、ウラジーミル [D115] に宛ててゴロデチ¹⁴³⁾ (Городеч) へ使者を、ロスチスラフ [D116:J] へ宛ててスモレンスクへ使者を遣った¹⁴⁴⁾。

ウラジーミル・ダヴィドヴィチ [C34] のもとにも、イーゴリ [C42] が殺害されたとの報が伝えられた。ウラジーミル [C34] は、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] に使者を遣って¹⁴⁵⁾、「兄弟のイーゴリ [C42] が殺害されました」と報じた。かれ〔スヴァトスラフ [C43]〕は上級の従士たちを呼び集め、かれらにこのことを伝え、おのれの兄弟のことを激しく泣き悲しんだ。

その時、かれ〔スヴァトスラフ [C43]〕のところに、スーズダリからグレーブ・ユーリエヴィチ [D178] がやって来た。そして二人はクルスクへと軍を進めた¹⁴⁶⁾。ムスチスラフ [II] はユーレイの子〔グレーブ [D178]〕がスヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] とともに自分を討伐すべくクルスクへと進軍して来ることを聞くと、その旨をクルスク人たちに伝えた。クルスク人はムスチスラフ [II] に言った。「オレーグ一族が進軍してくるのなら、われらは、そなたのために、郎党とともに喜んで戦いましょう。ただし、ウラジーミル [D1] の一族であるユーレイの子〔グレーブ [D178]〕に手を挙げることはできません」。ムスチスラフ [II] はこれを聞いて、**[356]** 自ら父〔イジャスラフ [D112:I]〕のもとに〔逃れて〕行った。

143) キエフからチェルニゴフへ向けてデスナ川をさかのぼった途中、オステル川河口にあるオステルスキイ・ゴロデツ (Остерский Городок) のこと。ウラジーミル [D115] は当初の予定通りチェルニゴフ遠征のためにゴロデツまで達していたのだろう。

144) 双方とも、イーゴリ殺害事件によって大義名分を失ったイジャスラフ [D112:I] が、チェルニゴフへの遠征を中止する旨を知らせる使者と考えられる。

145) この時、スヴァトスラフ [C43] はオカ川の最上流にあるクロム (Кром) の城砦にいた。

146) クロム (現在のロシア連邦の町クロムイ (Кромы)) からクルスクまでは南へ向かって 110km ほどの距離である。

クルスク人はユーリイの子〔グレーブ [D178]〕のもとへ使者を遣り、かれのところから自分たちのために代官を連れてきた。〔グレーブは〕自分の代官をかれら〔クルスク人〕のもとに置くと、自分はスヴァトスラフ [C43] とともに出立し、そこから、ヴィル¹⁴⁷⁾ (Выр) 方面へと向かった。グレーブ・ユーリエヴィチ [D178] は、セイム川沿岸と平原¹⁴⁸⁾ を越えて進み、ヴィル川周辺の近辺の諸城市に次々と自分の代官を置いていった。ポロヴェツ人の多くは、かれら〔グレーブ [D178] とスヴァトスラフ [C43]〕に対して〔同盟を誓う〕儀式を行った。

そのかれらのもとに、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] がやって来た。

ヴィリの住民へ〔グレーブ [D178] とスヴァトスラフ [C43]〕の軍使が派遣されてきて、こう言った。「そなたたちは、われわれを裏切るな。われわれは、そなたたちをポロヴェツ人に捕虜として与えるぞ」。かれらは〔答えて〕言った。「われらの公はイジャスラフ [D112:I] です」。こうして、かれら〔ヴィリの住民〕はかれら〔グレーブ [D178] とスヴァトスラフ [C43]〕に服従することはなかった。

そこ〔ヴィリ〕から、かれら〔グレーブ [D178] とスヴァトスラフ [C43]〕は、ヴィヤハニ¹⁴⁹⁾ (Вьяхань) へ行った。そこを攻め落とすことできなかった。そして、そこからポパシ¹⁵⁰⁾ (Попашь) へ行った。そこに向けてかれらに対して、イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] が攻撃を加えた。戦闘があり、かれらはポパシを占領した。

その頃、イジャスラフ・ムスチスラヴィチ [D112:I] のもとに報がもたらされた。ヴィヤハニ (Вьяхань) と他の城市は戦闘で〔敵を〕撃退したが、ポパシは占領されたというのである。イジャスラフ・ムスチスラフ [D112:I] は多くの兵を徴集した¹⁵¹⁾。ヴァチェスラフ [D16] のもとからもかれのところへ援軍がやって来た。ヴラジミルの城市からかれのもとに部隊がやって来た¹⁵²⁾。こうして、イジャスラフ [D112:I] は自分の部隊を率いてベレヤスラヴリに向かった。そこでは、かれの弟ロスチスラフ [D116:J] から、ロスチスラフ [D116:J] はすでにかれのもとへ

147) 「ヴィル」(Выр) は、セイム(Сейма)川の支流であるヴィル(Выр)川の中流域にあった城砦を指している。

148) 「平原」(поле) は、ポロヴェツ人が展開するステップ地帯のこと、ここではセイム川からプショール(Псел)川に至る、いわゆるセイム川流域一帯(Посеьме)を指すと思われる。本稿注1も参照。

149) 「ヴィヤハニ」(Вьяхань) は、テルン川(Терн)がスーラ川に合流する河口近くにあった城砦で、ヴィリからは南西に約25km、クルスクから見ると、南西に約175kmの遠方にある。現在はロハンスコエ・ゴロディシチェ(Лоханское городище)として遺構が確認されている。

150) 「ポパシ」(Попаш) は、スーラ川河畔にあった城砦で、現在のウクライナのネドリガイロフ(Недригайлов)近郊にその遺構がある。ヴァィヤハニから西に12kmほど離れている。

151) キエフの住民を徴集して、遠征のための軍兵を組織することを意味している。

152) 当時、ヴラジミル=ヴォルィンスキイには、イジャスラフ [D112:I] の従兄弟にあたる、ウラジミル・アンドレヴィチ [D181] が公として座していた。援軍もかれが派遣したものである。

と向かっているとの報がもたらされた。さらに、ロスチスラフ [D116:J] の使者は、かれ〔イジャスラフ〕に言った。「兄弟〔ロスチスラフ〕はあなたにこう言っている。『わしを待て。わしは、そなたのために、ここで【357】リユーベチ¹⁵³⁾ (Любець) を焼き、多くのものを掠奪した。オレーグ [C4] 一族に対して、多くの悪をなした。われら二人は、神がわれらに顕すことを同じ場所で見ようではないか¹⁵⁴⁾ 』」。

これを聴いたイジャスラフ [D112:I] は、ゆっくりと軍を進め、自分の弟ロスチスラフ [D116:J] の到来を待った。イジャスラフ [D112:I] はチェルナヤ・モギラ¹⁵⁵⁾ (Черная Могила) の場所で陣を張った。そのかれのもとへ、弟のロスチスラフがスモレンスク人と多くの兵を率いてやって来た。こうして、イジャスラフ [D112:I] は、自分の弟ロスチスラフ [D116:J] と合流し、神を讚美し、自分の弟〔の到来を〕喜んだ。

そして、〔イジャスラフは〕自分の弟ロスチスラフ [D116:J]、従士団、黒頭巾族たちとともに、遭遇戦をするため、かれら〔敵勢〕が陣を張っているスーラ (Сула)¹⁵⁶⁾ 川方面へ向けて、どのように軍を進めるかについて協議を始めた。

ロスチスラフ [D116:J] が自分の兄弟のイジャスラフ [D112:I] に言った。「兄よ、見よ、神はわれらを一つの場所で合わせてくれ、神はそなたを、捕まえるか殺そうとする大いなる奸計から救い出してくれた。今となつては、兄よ、時を待つには及ばない。そなたが敵勢と遭遇をする場所へ、われらも進軍しよう。われらとかれらの事については、神が裁きを為すことであるう」。こう言うと、かれらはスーラ川に向けて進軍を開始した。

イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35]、スヴャトスラフ・オリゴヴィチ [C43] およびポロヴェツ人は、イジャスラフ [D112:I] が兄弟のロスチスラフ [D116:J] と合流して、かれらのもとに進軍しているとの報を聴いた。すると、その夜のうちに、ポロヴェツ人はかれらのもとを去って、ポロヴェツ人のもとへと行ってしまい、僅かなポロヴェツ人がかれらのもとに残っただけだった。かれら自身はチェルニゴフへと向かった¹⁵⁷⁾。

153) 「リユーベチ」 (Любець) は、ドニエプル中流左岸に位置する古都で、チェルニゴフの北西約 50km と近く、当時はオレーグ一族の支配下にあったと考えられる。

154) 「神がわれら二人に顕すことを同じ場所で見よ」 (видивъ оба по мѣсту, что намъ Богъ явить) は、これ以降の年代記事に何度もあらわれる定型句で、ここでは、戦争によってオレーグ一族と決着を付けるように決意する言葉。公同士の戦争は神の裁き (神判) によるという考え方が背景にある。

155) 「チェルナヤ・モギラ」 (Черная Могила) は文字通りでは「黒い墳丘」を意味するが正確な位置は不明。状況から判断して、ベレヤスラヴリ公領内にあったと推定される。

156) 上述のヴィヤハニヤボバシの城砦はスーラ川の上流域にあった。

157) 形勢が悪くなったので、チェルニゴフに撤退して籠城するためであろう。

イジャスラフ [D112:I] とロスチスラフ [D116:J] は、ポロヴェツ人が分散したとの報を聞いた。**【358】** また、かれら〔敵勢の動き〕について聴いて、チェルニゴフへと軍を進めた。二人は、敵勢と遭遇するためにはどこへ進めばよいかについて、自分たちの家臣、従士団、黒頭巾族と相談をし始めた。黒頭巾族とかれの従士たちは「われらはフセヴォロジ¹⁵⁸⁾ (Всеволожь) へ行けば〔敵と〕遭遇できるでしょう」と言った。こう言うと、敵勢と遭遇するために進軍したが、フセヴォロジまでの間に敵と出遭うことはなかった。なぜなら、イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35]、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43]、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] はすでに、フセヴォロジを過ぎて先へ行ってしまったからである。

イジャスラフ・ムスチスラヴィチ [D112:I] と弟のロスチスラフ [D116:J] は、かれら〔敵勢〕を追って軍を進めることはしなかった。しかし、すぐにフセヴォロジへ自分の部隊とともに向かって、フセヴォロジの城市を占領して掠奪し、他にも二つの城市を占領した。他の城市、すなわちウネネジ¹⁵⁹⁾ (Уненѣж), ベラヴェジャ¹⁶⁰⁾ (Белавежа), バフマチ¹⁶¹⁾ (Бахмачь) の住民たちは、フセヴォロジが占領されたとの報を耳にして、チェルニゴフへ向けて逃げ出した。他の多くの城市の住民もやはり逃げ出した。

イジャスラフ [D112:I] とロスチスラフ [D116:J] は〔このことを〕聴くと、かれら住民を追って兵を派遣し、原野でかれらに追い付くと、これらの3つの城市を占領した。他の城市の住民たちは逃げ出した。イジャスラフ [D112:I] はこれらの城市に火をかけるよう命じた¹⁶²⁾。

グレーブリ¹⁶³⁾ の住民 (Глебьци) たちは、ウネジ、ベラヴェジャ、バフマチのことを聞いて、あわてて逃げ出した。イジャスラフ [D112:I] とその弟のロスチスラフ [D116:J] は、このことを聞いて、グレーブリへと軍を進めた。グレーブリへとやって来ると、部隊を編成して城市へ向

158) 「フセヴォロジ」(Всеволожь) は、チェルニゴフから南東約 65km に位置する現在のシヴォロジ (Сиволож) に同定されている。当時はチェルニゴフ公領の城砦だった。

159) 「ウネネジ」(Уненѣж) は、現在のウクライナの都市ニージン (Ніжин) のこと。オステル川河岸の城砦だった。

160) 「ベラヴェジャ」(Белавежа) (「ペロヴェジャ」(Беловежа) 「スターラヤ・ヴェラヴェジャ」(Старая Белавежа) とも) の正確な位置は不明だが、ウネネジからさらにオステル川をさかのぼった最上流に位置する考えられている。ペーラヤ・ベジャ (Белая Вежа) は古くはハザールの都市サルケル (Саркел) を指しており、カラムジンは、この城市について、モノマフによってオステル川上流域にハザール人が定住するために築かれたのが始まりだとしている [Карамзин Т. II-III: С. С. 93]。

161) 「バフマチ」(Бахмачь) は現在のウクライナの都市バハマチ (Бахамач) のこと。

162) イジャスラフ [D112:I] がこれらの城市に火をかけたことについては、のちにイジャスラフ [C35] によって言及されている (本稿注 264 参照)。

163) 「グレーブリ」(Глебль) はチェルニゴフ公領にあった城砦でその位置は不明。ナソーノフをはじめとする研究者は、現在のドミトロフカ (Дмитровка) 近郊にあったと同定している。すぐ後に、「二人の殉教者」、すなわち聖ボリス [14] と聖グレーブ [15] の庇護によってこの城市を防衛したとあることから、「グレーブリ」の都市名は聖グレーブにちなんだものである可能性が高い。

かって突撃した。戦いが始まった。**[359]**城内からは激しい抵抗の戦いがあった。朝から始まった戦闘は夜まで続いた。こうして、神と聖なる聖母、聖なる二人の殉教者〔聖ボリス [14] と聖グレーブ [15]〕が、強力な軍隊から城市を守ったのである。

イジャスラフ [D112:I] とその弟のロスチスラフ [D116:J] は、そこ〔グレーブリ〕からもとの場所へ戻り、キエフに向かった。そして、自分の従士団、キエフ人、スモレンスク人たちに向かって言った。「川が氷結するまでにすべて決着を付けてしまおう。チェルニゴフへ進軍しよう。われらとかれらについては神が決めてくれるだろう」。こうして、二人〔イジャスラフとロスチスラフ〕はキエフにやって来ると、神を讃美し、聖なる教会に礼拝し、宴会を開いた。

こうして、すべてを済ませると、イジャスラフ [D112:I] は、自分の弟のロスチスラフ [D116:J] に対してこう言った。「弟よ、神はそなたに上流の地を与えた。そなたはそこで、ユーリイ [D17] に対抗するために行け。そこのそなたのところでは、スモレンスク人、ノヴゴロド人、そなたが同盟を約した者たちがいる。そなたはそこで、ユーリイ [D17] を押しとどめよ。わしはここに残る。神はわしに、オレーグ [C4] の二人の息子〔スヴァトスラフ [C43] とスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G]〕とダヴィド [C3] の二人の息子〔イジャスラフ [C35] とウラジーミル [C34]〕との決着をつけてくれるだろう。

ロスチスラフ [D116:J] はスモレンスクへ行った。その後になって、川が氷結した頃に、オレーグの息子¹⁶⁴⁾〔スヴァトスラフ [C43]〕とダヴィド [C3] の二人の息子〔イジャスラフ [C35] とウラジーミル [C34]〕は、自分たちの従士団とポロヴェツ人を派遣して、ブリアギン¹⁶⁵⁾ (Брягин) を攻略した。

164) フレーブニコフ写本では「オレーグの息子たち」(Олговичи)と複数形になっている。その場合には、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] を含むことになる。

165) 「ブリアギン」(Брягин)は現在のベラルーシの都市ブラーギン(Брагин)のこと。リューベチから西北西に約 30km の位置にある。

その年の夏、グレーブ・ユーリエヴィチ [D178] がやって来て¹⁶⁶⁾、父親のゴロドク¹⁶⁷⁾をイジャスラフ [D112:I] から奪い取った。イジャスラフ [D112:I] はこれを聞くと、かれのところには使者を遣って、かれをキエフの自分のところに呼び出そうとした。〔グレーブ〕はかれ〔イジャスラフ〕のところへ行くことを約束したが、行かなかった¹⁶⁸⁾。それは、ジロスラフ¹⁶⁹⁾ (Жирслав) が、かれ〔グレーブ〕にこう言ったのを聞き入れたからである。「ベレヤスラヴリに行きなされ、ベレヤスラヴリの人々はそなたを〔公にと〕望んでいます」。かれ〔グレーブ〕はこの進言を聞き入れて、**[360]** ベレヤスラヴリへと急行した。

さて、夜が明けるころ、まだムスチスラフ¹⁷⁰⁾ [I1] もかれの従士たちも横になっていたとき、警備兵たちが慌ててやって来て、かれ〔ムスチスラフ〕に言った。「公よ、寝ている場合にはありません。グレーブ [D178] がそなたを討伐しようと急ぎやって来ます」。〔ムスチスラフ〕は従士団を集め、かれ〔グレーブ〕を迎え撃つために城市を出た。グレーブ [D178] は夜明け前に、進軍をやめ、もとの道に戻ってしまった。ムスチスラフ [I1] は従士団とベレヤスラヴリ人〔の部隊〕を結集すると、かれ〔グレーブ〕を追走し、ルダ¹⁷¹⁾ (Руда) 川のノソフ¹⁷²⁾ (Носов) 付近に追い詰め、かれ〔グレーブ〕の従士の何人かを捕虜に獲った。かれ〔グレーブ〕自身はゴロデチ¹⁷³⁾ (Городечь) へ行き、他方、ムスチスラフ [I1] はベレヤスラヴリへと〔戻って〕行った。

イジャスラフ [D112:I] はこの出来事のことを聞いて、従士団とベレンディ人を集めた。こう

166) 『ラヴレンチイ年代記』 6656(1148)年の項にある並行記事には、グレーブ [D178] は「オレグ一族を援助するためスズダリからチェルニゴフにやって来て、かれらのもてしばらく過ごし」(ис Суждаля Чернигову в помощь Олговичемъ и пребывъ у нихъ нѣколикo) とあるように、チェルニゴフから来たことが分かる。

167) オステル川河口に築かれた城砦都市「オステルスキイ・ゴロデツ」(Остерский городец) のこと。『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では「ゴロドクを討つべくやって来た」(прииде на Городок) と表現されている。この城市はチェルニゴフ領とベレヤスラヴリ領の境界のベレヤスラヴリ領側に属し、「父親のゴロドク」(городокъ отень) となっているのは、ユーリイ [D17] と弟のアンドレイ [D18] がベレヤスラヴリを支配していた 1141 年頃までは、かれらの影響力が及んでいたことを指している。その後、歴代のキエフ大公の所領地となった。当時は、ムスチスラフ [I1] およびその父イジャスラフ [D112:I] が支配していたと考えられる。[イパーチイ年代記訳注 (2) : 323 頁, 注 215] も参照。

168) タティーシチェフによると、イジャスラフ [D112:I] はグレーブ [D178] の懐柔を図ったとする。

169) グレーブ [D178] に仕える側近貴族。

170) ムスチスラフ [I1] は 1146 年夏に、父のイジャスラフ [D112:I] がキエフ大公となり、それまでの支配地ベレヤスラヴリからキエフに移ったのに伴い、ベレヤスラヴリを所領として支配していたとされており、本記事でそのことが確認できる。

171) 「ルダ」(Руда) 川の名称については不明。現在ノシフカを流れているノシヴォチカ川 (річка Носівочка) の当時の通称か。

172) 「ノソフ」(Носов) は、現在のウクライナの都市ノシフカ (Носівка) のことで、ベレヤスラヴリからだ北方へ約 100km 離れている。

173) 前注 167 のオステルスキイ・ゴロデツのこと。

して、イジャスラフ [D112:I] はグレーブ [D178] を討伐するためゴロドク¹⁷⁴⁾ (Городок) へ向かった。

グレーブ [D178] は、ウラジーミル [C34] とスヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43]¹⁷⁵⁾ に使者を遣って、かれ〔スヴァトスラフ〕にこう言った。「イジャスラフ [D112:I] がわしを討ちにやってくる。わしに援軍を送れ」。しかし、かれらはなにも助けることができなかった。

イジャスラフ [D112:I] はグレーブ [D178] を討つべくゴロドクへと進軍し、その城市を3日間包囲した。〔グレーブ・〕ユーリエヴィチ [D178] は恐れおののいて、ゴロドクの城市から馬で出ると、イジャスラフ [D112:I] に拝礼¹⁷⁶⁾ して、かれと和議を結んだ。イジャスラフ [D112:I] はキエフに戻った。

〔グレーブ・〕ユーリエヴィチ [D178] は、ウラジーミル [C34] に使者を遣って、こう伝えた。「わしは、イジャスラフ [D112:I] に十字架接吻をしたが、これはわしの本意からではない。それは、かれがわしの城市を包囲したからであり、そなたたちから援軍がなかったからである。今でも、すべてについて、そなたたち二人とともにあることを、わしは望んでおり、そなたたちを味方と思っている」。

6656 [1148] 年

イジャスラフ [D112:I] は、再びチェルニゴフへ向けて軍を發した。**[361]** かれは、自らの軍兵を集め、さらに使者を遣って、自分の叔父であるヴァチェスラフ [D16] から部隊を派遣させた。ハンガリー (Угор) からは自分への援軍の部隊を導入した¹⁷⁷⁾。また、ヴラジミル¹⁷⁸⁾ からの部隊も導入し、自分のベレンディ人の部隊もすべて集め、こうしてチェルニゴフへと進軍した。

やって来ると、オレーグの原¹⁷⁹⁾ (Ольгово поле) に陣を張った。そこで3日間陣を構えたが、イジャスラフ [D112:I] を迎え撃つために、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43]、イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] とウラジーミル・ダヴィドヴィチ [C34]、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] [の諸公が] チェルニゴフの城市から出てくることはなかった。

174) この「ゴロドク」(Городок) は前注 167, 173 の「ゴロデツ」と同じ。

175) 当時、二人はチェルニゴフにいた。

176) 降伏の儀礼。[イパーチイ年代記(2): 292頁, 注37] も参照。

177) イジャスラフ [D112:I] の末の妹エフロシニアは、1146年にハンガリー王ゲーザ二世と結婚している。[Rusian genealogy: Evfrosiniia Mstislavna] この結婚は、1146年当時ムスチスラフ [D11] 一族の最年長者であるイジャスラフ自身とハンガリー王の同盟強化のために結ばれたと考えることができる。

178) この時には、ウラジーミル・アンドレエヴィチ [D181] がヴラジミルの公座に就いていた。

179) 「オレーグの原」(Ольгово поле) はチェルニゴフの内城(детинец)から西方に1～4kmほどの範囲に広がる平原で、城市の外縁に敷設されていた防柵(острог)にはほ接していた。現在のチェルニゴフ市のリゴフ(Льгов)地区やベロウス(Белоец)地区あたりがおよそ該当する。

イジャスラフ [D112:I] はそこに陣を置いたまま、かれらの村をほとんどボロヴォス¹⁸⁰⁾ (Боловос) にいたるまですべて焼き尽くした。

イジャスラフ [D112:I] はこう語り始めた。「われらはかれらの村々をすべて焼き払った。すべての資産も〔焼き払った〕。ところが、かれらはわれらに対して〔城市から〕出てこようとしない。われらは、リユーベチ (Любеч) に行こう。そこには、かれらの資産がすべてある」。こうして、イジャスラフ [D112:I] は協議したすえに、リユーベチに向かった。リユーベチに達するまで5日かかった¹⁸¹⁾。イジャスラフ [D112:I] はリユーベチの城下で布陣した。

その時、ウラジミール・ダヴィドヴィチ [C34]、イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35]、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] がその甥のスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ¹⁸²⁾ [C411:G] とともに〔リユーベチへと〕やって来た。リヤザンの諸公¹⁸³⁾ もポロヴェツ人とともにやって来た。リユーベチの近くに川があり、かれらはやって来ると、川を防衛線にして陣を張った。

さて、日曜になってイジャスラフ [D112:I] は自分の軍兵に戦闘準備をさせ、かれらに向かって進軍した。しかし、かれはその川を渡ってかれらの軍隊まで達することはできず、射手たちが兩岸から川に向かって弓を射た。その夜、非常にどしゃぶりの雨【362】が降った。翌朝、イジャスラフ [D112:I] はドニエプル川の氷が弱くなっているのを見て¹⁸⁴⁾、自分の家臣たちやハンガリー人たちに言った。「見よ、われらはこの軍隊とこの川の上で戦うことはできない。ほらあそこの、われわれの背後で、ドニエプル川の氷が動いている。ドニエプル川を渡ってしまおう」。そう言うと、イジャスラフ [D112:I] は、月曜日にドニエプル川を渡り始めた。翌日、ドニエプルの氷は割れた。イジャスラフ [D112:I] は対岸をキエフに向けて軍を進めた。ハンガリー人は急いで湖を渡って去ろうとしたが、湖の氷が割れて、何人もが溺れ死んだ。

イジャスラフ [D112:I] はキエフにやって来ると、神と生命を与える十字架の力を讃美した。そして、イジャスラフ [D112:I] は、自分の弟ロスチスラフ [D116:J] に使者を遣って、次のように言った。

180) 現在のチェルニゴフ市の中心地から西方に6kmほどに位置にあるベロウス (Белоус) 地区を指している。以下の記述によれば、イジャスラフ [D112:I] はチェルニゴフの西の一角を掠奪し、火をかけている。

181) チェルニゴフとリユーベチは約50kmほどしか離れていないことから、イジャスラフ [D112:I] はリユーベチへの道中で村落を次々と襲撃・掠奪をしながら行軍したと考えられる。

182) イパーチイ写本では、「オリゴヴィチ」となっているが、これは明らかな誤記である。

183) リヤザン諸公が誰であるかは定めがたいが、1146年に、ユーレイ [D17] の息子ロスチスラフ [D171] とアンドレイ [D173] によって、ロスチスラフ・ヤロスラヴィチ [C54] がリヤザンを追放されたあとに、スヴァトスラフ [C43] などの勢力を背景に、リヤザンの公位についた諸公と考えられる。

184) 川の氷が雨で溶け出したことと、6656年の記事の始めの記述であることから見て、1148年の初春(3～4月)の出来事であろう。

「弟よ、そなたに宣言する。われらはオレーグ [C4] 一族を討伐するためにチェルニゴフに進軍し、オレーグの原で布陣した。そして、われらは、かれらに対して多くの悪をなし、かれらの土地を掠奪した。そこでは、かれらは部隊を城市から出して戦うことはできなかった。われらは、そこからリュベチへ行った。かれらは、そこにいるわれらのところにやって来た。われらとかれらとは、川が隔てていた。そして、われらは、この川の上で部隊を出してかれらと戦うことはできなかった。その夜、どしゃ降りの雨が降った。ドニエプル川の氷は弱くなった。それゆえに、われらは対岸に渡った。こうして、神と聖なる聖母と **【363】** 生命を与える十字架の力は、われらを無事にキエフに導いたのである。弟よ、そなたに訊く。そなたは無事であるか。そちらでも神はそなたの助けとなっているか」。

その時、ウラジーミル・ダヴィドヴィチ [C34] は、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] とスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] に向けて使者を遣って言った。「兄弟たちよ、合流しようではないか。われらは無駄に兵を保持しておくことはできない」。

すると、スヴァトスラフ [C43] がこの二人のもとにやって来た。そしてかれらは、自分たちの使者たちをユーリイ [D17] へ向けて派遣し、次のように言った。

「そなたは、われらに対して十字架接吻を行い¹⁸⁵⁾、われらとともにイジャスラフ [D112:I] を討つことを誓った。ところが、そなたはやって来ない。他方、イジャスラフ [D112:I] は、デスナ川を渡って、われらの諸城市を焼き、われらの地を掠奪した。また、イジャスラフ [D112:I] は再びチェルニゴフにやって来て、オレーグの原に布陣し、そこで、われらの村々を、リュベチにいたるまで焼き尽くし、われらの資産をすべて掠奪した。ところが、そなたはわれらの所にも、ロスチスラフ [D116:J] の所にも来なかった。今、そなたがイジャスラフ [D112:I] を討とうと欲するならば、来たれ。われらはそなたとともに〔戦おう〕。もし、そなたが来なくても、われらは十字架接吻において義しいとされている。だから、われらだけが、戦いにおいて滅びることはあり得ない」。

その時、グレーブ・ユーリエヴィチ [D178] はペレヤスラヴリ人と話を付けて¹⁸⁶⁾、ゴロデツ (Городец) からかれら〔ペレヤスラヴリ人〕のところへ〔遠征の軍を〕進めた。ムスチスラフ・イジャスラヴィチ [I1] は、かれ〔グレーブ〕が自分を討つべくやって来るとの報を受け、自分の部隊とペレヤスラヴリ人を率いて、対抗すべく〔ペレヤスラヴリの城市を〕出た。グ

185) 1147年4月初めのモスクワでのユーリイ [D17] とスヴァトスラフ [C43] を指していると考えられる。

186) グレーブ [D178] がペレヤスラヴリを攻めた場合には、かれの味方になるという内々の取り決めをペレヤスラヴリの有力者で行ったということだろう。

レーブ [D178] は、ムスチスラフが自分に向けて進軍しているのを見て、グレーブ [D178] は小勢だったので、**[364]**「ペレヤスラヴリ人はわしを欺したのだ」と言った。そして、対抗して陣を張ることもかなわず、あわてて引き返した。かれら〔ムスチスラフ軍〕は、かれ〔グレーブ〕の従士団に追い付いて、これを捕虜に獲り、また撃ち殺した。スタニスラヴィチ¹⁸⁷⁾(Станиславич)も捕まり、残忍に処刑された。また、他に多くの者たちが捕虜に獲られた。グレーブ [D178] はゴロデツに逃げたが、そこに滞在することもかなわず、チェルニゴフのウラジーミル・ダヴィドヴィチ [C34] のもとへと逃走した¹⁸⁸⁾。

その時、かれら〔チェルニゴフにいる諸公〕が派遣した使者たちがユーリイ [D17] のもとから帰ってきた。かれらはかれ〔ユーリイ〕の援助を得ることができなかった。

二人のダヴィドの子ウラジーミル [C34] とイジャスラフ [C35]、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43]、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] は、自分たちの使者をイジャスラフ・ムスチスラヴィチ [D112:I] のもとに派遣し、和平を求めて、こう言った。「以前、われらの祖父、われらの父たちの時と同じである。『戦いまでは平和、平和までは戦い』¹⁸⁹⁾〔言うではないか〕。だから、今、われらが戦争の構えをしていることについては、われらのことを不服に思うな。われらも、自分たちの兄弟イーゴリ [C42] のことでは不服だったのだから。われらが求めたのは、そなたがわれらの兄弟〔イーゴリ〕を釈放することだけだった。はたして、われらの兄弟〔イーゴリ〕は既に殺されて、神の御許に行ってしまった。そこには、いずれわれらもみな行くことになるだろう。そうすれば、神が裁きをなしてくれよう。それ以前に、われらがルーシの地を滅亡させてしまうのは、いかなものだろうか。われらはこれまでも和解したことがあるではないか」。

イジャスラフ [D112:I] はかれらに〔答えて〕言った。「兄弟たちよ。キリスト教徒の命を大切にすることは善いことである。そなたたちは会合をして〔和平の提案を決めた〕のだから、わしも兄弟のロスチスラフ [D116:J] のもとへ使者を遣うことにしよう。そして、かれ〔ロスチスラフ〕と再び相談をして、それから、われら二人の使者をそなたちに派遣することにしよう」

〔イジャスラフは〕このようにかれらの使者たちに返事をして、かれらの使者たちを〔チェルニゴフへと〕送り帰した。それから、自分の兄弟ロスチスラフ [D116:J] に向けて、**[365]** 自

187) スタニスラヴィチ(Станиславич)は、グレーブ [D178] の配下の貴族のことだろう。

188) ペレヤスラヴリ人が味方することを期待した、グレーブ [D178] によるゴロデツからペレヤスラヴリへの遠征、期待外れによる撤退、ムスチスラフ [I1] の追撃という一連の事件は、一年前の6655(1147)年の項でも記されている。これだけ似ていると、同じ事件についての資料を2年に分けて使ったのではないかという疑問も湧くが、ひとまずは別の事件として考えておきたい。

189) この言い回しは、年代記で何回も現れており、一種の格言と考えられる。

分の家臣たちを使者として派遣して、こう言った。「見よ。[チェルニゴフの]兄弟たちとわしは、使者をやり取りした。そして、ウラジーミル [C34] とイジャスラフ [C35] の二人のダヴィドヴィチ、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43]、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] たちは、和平を請うた。そこで、わしは再びそなたと相談したい。われら二人にとってどのようなことが最適であるのか。和平が適切なのか。かれらはわれらに悪を為したにもかかわらず、今、われら二人に和平を請うている。再び戦争をするのが適切ではないのか。わしはそなたに解決を委ねる」。

ロスチスラフ [D116:J] は、自分の兄弟イジャスラフ [D112:J] に返答して言った。「兄よ。わしはそなたに拝礼する。そなたはわたしにとって長上であるのだから。そなたが決めたことを、わたしは〔行う〕つもりである。兄よ、もし、そなたがわしに名誉を加えてくれるならば、兄よ、わしはかつて『ルーシの地のために、キリスト教徒のために、兄よ、わしは和平をより愛好する』と言った。あの者たちは戦争を引き起こしたが、いったい何を得られたというのか。兄よ、今は、キリスト教徒のため、全てのルーシの地のために和平を定めるがよい。かれらが、イーゴリ [C42] についての敵意を断って、これまで為そうとした事を、再び為すことがないようにせよ。もし、かれらがそのことを諦めるなら、和を結べ。もし、かれらがイーゴリ [C42] についての敵意を再び持つようであれば、その時にはあの者たちと戦争を構えるのがよいだろう。その時には、われらとかれらとのことは神が定めるであろう」。

イジャスラフ [D112:I] はこれを聞くと、ウラジーミル・ダヴィドヴィチ [C34] とその兄弟イジャスラフ [C35]、スヴァトスラフ・**[366]** オリゴヴィチ [C43]、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] のもとに、ベルゴロド主教フェオドル¹⁹⁰⁾ と洞窟修道院の典院フェオドーシイ¹⁹¹⁾ (Деодос) を使者として、さらに自分の家臣たちを二人に随行させて、チェルニゴフへと派遣した。そして、かれら [チェルニゴフの4人の諸公] に言った。「そなたたち二人はわしに十字架接吻をして、兄弟のイーゴリ [C42] を求めないと〔誓った〕にもかかわらず、それに違反して、わしに極度の憤激を引き起こさせた。今はこのことは全て思い出さないことにしよう。ルーシの地のために、キリスト教徒のために。もし、そなたたちが、わしの所へ和平のための使者を派遣し、これまで為そうとしていたことを悔い改めるならば。今は十字架に接吻

190) フェオドルは、1147年7月にイジャスラフ [D112:I] が組織した、クリメント・スモリャティチを府主教に選出するためのキエフでの主教たちの会議に、イジャスラフ派として出席している。イジャスラフと近い人物であったことは確かだろう。

191) フェオドーシイは、1142年から1156年までキエフ洞窟修道院の典院をつとめたギリシア出身の修道士。神学的知識の深い著述家でもあった。オレーグ一族出身で洞窟修道院の修道士となったスヴァトスラフ・ダヴィドヴィチ [C31] (通称スヴァトーシャ、1143年没) と親しい関係にあったことから、チェルニゴフの諸公とのパイプ役を期待されていたのではないかと推測される。[C9-1: C. 768]

して〔次のことを誓う〕がよい。そなたたちは、イーゴリ [C42] について〔自分イジャスラフに〕敵意を持たないこと。かつて為そうとしたことを、〔今後は〕為さないことを。こうして、〔かれらチェルニゴフの4人の諸公は〕聖なる救世主教会¹⁹²⁾で十字架に接吻して誓った¹⁹³⁾。イーゴリについての敵意を断つこと、ルーシの地を擁護すること。全員が一つの兄弟のようになることを。

その年の秋、ゴロドク(Городок)郊外で、ムスチスラフ・イジャスラヴィチ [I1], ウラジーミル・ダヴィドヴィチ [C34] とその兄弟のイジャスラフ [C35] が会合を開いた。全員その場所に集まった¹⁹⁴⁾。

その時〔1148年秋〕、ユーリイ [D17] の最年長の息子ロスチスラフ [D171] が自分の父親と、父親がかれにスーズダリの地に領地を与えなかったことから、諍いを起こした¹⁹⁵⁾。そしてか

192) 「救世主教会」(церковь святого Спаса) は、チェルニゴフの主教座(首座)教会。1146年にウラジーミル [C34] とイジャスラフ [C35] は、ここで兄イーゴリ [C42] に忠誠を誓う十字架接吻を行っている。その時に立ち会ったチェルニゴフの主教オヌフрий(Онуфрий)が、今回も立ち会っていたと考えられる。〔イパーチイ年代記(2): 342頁, 注336〕を参照。

193) ソロヴィヨフによれば、4人のチェルニゴフ諸公(オレーグ一族諸公)は、ユーリイ [D17] の援助が得られる見込みがないとみて見切りをつけ、自力ではイジャスラフ [D112:I] に対抗するだけの兵力もないと考えて、イジャスラフ [D112:I] の肩を持つ方がよいと判断した考えられる。〔Соловьев 1988: C. 441〕

194) このオステル川河口のゴロデツは、この頃は、グレーブ [D178] が逃げ出したあと、ムスチスラフ [I1] が支配していたと考えられる。キエフとチェルニゴフの中間地点に立地していることから、会合には最適の場所だったのであろう。これが、上記でイジャスラフ大公 [D112:I] が求めた「和平のための使節」を指すと解することができる。

以下に続く記述を見ると、この「全員集まった」には、3人の他に、イジャスラフ大公 [D112:I] と、かれに同行したユーリイ [D17] の息子のロスチスラフ [D171] も含まれている。

195) ロスチスラフ [D171] がイジャスラフ [D112:I] のもとに来たこのエピソードでの、父ユーリイ [D17] との諍いの原因について、『ラヴレンチイ年代記』で異なった説明がされている。すなわち、ロスチスラフは父の命令によって「オレーグ一族を助け」てイジャスラフ [D112:I] を討つよう派遣されたが、かれ自身は「たとえ父の逆鱗に触れようとも、自分は敵と一緒に行動しない。かれら〔オレーグ一族〕は祖父にとっても、叔父にとっても敵だったではないか」語っている。この違いについて、リハチョフは、『ラヴレンチイ年代記』で表明されている、ロスチスラフの強い反オレーグ一族感情の動機が、『イパーチイ年代記』の編集段階で〈和らげる〉方向で改変されたと解釈している。〔Лихачев 1985: C. 152-153〕

また、ソロヴィヨフは、両者の記事を比較した上で、ロスチスラフ [D171] の利害得失の計算を主な動機としている。すなわち、ユーリイ [D17] は、イヴァンコ [D172] やグレーブ [D178] 等息子たちのときと同じように、ルーシの地で領地を実力で獲得することを目的としてロスチスラフ [D171] を派遣した。しかし、ロスチスラフ [D171] は、チェルニゴフ諸公がイジャスラフ [D112:I] と和解を試みているのを見て、戦うよりもイジャスラフ [D112:I] に取り入るほうが得策であると判断した、とするのである。〔Соловьев 1988: C. 441, прим. 256〕

れ〔ロスチスラフ〕はキエフのイジャスラフ [D112:I] のもと【367】にやって来て、かれに拝礼して言った。「父はわたしを侵害して¹⁹⁶⁾、わたしに領地を与えなかったのです。わたしは、神とあなたに誓いをなして、やって来ました。なぜなら、あなたは、ウラジーミル [D1] の孫たちの中で、われらのうち最も年長者であるのですから。わたしは、ルーシの地のために働きをなしたいのです、あなたの配下として馬を連ねたい¹⁹⁷⁾のです」。イジャスラフ [D112:I] はかれに言った。「そなたの父〔ユーリイ [D17]〕はわれら全員にとって最年長である。しかしながら、かれは、われらとともに生きていくことができない。どうか、神よわしにそなたたち、すべての兄弟を保持させ給え、信実に従って、みずからの全ての一門¹⁹⁸⁾を、みずからの魂のように保持させ給え。今、そなたの父親が領地を与えないというのなら、わしがそなたに与えよう」。こうして、〔イジャスラフ〕はかれ〔ロスチスラフ〕に、ボジェスキイ (Божьскый), メジボジエ (Межибожие), コテルニツァ (Котелница), ほかに二つの城市を与えた¹⁹⁹⁾。

そして、オステル川〔河口〕のゴロドクでの会合へ²⁰⁰⁾、かれ〔ロスチスラフ [D171]〕を連れて行った。

イジャスラフ [D112:I] は、ウラジーミル・ダヴィドヴィチ [C34] とその兄弟のイジャスラフ [C35] に向かって言った。「兄弟のスヴァトスラフ [C43] とわが姉妹の息子〔スヴァトスラフ [C411:G]〕の二人はわしのもとに来ていないではないか。そなたたちは十字架接吻をして、もし、わしに悪を為す者がいれば、そなたたちはわしと一緒にその者を討つことを誓ったではないか。さて、兄弟たちよ、わしは、そなたたちと相談したい。かのわしの〔父方の〕叔父であるユーリイ [D17] は、ロストフから〔出兵して〕わがノヴゴロドを侮辱して²⁰¹⁾、かれら〔ノヴゴロド人〕から貢税を取り立てた。また、行軍の道中で、かれら〔ノヴゴロド地方の民〕に悪事をなした。

196) 「侵害して」の原文は переобидил で、обида は財産などに対する侵害行為をあらわす。ここでロスチスラフは、本来長男として受けるべきスズダリの領土を受けないことができないことを「(権利の)侵害」と見なしたのである。

197) この表現については本稿注 109 を参照。

198) 「みずからの全ての一門」(весь родъ свой) とは、叔父のユーリイ [D17] も含むモノマフ [D1] の一族を指している。

199) ボジェスキイ, メジボジエ, コテルニツァをふくむこの5つの城市は、キエフ大公となったイジャスラフ [D112:I] が1146年に甥(姉妹の子)のスヴァトスラフ [C411:G] に与えた城市と一致する(『イパーチイ年代記(2):注371, 372』参照)。その後、スヴァトスラフは、イジャスラフから離れてオレーグ一族の側に付いたとき(1149年)に、これらの支配を離れている(本稿注270参照)。イジャスラフ大公は、支配公がいなくなったこれら5つの城市を、今度はロスチスラフ [D171] に与えたことになる。これらはすべてキエフの南西方面、南ブク川上流域に位置しており、キエフ大公の領地としては副次的な意味しか持たなかった。

200) 前注193の「ゴロデツ」と同じ場所。これは、先の1148年秋の会合した場所と同じ所を指している。

201) 「侮辱した」(обидети) は、ここでは危害・損害を与えたことを意味している。

わしは、かれ〔ユーリイ [D17]〕を討伐する軍を發したい。そして、和平か戦闘のいずれかによって、事態を決したい。そなたたちは、わしと行動を共にすることについて、十字架接吻〔で誓った〕のだな」。

すると、ウラジーミル [C34] は〔答えて〕言った。「兄弟のスヴァトスラフ [C43] は来ていません。そなたの姉妹の息子〔スヴァトスラフ [C411:G]〕も〔来ていません〕。そなたたち二人も、われらも、そなたが侮辱を受けたときには、われらはそなたと行動を共にすることを十字架接吻し〔て誓い〕ました」。

[368] こうして、各自の〔遠征の〕行路が取り決められた。すなわち、〔川に〕氷が張ったときに、ユーリイ [D17] を討つべくロストフへと軍を進めること。ダヴィドの二人の息子〔ウラジーミル [C34] とイジャスラフ [C35]〕とスヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] はヴァティチの地を通過してロストフへ向けて進軍すること。イジャスラフ [D112:I] は、自分の弟ロスチスラフ [D116:J] のいるスモレンスクへ行くこと。そして、ヴォルガ川で全員が合流すること²⁰²⁾。

そして、イジャスラフ・ムスチスラヴィチ [D112:I] は、ウラジーミル・ダヴィドヴィチ [C34] とその兄弟のイジャスラフ [C35] を昼食に招待した。こうして、昼食をとり、宴を張り、友誼を深めた。そして、解散した。イジャスラフ [D112:I] はキエフへ、ウラジーミル・ダヴィドヴィチ [C34] とその兄弟のイジャスラフ [C35] はチェルニゴフへと。

それから、イジャスラフ [D112:I] は、ロスチスラフ・ユーリエヴィチ [D171] に言った。「ボジスキイへ行け。わしはそなたの父親と会うつもりだ。かれとは和を結ぶことを望んでいる。再びかれと話をまとめるよう。それまでは、そこに滞在せよ。そなたは、これからは、ルーシの地を警護せよ²⁰³⁾」。

その頃、スモレンスクのロスチスラフ [D116:J] は、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] に対して、かれ〔スヴァトスラフ〕の娘を、自分の息子ロマン [J1] に嫁がせ、スモレンスクへ嫁入りさせるよう要請した²⁰⁴⁾。〔花嫁〕がノヴゴロド〔・セヴェルスキイ〕から²⁰⁵⁾ 連れてこ

202) 部隊が合流する地点については、以下の記述で、メドヴェディツァ川河口と特定されている。(本稿注 210 参照)

203) ボジスキイ (Божский) はガーリチ公国との境界にあると同時に、南はポロヴェツ人の居住地とも隣接していた。ここでは、ポロヴェツ人の襲来から「ルーシの地」(ここではキエフ公領を指しているか)を守ることを言っているのだろう。

204) ユーリイ [D17] に対抗するための、イジャスラフ [D112:I]・ロスチスラフ [D116:J] 陣営とオレーグ一族の同盟のための政略結婚であることは明らかである。「スモレンスクへ嫁入り」とあるのは、花嫁が一種の人質としての意味を持っていたことを示している。なお、ロマン [J1] とスヴァトスラフ [C43] の娘の間の親等は 7 親等であり、教会が禁じる 6 親等以内ではない。

205) 原文は単に「ノヴゴロドから」(из Новгорода) だが、これは明らかにノヴゴロド・セヴェルスキイを指している。また、この記述から、先述のオステル川河口のゴロドクで行われた諸公会議に出席しなかったスヴァトスラフ [C43] は、ノヴゴロド・セヴェルスキイにいたと考えられる。

られたのは、洗礼祭の週の日曜日、1月9日のことだった²⁰⁶⁾。

その頃、イジャスラフ [D112:I] は自分の父方の叔父ユーリイ [D17] を討つべく〔キエフを〕出陣した。自分の弟のウラジーミル [D115] はキエフに残し、自分の息子のムスチスラフ [I1] はペレヤスラヴリに残した。かれ〔イジャスラフ〕自身は、先に、弟のロスチスラフ [D116:J] のところに行った。部隊に対しては、自分のあとから来て、全員がスモレンスクのロスチスラフ [D116:J] のもとで合流するようにと命じた。

兄弟が健やかに出会ったとき、**[369]** 二人〔イジャスラフとロスチスラフ〕は、神と聖なる聖母と生命を与える十字架の力を讃美した。二人は大いに互いを信愛し、自分の家臣たち、スモレンスク人たちと宴を張った。そして、二人はお互いに多くの贈物を交換した。イジャスラフ [D112:I] はロスチスラフ [D116:J] に、ルーシの地の産物と帝国のあらゆる地の産物²⁰⁷⁾ を贈った。ロスチスラフ [D116:J] はイジャスラフ [D112:I] に、上流の地²⁰⁸⁾ の産物やヴァリャーギの産物²⁰⁹⁾ を贈った。

そして、二人は自分たちの〔遠征の〕行路について取り決めた。イジャスラフ [D112:I] は小勢の従士団を率いてノヴゴロドに向かったが、加えてノヴゴロド人を引き連れて行くことになった。〔イジャスラフは〕弟のロスチスラフ [D116:J] に、配下の部隊を率いて、ヴォルガ川を通りそこへ²¹⁰⁾ 向かうようにと命じた。そして、全員がメドヴェデツァ川²¹¹⁾ (Медвѣдѣца) の河口で合流することになった。

こうして、ノヴゴロド人たちは、イジャスラフ [D112:I] が自分たちのところへやって来るといふ報を聞いて、非常な喜びに湧いた。こうして、ノヴゴロド人は城市を出て、三日行程²¹²⁾ も離れたところまでかれ〔イジャスラフ〕を迎えに出る者もあり、また多くの者たちも一日行程離れたところで出迎えた。こうして、かれ〔イジャスラフ〕は大いなる名誉をもってノヴゴ

206) 1149年の洗礼祭(Крещение; Богоявление)である1月6日は木曜日にあたり、洗礼祭の週(Водохреши)は1月3日～9日である。9日は、祭の週を閉じる日曜日にあたっている。

207) ビザンティン帝国との交易品を指している。

208) スモレンスクの公領に属するドニエプル川上流域を指している。

209) 「ヴァリャーギの産物」(дары... отъ Варягъ)とは、スカンジナビア諸国との交易品を指していると考えられる。スモレンスクでは、そのような商品がノヴゴロド経由で入手し易かったのだろう。

210) 討伐の対象であるユーリイ [D17] の根拠地、ロストフ＝スーズダリ地方を指している。

211) 「メドヴェディツァ」(Медведица)川はヴォルガ川の左岸にある支流で、川全体がノヴゴロド地方とロスチスラフ＝スーズダリ公国の境界に位置している。河口はノーヴィ・トルグから東へ約155km、ロストフからは西へ約116kmのところであり、ノヴゴロドとスモレンスクからロストフ方面に向かう場合には、ちょうど合流地点に当たる。

212) 距離の単位で「一日行程」(днище)とは、徒歩で一日進む距離のこと。16世紀の史料に記されている換算では60露里(ヴェルスタ)に当たり、約65kmになる。三日行程のところまで行ったとは、ノヴゴロドからおよそ200km離れたところまで、出迎えに行ったことになる。

ロドにやって来た。日曜日になり²¹³⁾、かれ〔イジャスラフ〕の息子ヤロスラフ²¹⁴⁾ [I2] がノヴゴロドの貴族と共に迎えを行い、二人は聖ソフィア〔聖堂〕に、聖体礼儀に参列するために、馬を進めた。

イジャスラフ [D112:I] は息子のヤロスラフ [I2] とともに 執達吏と触れ役²¹⁵⁾ を街区に派遣して、上流民・下層民を問わず、公のもとに食事に招待した。こうして〔人々は〕食事をして、とても楽しく宴を持ち、名誉をもってそれぞれが自宅へと解散して行った。

翌日、**[370]** イジャスラフはヤロスラフの屋敷²¹⁶⁾ へと使者を遣り、民会を召集するように命じた。こうして、ノヴゴロド人とプスコフ人たちは民会へと集まった。〔イジャスラフ [D112:I]〕はかれらに言った。「兄弟たちよ。わが息子〔ヤロスラフ [I2]〕とそなたたちは、わしのところに使者を派遣して、わが叔父のユーリイ [D17] がそなたたちを侮辱したと言った²¹⁷⁾。そこで、わしはかれ〔ユーリイ〕を討つべく、ルーシの地をあとにしてここにやって来たのだ。それは、そなたたちのゆえであり、そなたたちが受けた侮辱のゆえである。兄弟たちよ、評議するがよい、どのようにしてかれ〔ユーリイ〕を討つべく進軍したらよいか。あるいは、かれ〔ユーリイ〕と和を結ぶべきか。もしくは、戦争によってかれ〔ユーリイ〕と決着をつけるべきか」。

かれら〔ノヴゴロド人とプスコフ人たち〕は言った。「あなたは、われらの公です。そなたはわれらのウラジミル [D1] であり、われらのムスチスラフ [D11] です。喜んで、われらが受けた侮辱のゆえに、そなたと共に進軍しましょう」。こうして解散した。

そして、再びノヴゴロド人たちが言った。「公よ、われらは進軍いたします、全ての者が〔行

213) 『ノヴゴロド第一年代記』6656(1148)年の記事によれば、イジャスラフ [D112:I] のノヴゴロド訪問は「冬」のこととなっている。『ラヴレンチイ年代記』では6657(1149)年の項の冒頭にイジャスラフのノヴゴロド行きが記されている。この日は、大斎の第一日曜日に当たる1449年の2月20日を指す可能性が高い。

214) この時ヤロスラフ [I2] はノヴゴロドの公だった。『ノヴゴロド第一年代記』によると、6656(1148)年の秋に、イジャスラフ [D112:I] は息子のヤロスラフ [I2] を、キエフからノヴゴロドへ派遣し、ノヴゴロド人はこれを公として受け容れた。それまでノヴゴロド公だったスヴァトボルク [D114] は追放され、イジャスラフによって、ウラジミル・ヴォルィンスキイの城市を与えられたという。

215) 「執達吏」(подвойский) はノヴゴロドの支配公配下の役人で、民衆に公の布告を知らせる役目を担っていた。「触れ役」(биречь) はノヴゴロドに限らず、一般に公に仕え、同様の仕事を行う役職の名称。

216) 「ヤロスラフ館」(Ярославль дворъ) は、ノヴゴロドの商業区の、かつてヤロスラフ賢公の屋敷があったとされる広い跡地で、大橋のたもとに位置し、ノヴゴロドの民会が行われる場所だった。

217) 先の1148年秋のゴロデツでの会合で、イジャスラフ [D112:I] は「ユーリイはロストフから出兵して、ノヴゴロドを侮辱し、貢税を取り立て、行軍の道中で悪事をなした」(本稿注201参照)と言っている。また、『ノヴゴロド第一年代記』の和平交渉の記事から推測して、ユーリイ [D17] はノヴィ・トルグを襲撃して、商品や捕虜を獲り、貢税を課したと思われる。ここでは、この1148年夏～初秋に起こったとされる一連の事件のことをさしている。

きます]。かりに、輔祭になろうとして剃髪はしていても〔輔祭に〕叙任されていない場合には、その者は遠征に行きます²¹⁸⁾。もし、叙任されている場合には、その者は神に祈りを捧げることでしょう」。こうしてノヴゴロド人たちはイジャスラフ [D112:I] とともに、自分たちの全軍勢とともに進軍をはじめた。プスコフ人とコレラ人²¹⁹⁾ も〔進軍した〕。

こうしてイジャスラフ [D112:I] は、ノヴゴロド人たちとともにヴォルガ川〔支流〕のメドヴェヂツァ川河口までやって来た。そこで、4日間、自分の弟のロスチスラフ [D116:J] を待った。

そしてかれの〔イジャスラフ〕もとに、ロスチスラフ [D116:J] が、すべてのルーシの軍勢²²⁰⁾、スモレンスク人たちとともにやって来た。そして、そこで合流して、ヴォルガ川を下って進んだ。〔ロスチスラフは〕事前にスモレンスクから、自分の父方の叔父のユーリイ [D17] に使者を遣っていた。ところが、かれ〔ユーリイ〕は、かれらの使者が二人〔イジャスラフとロスチスラフ〕のもとに帰ることを許さず、自分の使者を遣うこともしなかった。

二人〔イジャスラフとロスチスラフ〕は【37I】クスニャチン²²¹⁾ (Къснятин) へと移動した。そこでも、ユーリイ [D17] からかれらへの知らせはなかった。二人は、かれ〔ユーリイ〕が持っている諸城市と村々を焼き払い、ヴォルガ川の両岸にあるかれのすべての領地を掠奪し始めた。二人はそこから、ウグレチ原²²²⁾ (Угличе поле) へ行き、そこからモログ川²²³⁾ (Молога) 河口へと進んだ。すると、そこへ二人に宛てて知らせがきた。ウラジーミル・ダヴィドヴィチ [C34] とスヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] がヴァティチ (Вятичи) の自領地に布陣して、この場所で待機しており、ユーリイ [D17] とイジャスラフ [D112:I] の間で何が起こるか注視しているというのである。かれら二人〔ウラジーミルとスヴァトスラフ〕は、全員がメドヴェヂツァ川河口で会合すると約束したにもかかわらず、二人〔イジャスラフとロスチスラフ〕のもとに来る

218) この文言は、正式な聖職者である「輔祭」(дьякъ; диакон)になる準備のために剃髪(гумнице)をしている者でも、まだ正式に叙任されていなければ、その者でさえ参戦するつもりだという意味で、ノヴゴロド人の意気込みの強さを比喩的に表現している。

219) 「コレラ人」(корѣла)はいわゆる「カレリア人」のことで、ノヴゴロド地方北方に広く居住するフィン・ウゴル系の住民。民族単位でノヴゴロドの軍団に編入されていたものと考えられる。

220) このロスチスラフが率いていた「すべてのルーシの軍勢」(съ всеми рускими силами)は、以下では「ルーシ人」(Русь)、「ルーシの従士団」(дружина руская)などとも呼ばれており、ロスチスラフに対しては傭兵のような立場であったことが分かる。ルーシ地方(キエフ＝ペレヤスラヴリ＝チェルニゴフ一帯)出身の小城市の公や貴族がロスチスラフに仕官していたということか。

221) 「クスニャチン」(Къснятинъ; Кстятин)は、カリヤージン(Калязин)にほど近いネルリ(Нерль)川がヴォルガ川に注ぐ河口にあった城砦で、現在のスクニャチノ(Скнятино)村に相当する。メドヴェヂツァ河口から東へ10kmほどしか離れていない。

222) 「ウグレチ原」(Угличе поле)は、現在のウグリチ(Углич)のことで、「クスニャチン」からはヴォルガ川を北東へ60kmほど下った右岸にあった。

223) 「モログ川」(Молога)の河口は、現在は水没しているがルイビンスク貯水池の中程にあたっている。ウグリチからは、北の方向へ80kmほどヴォルガ川を下った地点にある。

ことはなかったのである。イジャスラフ [D112:I] は自分の弟ロスチスラフ [D116:J] に言った。「あの二人〔ウラジーミルとスヴァトスラフ〕が約束にもかかわらずわれらのもとに来ないのなら、神は、われらとともにあるということだ²²⁴⁾」。

そこで、〔イジャスラフとロスチスラフの〕二人は、ノヴゴロド人とルーシ人を、掠奪させるために²²⁵⁾、この場所からヤロスラヴリ (Ярославль) へと派遣した²²⁶⁾。その頃はもう暖かくなっていた。すでに柳の日曜日²²⁷⁾であり、ヴォルガ川とモロガ川の氷上を進むときには、水が馬の腹のところまで達するほどだった²²⁸⁾。こうして、ノヴゴロド人とルーシ人は、掠奪をしてヤロスラヴリから戻って来た。多くの捕虜を連れて帰り²²⁹⁾、この地に大きな害を与えた。

イジャスラフ [D112:I] と弟のロスチスラフ [D116:J] は協議した。そして、〔まもなく〕氷が割れるので、解散することを合意して決めた。こうして、ロスチスラフ [D116:J] は自分の部隊とともにスモレンスクへ行き、その兄イジャスラフ [D112:I] は大ノヴゴロドへと向かった。

[372] ルーシ人の従士団については、ロスチスラフ [D116:J] とともに行った者もいれば、自分が決めた場所へ行った者もいた。こうして、みな解散して帰郷してしまった。

6657 [1149] 年

イジャスラフ [D112:J] はノヴゴロドからキエフに行った。〔キエフの人々は〕、かれ〔イジャスラフ〕に対して、ロスチスラフ・ユーリエヴィチ [D171] を誹謗し始めた。「かれ〔ロスチスラフ〕は多くの悪しき企みをなし、家来どもやベレンディ人、キエフ人たちを唆して、そなた〔イジャスラフ〕に刃向かわせようとしています。かれは、神がその父〔ユーリイ [D17]〕に神助を与えることを望んでいるのです。そうなれば、この男〔ロスチスラフ〕はキエフに攻め入っ

224) 十字架接吻の誓約を破って会合の場にこなければ、二人には神の懲罰が下るだろう、という意味。

225) この掠奪について『ノヴゴロド第一年代記』6656(1148)年の記事では「ヴォルガ川に沿った6つの小さな砦を占領し、ヤロスラヴリに至るまで荒廃させた」とより具体的に書かれている。〔ノヴゴロド第一年代記 [I] : 47頁〕

226) モロガ川河口の地点からヴォルガ川は南東に向きを変え、110kmほど下った右岸に「ヤロスラヴリ」(現在も同名)があった。この城市は当時の政治的中心地ロストフとコトロスリ川 (Которосль) で結ばれており重要な拠点であった。

227) 「柳の日曜日」(Вербная недѣля)とは、復活祭一週間前の「キリストのエルサレム入城」を祝う祝祭日のこと。移動祭日で、1149年の場合には3月27日に相当する。

228) 掠奪物や捕虜を輸送するための橇と馬が水に浸るようになって使えなくなったということ。『ラヴレンチイ年代記』6657(1149)年の記事では、「馬がびっこを引き始めた」(похромоша кони у них)と表現されている。

229) 捕虜について『ノヴゴロド第一年代記』6656(1148)年の記事では「また7000人を捕らえた。そして悪路のために引き返した」とある。〔ノヴゴロド第一年代記 [I] : 47頁〕

て、そなたの屋敷を占拠し、そなたの兄弟²³⁰⁾を捕まえ、そなたの妻と息子を捕らえるでしょう。かれをその父親〔ユーリイ〕のもとへと送り返しなさい。かれを手元に置くと厄介なことになりますぞ」。

これを聞いたイジャスラフ [D112:I] は、ロスチスラフ・ユーリエヴィチ [D171] を呼び寄せる使者を遣った。その頃、イジャスラフ [D112:I] は、ヴィドヴィチの聖ミハイル〔修道院〕の向かいにある中州 (Островъ) に滞在しており、ロスチスラフ [D171] はそこにやって来た²³¹⁾。イジャスラフ [D112:I] はかれ〔ロスチスラフ〕を乗せてくるために自分の小舟を派遣し、その小舟にはかれとともに従士たちも乗り込んだ。この小舟で川を渡してかれを運んだ。そして、かれのために独立した幕営を用意した。そのとき、そこでイジャスラフ [D112:I] はロスチスラフ [D171] に、下船して幕営に行くように命じた。そして、かれ〔ロスチスラフ〕のもとに自分の家臣を派遣して、こう伝えた。「見よ、兄弟よ、そなたは父親から離れて、わしの所にやって来た。父親がそなた〔の権利〕を侵害し、そなたに領地を与えなかったということで。わしはそなたを、自分のしかるべき兄弟として、信義をもって受け容れた。【373】そして、そなたに領地を与えた。わしはそなたに、父親が与えなかったものを与えたのだ。さらに、わしはそなたに、ルーシの地を守るよう命じた。そのとき、わしはそなたにこう言ったはずだ。『兄弟よ、わしは、そなたの父親で自分の叔父でもある者〔ユーリイ [D17]〕を討ちに行く。そなたはルーシの地を守れ。わしはかれ〔ユーリイ〕と和を結ぶか、あるいは、神がわしとかれのことを定めてくれるか²³²⁾のどちらかである』。ところが、そなたは、神がそなたの父親を助けてわしを討つことを望んだのだ。またそなたは、キエフに入城して、わしの兄弟、わしの息子、わしの妻を捕らえ、わしの屋敷を掠奪しようと企んだのだ」。

ロスチスラフ [D171] はかれ〔イジャスラフ〕に答えて言った。「兄弟にして父なる御方よ。自分の思慮においても、心の中においても、わたしにはそのようなことは一度もありません。わたしを誹謗した者がもし公のうちの誰かであれば、わたしは〔誓います〕、その者のところに行って〔決着を付けることを〕²³³⁾。もし、キリスト教徒もしくは異教徒の家臣であれば、あ

230) ウラジーミル [D115] を指している。

231) 先に、ロスチスラフ [D171] はイジャスラフ [D112:I] から「ボジスキイへ行け」と指示されたところから、このときはボジスキイ (Божский) に居住しており、そこからキエフにやって来たのだろう。

232) 戦争によって決着を付けることを意味している。

233) 原文は「わたしはその者のところへ」(а се я к нему) と短い表現になっている。これは誓約の定型表現の冒頭であり、このあとに「十字架接吻や決闘 (поле) などの神判で裁きをつける」と続くのだろう。いずれにせよ、公同士の争議の裁きは神判に委ねられた。

なたはわたしより年長ですから、あなたが、わたしとその者とを裁いて下さい²³⁴⁾」。

イジャスラフ [D112:I] はかれ[ロスチスラフ]に言った。「そのようなことをわしに求めるな。わしをキリスト教徒あるいは異教徒たちと敵対させるつもりか。今、そのようなことをそなたのために行うつもりはない。さあ、自分の父[ユーレイ [D17]]のもとに行くがよい」。こうして、かれを連行して、4人の下級従士だけを伴わせて小舟にかれを乗せ〔て追放し〕た。かれの従士たちは捕らえ、その財産は没収した²³⁵⁾。

ロスチスラフ [D17I] は、スーズダリの自分の父 [ユーレイ [D17]] のもとにやって来た。そして、かれの前に叩頭して²³⁶⁾ 言った。「わたしは聞いています、全ルーシの地と黒頭巾族があなたを〔討とうと〕望んでいるということ。かれらはこのように言って、かれ [イジャスラフ [D112:I]] はわれらの **[374]** 名誉を毀損²³⁷⁾ したのです。かれ [イジャスラフ] を討つ²³⁸⁾ べく軍を進めて下さい」。

ユーレイ [D17] は、自分の息子が受けた辱めを自分でも無念に思って、こう言った。「わしがルーシの地を一部でも与ることなく、わが子供たちも与らないなど、あるべきことではない」。

こうして、自分の軍勢とポロヴェツ人を集めて、神に望みを掛けて、進軍を始めた。7月24日のことだった²³⁹⁾。[ユーレイは] ヴァティチの地へ向かった²⁴⁰⁾。

234) 上記の公同士以外で、公と家臣(мужи)の間の争議の場合は、上位(年長)の公の裁きに委ねる慣習があったことを示している。また、ロスチスラフはイジャスラフを自分にとっての「上位者」として認めて、服従していることを示している。ここで、「家臣」を「キリスト教徒」と「異教徒」に分けているのは、すぐ下でのロスチスラフがユーレイに言った「ルーシの地と黒頭巾族」の言い回しとも対応しており、裁きの際に、誓約(пога)で誓われる神格が異なっていることによっている。

235) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では「かれの従士団を、枷をはめて追放した」とある。

236) 「かれの前に叩頭して」(ударь перед ним челомъ)は服従を示す儀礼的身ぶり、[「拝礼」(поклонитися)と同じ(『イパーチイ年代記』(1)注19; イパーチイ年代記(2)注37)を参照)。ロスチスラフが父と諍いイジャスラフのもとに来たときには「拝礼」(поклонитися)しているので(本稿注196参照)、後悔して父のもと帰ったこの部分では、強調的な表現を用いたものか。

237) 「名誉を毀損する」(обезчестовати)とは、ここでは、かれら父子の「ルーシの地」への権利を失わせることを指している。

238) 「かれを討つ」(на нь)は文脈からみてキエフ公イジャスラフ [D112:I] を指すと思われる。

239) 7月24日は諸公の守護聖人ボリスとグレーブの祝日であり、諸公(もしくは年代記記者)は聖人の加護を願ってその記念日に行動を起こすことがあることからこの日を選んだのだろう。

240) 後の事態の推移から分かるように、ユーレイ [D17] の遠征はヴァティチの地を經由してベレヤスラヴリに向かい、この城市を攻略することを目指している。ユーレイは若い頃からベレヤスラヴリの領有の権利を主張しており、1133年に兄ヤロ波尔ク [D115] がキエフの大公位に就いたときには、この城市を8日間占拠しており [イパーチイ年代記(2): 307頁]、1135年にも再度領有を要求して、1136年の初めまで公座に就いていた [イパーチイ年代記(2): 309-310頁]。

ウラジーミル・ダヴィドヴィチ²⁴¹⁾ [C34] は、イジャスラフ [D112:I] に使者を遣ってこう言った。「見よ、そなたの父方の叔父ユーリイ [D17] がそなたを討つべく軍を進め、すでにわれらの〔領地〕ヴァティチ²⁴²⁾ に侵入した。われらはそなたの味方になることを十字架に接吻して〔誓った〕。今、そなたにその旨を宣言する。軍備をととのえよ」。

イジャスラフ [D112:I] はこれを聞くと、戦いの準備を始めた。そして、ウラジーミル [C34] に宛てて自分の家臣²⁴³⁾ を使者として派遣してこう言った。「兄弟よ。神がそなたを助けるように。そなた自身が言ったように、われらは十字架に接吻して、すべてわれらは一つになることを〔誓った〕。兄弟よ、ここに〔使者として派遣した〕わが家臣がいる。そなたも家臣を一人立てよ。そして、この二人の家臣をスヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] のもとへ使者として派遣しよう」。

そこで、ウラジーミル [C34] はイジャスラフ [D112:I] の使者に言った。「わしと弟〔イジャスラフ [C35]〕の二人は、十字架接吻〔の宣誓〕に従って〔戦う〕準備はできている。われらがこれに違反しないことを神にかけて誓う。どうか〔そなたも〕われらの兄弟のスヴァトスラフ [C43] も〔そなたと〕よい関係であるように」。

こうして、派遣された家臣たちが〔使者として〕スヴァトスラフ [C43] のもとにやって来た²⁴⁴⁾。そして、イジャスラフ [D112:I] の使者がかれ〔スヴァトスラフ〕に言った。「あなたの兄弟のイジャスラフ [D112:I] があなたにこう述べています。『兄弟よ、われらは十字架に接吻して、そなたたちはわしの味方であることを誓った。いま、兄弟よ、わが叔父〔ユーリイ〕がわしを討つべくやって来ようとしている。兄弟よ、戦（いくさ）の準備をせよ。ウラジーミル [C34] も同様に、【375】 その弟イジャスラフ [C35] に準備をさせているのだから』」。

さらに、ウラジーミル [C34] とイジャスラフ [C35] の家臣がかれ〔スヴァトスラフ〕にこう言った。「あなたの兄弟であるウラジーミル [C34] とイジャスラフ [C35] はこう言っています。『われらは十字架に接吻して、みな一つになることを〔誓った〕ではないか。兄弟よ、われら二人は戦（いくさ）の準備をしている。そなたも、兄弟よ、同様に準備をせよ』」。

241) 当時はチェルニゴフの公座を持っていた。

242) 「われらのヴァティチに」(в нашѣ Вятичѣ) の言い方は、ヴァティチの地が、ウラジーミル [C34] が公座を置いているチェルニゴフの支配下にあることを認め、同時に自分たちが同盟して守るべき土地であることを示唆している。

243) マホヴェツは、この「家臣」の使者を、イジャスラフ [D112:I] の重臣ピョートル・ボリスラヴィチのこととしている。[Літопис руський, 1989: С. 222, прим. 5]

244) 当時、スヴァトスラフ [C43] はノヴゴロド・セヴェルスキイの支配公だった。つまり、キエフ大公イジャスラフの使者がまずチェルニゴフのウラジーミル [C34] のもとに行き、そこでウラジーミルの使者と合流して、ともに連れだつてノヴゴロド・セヴェルスキイのスヴァトスラフ公 [C43] のもとに行つたことになる。

スヴァトスラフ [C43] は黙ったまま、かれら〔使者たち〕に何も答えず、「幕営へ戻っておれ、あとでまたそなたたちを呼び出そう」と言っただけだった。そして、かれら〔使者たち〕を一週間留め置き、かれらのところに誰も来ないように、幕営に衛視を付けた。なぜなら、かれ〔スヴァトスラフ〕は既に、ユーリイ [D17] に使者を派遣して、次のように言っていたからである。「そなたは（イジャスラフを討つために²⁴⁵⁾）信義にかなって進軍する²⁴⁶⁾のか。それなら、わしに宣言せよ。わが領地²⁴⁷⁾を滅ぼさないことを。わしに重荷を負わせないこと²⁴⁸⁾を」。

そして、ユーリイ [D17] からの返答を聞いたあとで²⁴⁹⁾、スヴァトスラフ [C43] は、二人のダヴィドの子イジャスラフ [C35] とウラジーミル [C34]、および兄弟のイジャスラフ [D112:I] の使者たちを呼び出した。そして、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] はイジャスラフ・ムスチスラヴィチ [D112:I] に対してこう言った。「わしの兄弟の財産²⁵⁰⁾を何らかのかたちで返還せよ。そうすれば、そなたたちの味方になろう」。

イジャスラフ [D112:I] の使者は、イジャスラフ [C35] とその兄弟ウラジーミル [C34] のもとに戻って来た。ウラジーミル [C34] がイジャスラフ [D112:I] の使者に言った²⁵¹⁾。

「兄弟のイジャスラフ [D112:I] にはこう伝えよ²⁵²⁾。スヴァトスラフ [C43] は、ユーリイ [D17] に使者を遣って『イジャスラフ [D112:I] 討伐の進軍は信義にかなうものであるか』と訊いたという。ユーリイ [D17] はそれに回答して『信義にかなわずして、どうしてわしが進軍するものか。わが甥イジャスラフ [D112:I] が、わしを討ちにやって来て、わしの領地を掠奪し、焼いたのだぞ。さらには、わしの息子〔ロスチスラフ [D171]〕をルーシの地から追放して、領地を与えなかった。また、わしには辱めを加えた。〔わしにとっては〕、辱めを晴らして **[376]**、自分の土地の〔掠奪に対する〕報復をなすか、あるいは、自分の名誉を回復するかだ。さもなくば、わしは戦場

245) 「イジャスラフを討つために」の文言はイパーチイ写本にはない。ここでは、フレーブニコフ写本の読みを採用した。

246) 「信義にかなって進軍する」(в правду <...> идеши) の表現はすぐ下でも繰り返されるが、この「信義」(правда) は公一族がルーシの地の支配者として持っている共同的な秩序=法観念を指している。

247) スヴァトスラフがノヴゴロド・セヴェルスキイの公として領有しているデスナ川中流域及びオカ川上流域のいわゆるヴァティチ (Вятчи) の地を指している。

248) 自分の支配地の住民に貢税などを課すことを意味している。

249) ユーリイから、ルーシの地 (ベレヤスラヴリ方面) への遠征を約束する返事が届いたということ。その内容は以下の使者の言葉によって知ることができる。

250) 1146年にイジャスラフ [D112:I] とダヴィドの二人の息子が行ったイーゴリ [C42] の莫大な財産の略奪を指している。本稿注8を参照。

251) 使者はノヴゴロド・セヴェルスキイからキエフに戻る帰途にチェルニゴフに立ち寄ったことになる。ウラジーミル [C34] の使者への「忠告」はチェルニゴフでの出来事だろう。

252) 「兄のイジャスラフにはこう伝えよ」の文言はイパーチイ写本にはなく、ここでフレーブニコフ写本の読みを採用した。なお、ウラジーミル [C34] は別のルートによって、スヴァトスラフ [C43] の本音についての情報を知っていたことになる。

で屍をさらすまでだ』と言ったと」。

さて、イジャスラフ [D112:I] の使者はキエフに到着すると、ウラジーミル [C34] が命じたように〔上述の〕スヴァトスラフ [C43] の言葉をイジャスラフ [D112:I] に伝えた。

イジャスラフ [D112:I] はこれを聞くと、時をおかずに、再び自分の使者をスヴァトスラフ [C43] のもとに派遣してこう言った。「兄弟よ。そなたはわしに対して尊い十字架に接吻して、わしの味方になること、イーゴリ [C42] をめぐる敵意とその財産については断念することを誓ったではないか²⁵³⁾。兄弟よ、わしの叔父〔ユーレイ [D17]〕が、わしを討とうと進軍して来ている今のこの時機に、そのような〔イーゴリ [C42] の財産の〕ことを持ち出そうというのか。今、そなたが接吻した尊い十字架〔の誓い〕を遵守しようとししないのか。わしの味方になるのだ。もし、そなたが味方にならないのなら、そなたはすでに十字架接吻〔の誓いに〕違反したことになるのだぞ。わしはすでに、そなた抜きでヴォルガ川まで遠征をして戻って来た。わしに何が味方しているかわかるか。今は、神と十字架の力がわしに味方しているのだ」²⁵⁴⁾。

さて、ユーレイ [D17] は軍を進めて、ヤルイシェフ²⁵⁵⁾ (Ярышев) 近郊で宿営した。主の変容の祝日²⁵⁶⁾ に、そこへスヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] がやって来た²⁵⁷⁾。そして、スヴァトスラフ [C43] はそこでかれ〔ユーレイ [D17]〕を昼食に招いた。そして、昼食をとった後に解散した。

253) 1148年にチェルニゴフの救世主教会で、スヴァトスラフ [C43] が他のオレーグ一族の諸公とともに、イジャスラフの使節（ベルゴロド主教とキエフ洞窟修道院典院）の前で行った十字架接吻の誓いを指している。本稿注 192 を参照。

254) イジャスラフ [D112:I] は、ウラジーミル [D115] の忠言によって、スヴァトスラフ [C43] がすでにユーレイ [D17] と内通していることは知っているのだから、このスヴァトスラフへの使者は実質的な説得の意味は持っていない。この使者派遣は、十字架接吻の違反を非難して、神慮の在処を確認するためのものだったのだろう。

255) 「ヤルイシェフ」(Ярышев) は村の名と考えられるが場所は不明。ザイツェフはチェルニゴフ公国とベレヤスラヴリ公国の境界近くにあったと推定している。[Зайцев 2009: С. 198] ルイバコフ作成の歴史地図にもノヴゴロド・セヴェルスキイから南に 125km ほどの境界近くに記されている。[Рыбаков 1951]。下の注 257 の「ヴィヤハニ」(Вьяхань) とほぼ同じ場所と考えられる。

256) 1149年8月6日の土曜日に相当する。タティーシチェフはこれを8月1日としているが、この日付には誤解があるようだ。[Татищев 1995: С. 189]

257) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事では、ユーレイが「ヴィヤハニ」(Вьяхань) まで進攻したとき、そこにスヴァトスラフ [C43] だけでなく、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] もやって来たとして、異同が認められる。なお、この「ヴィヤハニ」(Вьяхань) はテルン川(Терн)がスーラ川に合流する河口近く(プチヴリ南方40kmほど)にあった城砦で、1147年にグレーブ・ユーリエヴィチ [D178] の軍が攻略を試みて失敗している。本稿注 149 を参照。

翌日の日曜日²⁵⁸⁾の早暁に太陽が昇った頃、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] に娘が生まれ、洗礼名をマリアと名付けた²⁵⁹⁾。

スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] はユーリイ [D17] に言った。「兄弟よ、われらすべてにとっての敵イジャスラフ [D112:I] が、われらの兄弟〔イーゴリ [C42]〕を殺したのだ」²⁶⁰⁾。

その日に²⁶¹⁾、ユーリイ [D17] は自分の軍兵を率いてさらに進軍した。スヴァトスラフ [C43] は2日目〔翌日〕【377】の月曜日²⁶²⁾にかれのあとを出発し、ユーリイ [C17] に追い付いて合流した。

そしてユーリイ [D17] とスヴァトスラフ [C43] は、自分たちの使者を二人のダヴィドの子たち〔ウラジーミル [C34] とイジャスラフ [C35]〕に派遣して言った。「兄弟たちよ、われら二人とともにイジャスラフ [D112:I] を討つべく進軍しよう」。

ウラジーミル・ダヴィドヴィチ [C34] とその兄弟イジャスラフ [C35] は、ユーリイ [D17] に答えてこう言った。「そなた〔ユーリイ〕は、われらに〔味方になるとの〕十字架接吻をしたのではないか²⁶³⁾。しかし、イジャスラフ [D112:I] はやって来て、われらの地を略奪し、デスナ川を越えた一帯のわれらの諸城市を焼いたのだった²⁶⁴⁾。そこで今は、われら二人はイジャスラフ・ムスチスラヴィチ [D112:I] の味方となることを十字架接吻で誓った。われらはそれを守

258) 1149年8月7日の日曜日に相当する。

259) このスヴァトスラフ [C43] の娘の誕生の記事は、物語の流れを中断しており、後代の挿入と考えられる。

260) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事によれば、スヴァトスラフ [C43] のこの言葉は、「ユーリイがヴィヤハニ (Вьяхань) に来たとき、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] とスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] が従士団を引き連れてやって来て」言ったことになっている。この部分は編集上の乱れがあり、『ラヴレンチイ年代記』と共通の資料を挿入したことから生じたものと考えられる。スヴァトスラフ [C43] の言葉も、すぐあとに続く記事の「ユーリイに追い付いて合流した」ときに発せられた言葉だろう。

261) スヴァトスラフ [C43] に娘が生まれた日、すなわち8月7日の日曜日を指す。

262) 1149年8月8日の月曜日に相当する。

263) ユーリイ [D17] がダヴィドの二人の息子ウラジーミル [C34] とイジャスラフ [C35] に対して、味方になる十字架接吻の誓いを行ったことについては、1147年夏頃に、イジャスラフ [D112:I] に対する二人の「裏切り」が発覚した場面で言及されている。(本稿注104参照)

264) 「デスナ川を越えた一帯のわれらの諸城市を焼いた」(по Задьсьню города наша пожегль) とは、チェルニゴフから見てデスナ川対岸(左岸)のフセヴォロジ、ウネネジ、ペラヴェエジャ、バフマチなどの城市を指している。これらは、1147年の晩秋～初冬のイジャスラフの掠奪遠征によって焼かれ破壊されている。本稿注158～162を参照。

りたい。われらは魂を弄ぶ²⁶⁵⁾ことはできない」。

こうして、二人は〔ユーレイとスヴァトスラフの提案を〕斥けると、使者をイジャスラフ [D112:I] に派遣して、「ユーレイ [D17] は、今まさにそなたに向かって進軍しており、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] もかれと一緒にやって来るでしょう」と伝えた。

ユーレイ [D17] は、ウラジーミル [C34] とイジャスラフ [C35] が自分の申し出を断ったことを聞くと、ここからスターラヤ・ペロヴェジャ²⁶⁶⁾ (Бъловежа Старая) へと軍を進め、そこで一ヶ月²⁶⁷⁾のあいだ陣を張った。こうして、ポロヴェツの援軍が来るのを待ち、イジャスラフ [D112:I] から屈服²⁶⁸⁾を申し出る〔使者が来る〕のを待っていた。そして、イジャスラフ [D112:I] から音沙汰がないことを知ると、合戦をするために、そこからスポイ川²⁶⁹⁾ (Супой) へと向かった。

この場所〔スポイ川〕のかれ〔ユーレイ〕のもとに、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] がやって来た。スヴァトスラフ [C411:G] は自分の母方の叔父イジャスラフ [D112:I] から離反することは望んでいなかったが、自分の父方の叔父スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] 〔に命令された〕ために、渋々とやって来たのである²⁷⁰⁾。原野のポロヴェツ人たちも、非常に多数が、スポイ川にいるユーレイ [D17] のもとに馳せ参じてきた。

イジャスラフ [D112:I] はこのことを聞いて、自分の弟ロスチスラフ [D116:I] を呼び寄せるために使者を派遣して、こう言った。「先にわれら二人は、もしユーレイ [D17] がチェルニゴフを通り過ぎたときには、【378】そなたは、わしのところに〔援軍に〕やって来るということ

265) 「魂を弄ぶ」(играти душой) は、「十字架接吻に違反する」ことを意味する定型的表現 [СлРЯ XI-XVII Т. 6, С. 82]。これには「軽薄に振る舞った(играть) あげく、神罰によって魂(душа)を滅ぼす」ことが含意されている。

266) スターラヤ・ペロヴェジャ (Бъловежа Старая) は「ペラヴェジャ」(Белавежа) と同じで、オステル川上流のチェルニゴフ領内にある城市。かりに『ラヴレンチイ年代記』の記述のようにヴィヤハニ (Вьяхань) からここに来たとすれば、西へ 75km ほど進んだことになる。

267) あとに記されるように、戦いが決着した日が 8 月 23 日であるなら、ペロヴェジャでの「一ヶ月」の布陣は長すぎ、せいぜい、2 週間ほどだったと考えられる。[Бережков, 1963: С. 148] 参照。

268) 「屈服」(покорение, покориться) の表現はすぐ下でもう一度用いられるが、公同士の争いの場合、相手に叩頭して、その完全な長上権を認めた上で和を結ぶことを指している。

269) 「スポイ川」は、ペレヤスラヴリの東をドニエブルに流れる川でその上流域に到達したということ。本稿 142 注を参照。

270) これは、『ラヴレンチイ年代記』並行記事にある「二人のスヴァトスラフが、ヴィヤハニのユーレイのもとにやって来た」(本稿注 260 参照) と同じ事柄を指しているのだろう。この頃のスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] は、叔父のスヴァトスラフ [C43] と常に行動をともにしており、叔父の所領地ノヴゴロド・セヴェルスキイにいたと思われる。なお、スヴァトスラフ [C411:G] が、イジャスラフ [D112:I] に背を向けてチェルニゴフに行ったのは、1147 年秋頃とかなり以前のことであり、このような「弁解」のようなことが書かれているのは、記事を書いた時点での、年代記記者の政治的な立場 (スヴァトスラフ [C411:G] に近い人間だったなど) が反映されているのかも知れない。

取り決めていた²⁷¹⁾。今こそ、弟よ、ユーリイ [D17] はチェルニゴフを通過した。さあ、来たれ。われら二人で、神が何を与えるか、ともに見ようではないか²⁷²⁾。また、〔イジャスラフ [D112:I] は〕ヴラジミル〔の城市〕へと使者を派遣した²⁷³⁾。

ロスチスラフ [D116:J] は自分の軍勢を集めると、兄のイジャスラフ [D112:I] のもとへと出発した。

ユーリイ [D17] は言った。「われらはペレヤスラヴリへと進軍しようではないか。かれ〔イジャスラフ [D112:I]〕はここに来て、屈服すべきである」。こうして、〔ペレヤスラヴリの近くまで〕やって来ると、クウディノヴォ村²⁷⁴⁾ (Кудьново село) に陣を張り、ストリャコフ川²⁷⁵⁾ (Стряков) を渡河した。

ペレヤスラヴリの近郊には、イジャスラフ [D112:I] の弟ウラジーミル [D115] とヤロポルク・ムスチスラヴィチ²⁷⁶⁾ [D113] が、ロシ川の民²⁷⁷⁾ を引き連れて、布陣して待ち伏せていた。

さて、イジャスラフ [D112:I] は、ユーリイ [D17] の進軍の報を聞くと、〔キエフ人に向かってこう言った〕。「かりに、かれ〔ユーリイ〕が息子たちだけを引き連れてきたのなら、かれが望む幾らかの領地を取られてもしかたないだろう。しかし、かれはわしを討つために、ポロヴェツ人とわが敵であるオレーグ一族の諸公を引き入れたからには、わしは戦うつもりである」²⁷⁸⁾。

271) この「取り決め」について年代記に直接の言及はない。おそらく、1149年3月末～4月初めにヴォルガ川の氷が緩んだため、対ユーリイ [D17] の遠征を中止して、二人が別れたときに、この取り決めを行ったと考えられる。

272) この表現については、本稿注 154 を参照。

273) 当時、ヴラジミルはイジャスラフ [D112:I] の弟のスヴァトポルク [D114] が公として支配しており、イジャスラフは援軍を求める使者を派遣したのだろう。

274) 「クウディノヴォ村」(Кудьново село) は所在不明だが、現在のストロコヴァ (Строкова) (ペレヤスラヴリから北東に約 14km) 近辺にあったと推定される。

275) 「ストリャコフ川」(Стряков) は、現在のストロコヴァ (Строкова) のあたりを流れていたと推定される。[Покажник: Янчине сільце の項]

276) ヤロポルク・ムスチスラヴィチ [D113] の名は唐突にここにあらわれることから、これをスヴァトポルク [D114] の誤記と解釈する説もある。確かに、すぐ上にイジャスラフがヴラジミルのスヴァトポルク [D114] に援軍要請の使者を遣ったという記述があり、これをうけてスヴァトポルクがやって来たとして解釈するのは自然である。ただし、『イパーチイ年代記』の諸写本、さらに『ラヴレンチイ年代記』もこの部分は「ヤロポルク」で一致しており、また以下の記述にも「ヤロポルク」の名は数回言及されていることから、スヴァトポルク [D114] とは別の兄弟の一人と考えるべきだろう。

277) 「ロシ川の民」(поршаны) は、「ロシ (Рось) 川周辺地帯」(Поросье) に住む定住遊牧民を指している。[イパーチイ年代記(2); 341 頁, 注 330] を参照。

278) ソロヴィヨフは、このイジャスラフ [D112:I] の言葉は、キエフ人をユーリイ [D17] 討伐遠征に引き入れるための口実の過ぎないと解釈している。ユーリイがモノマフ一族の出身者でイジャスラフの叔父で長上に当たることから、1147年の事態と同様に(本稿注 98 を参照)キエフ人がユーリイ討伐遠征を拒否する可能性があった。また、キエフ人にはユーリイと敵対すべき充分な動機はなかったとしている。[Соловьев 1988: С. 445]

キエフ人たちは〔戦うことを〕望まず、こう言った。「公よ、和を結びなさい。われらは進軍しません」。かれ〔イジャスラフ〕は〔キエフ人たちに〕言った。「²⁷⁹⁾ われとともに進軍せよ。軍隊をもって〔威圧して〕、かれら〔ユーリイとチェルニゴフ諸公〕と和を結べば、よき結果になるだろう²⁸⁰⁾」。こうして、キエフ人たちはイジャスラフ [D112:I] のあとから進んだ。

さて、イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35] が、かれ〔イジャスラフ [D112:I]〕のもとに援軍としてやってきた。

イジャスラフ [D112:I] はヴィテチェフ²⁸¹⁾ (Витечев) 近郊で陣を張った。そのかれ〔イジャスラフ [D112:I]〕のもとにかれの弟のロスチスラフ [D116:J] が大軍を率いて駆けつけた。二人は協議をして、ドニエプル川を渡河し、そこからアルト川²⁸²⁾ (Олто) へ向けて軍を進めた。その二人のもとへ、昼頃に知らせが届いた。〔敵の〕射手たちはすでにストリャコフ川を渡り、またポロヴェツ人たちもストリャコフ川を渡って、**[379]**〔ペレヤスラヴリの〕城市へ向かっているとのことだった。イジャスラフ [D112:I] とロスチスラフ [D116:J] は、自軍に戦闘準備をさせて、ペレヤスラヴリへと進軍した。

そのとき、二人のもとに、ひとりの原野のポロヴェツ人が、急ぎ引き立てられてきた。これは、弓の射撃戦があったペレヤスラヴリ近郊で、捕虜として獲った男だった。二人はかれの尋問を始めた。「お前たちはどこの陣営²⁸³⁾ から来たのか」。かれは言った。「われらは遠くから来た。〔わたしは〕、ユーリイ [D17] のために速駆してやってきたのだ。それは、お前が到着する前に、ペレヤスラヴリを降伏させるためである」。イジャスラフ [D112:I] はこれを聞くと、このポロヴェツ人をただちに斬り殺すよう命じた。こうして〔その身体は〕帳のように〔裂かれた〕²⁸⁴⁾。

279) 『ラヴレンチイ年代記』の並行記事には、この個所に「和を結ぶために」(ако миръ будет) の句がある。

280) タティーシチェフによると、このあとに「わしにとって、居室にこもったまま、襲来してくる敵と協定を結ぶなど意に沿うことではない。ここ〔キエフ〕で籠城することも、かれ〔ユーリイ〕に和を請うことも、すべての兄弟たちを前にして恥をさらすことになる」とイジャスラフ [D112:I] が言ったとされている。ただし、その出典は不明。[Татищев Т. II, 1995: С. 190]

281) 「ヴィテチェフ」(Витечев) はドニエプル川左岸のキエフとペレヤスラヴリとのほぼ中間地点でストゥグナ川河口近くにある城砦都市。現在のヴィタチウ (Витачів) 村に相当する。

282) 現在のアルト川 (Алът) のこと。本稿注 99 も参照。

283) この「陣営」(становище) はポロヴェツ人の遊牧・戦闘の単位となる部族共同体を指している。

284) 原文は тако съ опоною で опона は教会などで仕切りに用いるカーテンのこと。難読の個所だが ([СлРЯ XI-XVII Т. 13, С. 32] 参照)、『原初年代記』1103年の記事のスーテニ川の勝利の際に、捕虜としたポロヴェツ侯ベルヂュズをモノマフ公が「斬り殺して四肢をばらばらにした」[『原初年代記』301頁]とある。ポロヴェツ人に対する同様の懲罰方法が、ここでもとられたと解釈して「帳のように裂かれた」と訳した。

二人は黒頭巾族²⁸⁵⁾と自分の下級従士たちを、先行してペレヤスラヴリへと行かせた。そして二人は、自分たちの部隊を率いてその後から進軍した。イジャスラフ [D112:I] とロスチスラフ [D116:J] のところの射手たちはやって来ると、城市〔ペレヤスラヴリ〕の方角から来た兵たちを撃ち倒し、かれらの部隊のところまで追いやった。イジャスラフ [D112:I] とロスチスラフ [D116:J] は、ペレヤスラヴリに近づくと、アリト川²⁸⁶⁾ (Лтиця) を渡り、自分の部隊を率いて城市の向こう側に回り込み、トルベジ川の河畔に布陣した。

一方、ユーリイ [D17] は、ストリャコフ川の河畔で3日間陣を張って、4日目にストリャコフ川を出発して城市を迂回し、早暁に軍備をととのえ、土塁の間に陣を張った²⁸⁷⁾。自分たちの部隊とともに、トルベジ川の両岸、狩猟場の向こうの林の所に布陣した。双方の部隊は夕方まで陣を構えたままだった。そして、部隊の間では射手が射撃し合うだけだった。

夜が来て、イジャスラフ [D112:I] とロスチスラフ [D116:J] は、城市からトルベジ川の上流の河岸で宿営した。ユーリイ [D17] はやはり林のところに陣を張り **[380]** 宿営した。

その夜、ユーリイ [D17] はかれ〔イジャスラフ [D112:I]〕のもとに使者を遣って、こう言った。「兄弟よ、そなたは、わしを討伐しようとやって来ては、〔わが〕土地を掠奪してきた。そして、わしから年長者の権利を剥奪した。兄弟であり息子なる者²⁸⁸⁾よ、今となっては、わしは、ルーシの地のため、キリスト教のために、キリスト教徒の血を流すつもりはない。わしにペレヤスラヴリを与えよ。わしが息子²⁸⁹⁾をペレヤスラヴリの公として就けられるように。そなたは、キエフで〔公として〕座して、支配するがよい。もし、そなたがそのことを望まないのなら、神がすべてを見そなわすであろう²⁹⁰⁾」。

285) 「黒頭巾族」(черныя клобуки) はイジャスラフと同盟している定住遊牧民。[イパーチイ年代記(2); 341頁, 注329]を参照。

286) 本稿注282を参照。

287) このペレヤスラヴリに近づいた軍勢が「土塁の間に陣を張る」行為は、『原初年代記』6603(1095)年の記事で、ポロヴェツの使者クィタンの行為としても描かれている[ロシア原初年代記: 248頁]。ペレヤスラヴリの城市からトルベジ川を挟んだ東側に広がる原には、この頃から二重の大きな土塁が巡らせてあったのだろう。

288) 原文は単に「兄弟と息子」(брате и сыну)への呼びかけだが、ここではイジャスラフ [D112:I] 一人を呼びかけたもの。「息子」が加わっているのは、ユーリイが一族の年長制序列で、イジャスラフよりも上位にあることを主張するためである。

289) この後にユーリイがキエフ公になると、すぐに息子のロスチスラフ [D171] をペレヤスラヴリの公座に就けているところから見て、これはロスチスラフ [D171] を念頭に置いて言っていることは明らかである。

290) 「神がすべてを見そなわす」(за всеиь Богъ)の表現は、宣誓儀礼における懲罰条項の定型表現。『イパーチイ年代記』訳注(2): 注192, 290参照]。ここでは、自分の提案が受け容れられなければ、戦争で決すると言っており、背後には、諸公の間の戦争は一種の「神判」であるという考え方があ

イジャスラフ [D112:I]にはこれ〔提案〕が気に入らず²⁹¹⁾、この使者を拘留して帰さなかった。そして、〔ペレヤスラヴリの〕城市から全軍を外に出すと、〔防塁の間の〕低地に布陣し、菜園の向こう側にも陣営を敷いた。

翌朝、イジャスラフ [D112:I]は大天使聖ミハイル教会²⁹²⁾で聖体礼儀に参列し²⁹³⁾、教会堂を出た。すると、主教エフィーミー(Ефимьян)が涙を流して、かれにこう訴えた。「公よ、そなたの叔父と和解なさいませ。そうすれば、神から多くの救いを受けるでしょう。そして、みずからの地を大いなる厄災から免れさせることになるでしょう」。

かれ〔イジャスラフ〕はこれに同意しようとせず、多数の兵に望みをかけて²⁹⁴⁾こう言った。「われは、みずからの命を賭して²⁹⁵⁾、キエフとペレヤスラヴリを獲得したのだ²⁹⁶⁾」。

こうして、ユーリイ [D17]に向かって軍を進めた。ユーリイ [D17]はヤンツィノ村(Янцино сельце)に向こうに布陣していた。両軍は晩課²⁹⁷⁾のときまで対峙していた。

イジャスラフ [D112:I]と弟のロスチスラフ [D116:J]、(ウラジーミル [D115]と息子のムスチスラフ [I1])²⁹⁸⁾、ヤロポルク [I3]が集まり、さらに自分たちの貴族と従士たちをみな召集して、かれらと評議を始め、ユーリイ [D17]に対して、トルベジ川を渡って対岸へと攻めようと考えていた。すると、一部のかれ〔イジャスラフ〕の家臣たちが言った。「公よ。かれ〔ユーリイ〕の後を追わないほうがよいでしょう。【381】かれ〔ユーリイ〕は土地を奪い取ろうとしてやっ

291) リヤスコロンスキイによれば、イジャスラフはひとたびペレヤスラヴリの城市がユーリイの手に落ちれば、キエフも将来危険にさらされると考えた、としている。[Ляскоронский 1987: С. 367]

292) ペレヤスラヴリの首座教会。1080～1090年代に主教エフレムによって創建された。[Иловайский 1996: С.278]

293) 1149年8月21日の日曜日の主日聖体礼儀のこと。

294) 「多数の兵に望みをかけて」(надѣяться на множество вои)の表現は、1123年にモノマフ一族に反抗してヴラジミルで戦死したヤロスラフ・スヴァトポルクヴィチ [B32]の「傲慢」の罪をとがめる文脈の中で2度繰り返してあらわれている([イパーチイ年代記(2):292頁])。年代記記者の姿勢はこの部分でも変わらないと考えられるので、この文言はイジャスラフ [D112:I]を非難する意味合いを持つと解釈できる。

295) 「命を賭して(…)獲得した」の原文は добыл есми головою своеюで、この голова(命)の語は、1146年にイジャスラフ [D112:I]がキエフのイーゴリ [C42]を討つために軍を結集したときに兵を前にして言った「そなたたちの前に屍(命)を晒す」(голову положи перед вами)の宣言に使われており、これに対応している。

296) 上の注294と同様の主旨で、イジャスラフ [D112:I]のこの言葉は、かれの「傲慢」さのあらわれとして理解すべきだろう。

297) 日没から夕方にかけての奉事のこと。

298) カッコ内の「ウラジーミル [D115]と息子のムスチスラフ [I1]」の部分は、イパーチイ写本にはなく、フレブニコフ写本にある追加的な読み。以下の記述でこの二人の名が出てくることから、それにあわせて、ここに追加されたものか。

て来たのであり、今、苦しい状態にあります。かれはここにやって来たものの、何も得ることができないでいます。もう、引き返そうとしており、今夜には撤退するでしょう。それゆえ、公よ、あなたはかれの後を追うのは止められよ」。しかし、別の家臣たちはこう言って強く行動を促した。「公よ、行ったほうがよい。神があなたを導いたのだから。かれを取り逃がすことがないように」。

イジャスラフ [D112:I] は両者の意見を訊いてから、かれら〔敵〕の後を追うことを選んだ。そして、自分の軍勢を武装させ、かれ〔ユーリイ〕を追って、トルベジ川の対岸へと進軍した。自分の部隊を率いて渡河し、まだ丘を登る前に、クズネチイ門²⁹⁹⁾ (Кузнечий вoрот) の向かいの川敷で陣を張った。

正午の頃だった³⁰⁰⁾。そこへ、ユーリイ [D17] の部隊から逃亡兵たちが駆けて来て、イジャスラフ [D112:I] のもとに来ようとしていた。イジャスラフ [D112:I] の護衛部隊はこれを見ると、慌てふためいて、「敵襲だ!」と叫んだ。イジャスラフ [D112:I] はこれを聞くと、自分の部隊を武装させ、クラスニイ・ドゥヴォール³⁰¹⁾ (Красный двор) のある平地へ向かって軍勢を放った。

ユーリイ [D17], スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43], スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] は、敵の部隊が進軍してくるのを見て、かれらもやはり自軍に対して、武装してこれに対抗することを命じた。そして、土塁を越えて布陣をした。そして、射手たちが部隊のあいだで戦っているのを見て、夕方まで自分の軍兵を待機させた。そして、ユーリイ [D17] は自分たちの部隊を転回させて、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43], スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] とともに、自分たちの陣営へと引き返してしまった。

イジャスラフ [D112:I] はそのことを聞き、〔事態を〕確かめると、自分の弟のロスチスラフ [D116:J], **[382]** イジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35], 二人の弟ウラジーミル [D115] とヤロボルク [D113], 自分の息子のムスチスラフ [I1], ウラジーミル・アンドレエヴィチ [D181] 等と評議して、敵のあとを追いかけてしようとした。しかし、かれらのうちある者は「敵のあとを追うことはありません。陣営へと行かせておけばよい。もはや〔勝利は³⁰²⁾〕確実なのですから」とかれ〔イジャスラフ〕に進言し、別の者は「公よ、急ぎ追いかける時です」と言った。イジャ

299) クズネチイ門 (Кузнечий вoрот) は、ベレヤスラヴリ城市の東側、トルベジ川を挟んで原と丘に面した城門と考えられる。

300) これは、1149年8月22日の月曜日の正午ということになる。

301) 「クラスニイ・ドゥヴォール」(Красный двор) は一般には「美しい屋敷」を意味し、宮殿を指すことが多い。ここでは、ベレヤスラヴリの内城から東へ3kmほどの、公の離宮があった場所と考えられる。

302) 何が「確実」であるか原文には説明がないが、文脈を勘案してこう訳した。なおウクライナ語訳は「あなたにとって事態は確かに進んでいる」[Літопис руський, 1989: С. 225], ポーランド語訳は「確実に戦いはないでしょう」[Goranin, p.80] と解している。

スラフ [D112:I] は、これ〔後者〕を気に入って、敵のあとを追った。

ユーリイ [D17] とスヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43]、スヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] は、敵の部隊が自分たちのあとを追いかけてくるのを見ると、再び反転して、自軍を率いて敵に向かって行った。ユーリイ [D17] は、息子〔ロスチスラフ [D171]〕を自分の右翼に、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] と甥のスヴァトスラフ・フセヴォロドヴィチ [C411:G] を左翼に配した。

双方の部隊は遭遇した。日が昇りはじめたとき³⁰³⁾、合戦が始まった。凄惨な斬り合いが繰り広げられた。最初に逃げ出したのは、ロシ川沿いの住民、それからイジャスラフ・ダヴィドヴィチ [C35]、その後からキエフ人が逃げ出した。また、ペレヤスラヴリ人の中では、「ユーリイ [D17] こそが自分たちの公である。われらは、かれを遠くから呼び寄せたのだ」との流言が広まり、ペレヤスラヴリ人たちはそのように言って逃げ出し始めた。イジャスラフ [D112:I] とロスチスラフ [D116:J] の部隊の兵が、この有り様を見て、混乱し始めた³⁰⁴⁾。

イジャスラフ [D112:I] は手勢を率いて、スヴァトスラフ・オリゴヴィチ [C43] の部隊およびユーリイ [D17] の部隊の半分と戦いに突入した³⁰⁵⁾。〔イジャスラフ〕は敵の軍勢をかき分けて進むと、その先に、〔味方の〕全軍が敗走を始め、ある者たちは殺され、別の者たちは捕虜に獲られているのを目撃した。イジャスラフ [D112:I] は自軍が敗走し、**【383】** 打ち破られているのを目の当たりにして、自分も逃げ出した。〔ドニエプル川を〕渡河して、カネフ³⁰⁶⁾ (Каневъ) へと逃げ出し、総勢 3 人だけでキエフに到着した。これは、8 月 23 日のことだった。

翌日³⁰⁷⁾、ユーリイ [D17] は、神の栄光を称賛しながら、ペレヤスラヴリに入城し、大天使

303) 「日が昇りはじめたとき」(Яко солнцю восходящю) は、『ラヴレンチイ年代記』では「日が沈もうとしているとき」(Яко солнцю заходящю) となっており、『ヴォスクレセンスカヤ年代記』『ニコン年代記』もこちらの読みを採用している。時間経過の順序からみて、戦闘が開始されたのは日没の頃と解すべきであり [Ляскоронский 1987: С. 369]、開戦の刻を日の出と合わせる『イパーチイ年代記』の読みは年代記記者(編者)の文体的嗜好による改変の結果と考えるべきだろう。[Вілкул 2004: С. 70]

304) イパーチイ写本の読みでは「イジャスラフとロスチスラフのポロヴェツ人がこの有り様を見た」(видивше же половци Изяславлі и Ростиславлі) と不自然な内容になっていることから、「混乱した」(смятошася) の付加を含む、フレーブニコフ写本の読みを採用した。

305) 「戦いに突入した」(събхася) は、フレーブニコフ写本で追加されている読みを採用した。

306) カネフ(Каневъ) は、ドニエプル右岸にある現在のカニウ(Канів)で、ペレヤスラヴリから南へ 35km ほど離れている。自軍が壊滅したのを見たイジャスラフ [D112:I] は、ドニエプル川を目指して南へ逃走し、なんとかドニエプル川を渡河して、キエフ公領内の最寄りの城砦であるカネフに身を寄せたと考えられる。[イパーチイ年代記(2): 334 頁, 注 280] も参照。

307) 1149 年 8 月 24 日に相当する。

聖ミハイルに拝礼して³⁰⁸⁾、3日間ペレヤスラヴリに滞在した。そしてそこから、部隊を引き連れてキエフへと軍を進めた。

かれ〔ユーリイ〕は、キエフの近くまでやって来ると、聖ミハイル³⁰⁹⁾〔ヴィドビツキイ修道院〕の対岸の川敷に陣を張った。

イジャスラフ [D112:I] は、自分の弟ロスチスラフ [D116:J] と話を付けて、キエフ人たちに向かってこう宣言した。「われらの〔父方の〕叔父〔ユーリイ [D17]〕が到来した。われら二人は、そなたたちに、おおやけに問う。そなたたちは、われらのために戦うつもりはあるか」。

かれら〔キエフ人たち〕は言った。「われらの主人たる二人の公よ。われらを最後まで破滅させないで下さい。今、われらの父たち、兄弟たち、息子たちは部隊におり、その一部は捕虜となり、一部は撃ち殺され、武器を取り上げられています。今となつては、われらが捕虜に獲られないようにするために、どうか自分たちの領地へ退去して下さい。あなたたち二人は、われらがユーリイ [D17] とは反りが合わないことは知っています。今日まで、われらはあなたたちの軍旗の下にあったのですから、われらはいつでもそこに結集する用意があります」。

イジャスラフ [D112:I] とロスチスラフ [D116:J] は評議して、それから別れた。イジャスラフ [D112:I] は〔キエフを〕退去して、妻子と共にヴラジミルへと出発した³¹⁰⁾。ロスチスラフ [D116:J] はスモレンスクへ帰った。イジャスラフ [D112:I] は、府主教クリメント (Клим) を伴って一緒に行った。

参考文献

Бережков 1963 — Бережков Н.Г. Хронология русского летописания. М., 1963.

Вілкул 2004 — Вілкул Т. Літопис Святослава Ольговича у складі Київського зводу XII ст. // До джерел. Збірник наукових праць на пошану Олега Купчинського з нагоди його 70-річчя. Т. II (Київ-Львів, 2004), 63–74.

Войтович 2006 — Войтович Леонтій, Княжа доба: Портрели еліти. Біла Церква, 2006.

Грушевський Т. 2 — Грушевський М. С. Історія України-Руси: Т. 2. XI-XIII вік. К., 1992.

308) ペレヤスラヴリの大天使聖ミハイル首座教会のこと。本稿注 292 を参照。

309) このヴィドビツキイ修道院の対岸は、ユーリイの息子ロスチスラフ [D171] が、財産と配下の銃兵を奪われて、キエフから追放された場所と同じである。本稿注 231 を参照。

310) 『ラヴレンチイ年代記』によれば、イジャスラフは妻子とともに「ルチェスク」(Луческ) (現在の西ウクライナの「ルツィク」(Луцьк) に行ったと書かれており、ヤン・ドゥウゴシユの著作も同様に「ルツィクへ退去した」(in Luczsko divertit) [Щавелева 2004: С. 167, 320] としている。これは、ヴラジミルに到着後まもなく、近く(ヴラジミルから西北西へ約 70km) のルチェスクへ移ることになったことを指している考えられる。

- Зайцев 2009 — Зайцев А. К. Черниговское княжество X - XIII в.: избранные труды. М., 2009.
- Иловайский 1996 — Иловайский Д. И. История России. Становление Руси. М., 1996.
- Литвина, Успенский 2010 — А. Ф. Литвина, Ф. Б. Успенский. Монастырь св. Симеона в Киеве и русско-немецкие связи второй половины XI в. // Траектории традиции: Главы из истории династии и церкви на Руси кон. XI — нач. XIII века. М., 2010. С. 9 – 20.
- Літопис руський, 1989 — Літопис руський / Пер. з давньорус. Л. Є. Махновця; Відп. ред. О. В. Мишанич. К.: Дніпро, 1989. (<http://litopys.org.ua/litop/lit.htm>)
- Лихачев 1985 — "Слово о полку Игореве" и культура его времени. изд. 2-ое. и допол. Л., 1985.
- Ляскоронский 1887 — Ляскоронский В. Г. История Переяславльської землі с древнейших времен до половины XIII столетия. Киев, 1897.
- Насонов 2002 — Поселения, урочища и реки Черниговской земли (Приложение к очерку)// Насонов А. Н. "Русская земля" и образование территорий русского государства. СПб., 2002.
- Никитин 2007 — Никитин А. Л. Текстология русских летописей (XI - начала XIV вв.). Выпуск 2. Южно-русское и владимирское и владими́ро-суздальское летописание XII в. М., 2007.
- Покажчик — ПОКАЖЧИК ГЕОГРАФІЧНО-АРХЕОЛОГІЧНО-ЕТНОГРАФІЧНИЙ <http://litopys.org.ua/litop/lit31.htm>
- Поппэ 1996 — Митрополиты и князья Киевской Руси / А. Поппэ // Подкальски Г. Христианство и богословская литература в Киевской Руси (988 – 1237 гг.). СПб., 1996.
- ПСРЛ Т.7, 2001 — Летопись по Воскресенскому списку. (Полное собрание русских летописей. Том VII) М., 2001.
- Рыбаков 1951 — Схематическая карта населенных пунктов домонгольской Руси сост. Б. А. Рыбаков // История культуры Древней Руси. Материальная культура. М.; Л., 1951.
- Святая Русь Т.1 — Святая Русь. Большая энциклопедия русского народа. Русская икона и религиозная живопись. М., 2011.
- Словарь-СПИ 4 — Словарь-справочник "Слова о полку Игореве". Вып. 4, Л., 1973.
- СЛРЯ XI-XVII, Т.1 — Словарь русского языка XI-XVII вв. Т. 1
- Соловьев 1988 — Соловьев С. М. Сочинения Кн. 1: История России с древнейших времен Т. 1-2. М., 1988.
- Татищев Т. II, 1995 — Татищев В. Н. Собрание сочинений Тома II и III: История российская. Ч. II. М., 1995.
- Фроянов 2012 — Фроянов И. Я., Древняя Русь IX-XIII веков. Народные движения. Княжеская и вече́вая власть. М., 2012.
- Goranin 1995 — Goranin E. Latopis kijowski 1118-1158. przełożył i komentarzami opatrzył Edward Goranin (Slavica Wratislaviensia 86). 1995, Uniwersytetu Wrocławskiego in Wrocław.
- Rusian genealogy — Rusian genealogy: Maintained by: Christian Raffensperger and David J. Birnbaum (<http://genealogy.obdurodon.org/about.php>)
- 石戸谷 1963 — 石戸谷重郎「チェリヤージ考」『奈良学芸大学紀要』11 - 1, 1963 年。
- 石戸谷 1980 — 石戸谷重郎『ロシアのホロープ』大明堂, 1980 年。
- イパーチイ年代記 (2) -- 中沢敦夫, 藤田英実香『イパーチイ年代記』翻訳と注釈 (2) — 『キエフ年代記集成』(1118 ~ 1146 年)『富山大学人文学部紀要』(62 号, 2015 年 2 月)
- スズダリ年代記 [II] — 「スズダリ年代記訳注 [II]」『古代ロシア研究』21 号, 2003 年, 13 ~ 44 頁。
- ノウゴロド第一年代記 [I] — 「ノウゴロド第一年代記古輯 (シノド本) 訳・注」『古代ロシア研究』12 号,

1978 年。33-56 頁。

ロシア原初年代記 — 國本哲男, 山口巖, 中条直樹訳 『ロシア原初年代記』, 名古屋大学出版会, 1987 年

※ 原文との対照の便宜のために, 本稿より, 翻訳文の当該部分に, 底本 (Полное собрание русских летописей: Т. II, Ипатьевская летопись. Изд. 2-е. СПб., 1908.) の丁付 (この場合は столбцы [欄]) の番号を **【332】** のように付すことにした。

[後記] 本稿は 2014 年度に行われた共同研究「初期ロシア年代記の史料学的研究」の成果であり, 共同執筆者, 藤田英実香は富山大学人文学部研究生 (2015 年 4 月から, 京都大学文学研究科西洋史学専修修士課程在籍) である。

